太宰府市の文化財　第 104 集

大宰府条坊跡 39

― 第 265 次調査 ―

平成 20 年
（2008）

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡39 ―太宰府市の文化財 第104集―

太宰府市教育委員会

25692H.indd 1
08.12.8 10:50:13 AM

太宰府市の文化財　第 104 集

大宰府条坊跡 39

― 第 265 次調査 ―

平成 20 年
（2008）

太宰府市教育委員会

1 大宰府条坊跡第265次本文（中表紙～目次）.indd　1　　2008/11/04　17:16:22

1 大宰府条坊跡第265次本文（中表紙～目次）.indd　2　　2008/11/04　17:16:22

序

本報告書は、共同住宅建設に伴い太宰府市坂本二丁目地内にて、平成18年度に実施した大宰府条坊跡第265次調査の報告書です。

調査地域は、大宰府政庁跡の西850mほどの所に位置し、奈良時代における大宰府官人居住域である大宰府条坊跡内に所在しています。調査の結果、奈良時代中頃から平安時代中頃にかけての掘立柱建物7棟を検出いたしました。特筆すべきものとしては、奈良時代中頃に建造されたと考えられる3間×6間の建物占有面積が大きな建物跡や、これら建物の短期建替えが確認されたことをあげることができ、隣接する第264次調査と合わせると条坊内では一般的な状況ではなく、当該地域が持つ特異性を表現するなど貴重な成果を得ることができました。

本書が、学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、当該調査に対しご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼を申し上げます。

平成20年9月

太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

1 大宰府条坊跡第265次本文（中表紙～目次）.indd　3　2008/11/04　17:16:22

例　言

1. 本書は大宰府条坊 265 次調査の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査地点は太宰府市坂本 2 丁目 98-1、98-3、98-4、98-5 に所在し、調査対象面積は 401.61 ㎡である。
3. 発掘調査は太宰府市教育委員会の監理のもとに、岡三リビック株式会社が平成 18 年 7 月 19 日から同年 10 月 5 日にかけて実施した。
4. 遺構の実測図作成および写真撮影は柳田利明・中下まり江・倉園眞記が担当し、調査地の空中写真は有限会社空中写真企画に依頼した。
5. 遺構実測の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準とし、本書に示す方位は座標北（G.K）を指す。また磁北は座標北から 6°　30″西傾する。
6. 本書に掲載した遺物番号は以下の内容で表わされるが、本文中では「条」は省略する。

条　265　SB　001

遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

7. 報告書の作成についても太宰府市教育委員会の監理のもとに、岡三リビック株式会社が行った。
8. 本書の執筆は遺構を堀苑孝志、遺物を村上孝司が担当し、編集は堀苑が行った。
9. 遺物の実測は佐田裕一、写真撮影は倉園眞記が担当した。
10. 遺構図・遺物実測図の浄書は Adobe Illustrator CS Ⅲを用い、松尾祥子、倉園眞記が担当した。
11. 遺構内から出土した樹木部材の樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
12. 写真図版については付属の CD-ROM に収録しており、詳細は CD-ROM 内のテキストデータ「はじめにお読み下さい」を参照のこと。
13. 出土遺物・図面・写真等の記録は、太宰府市教育委員会が保管する。
14. 本書に記載された土器・陶磁器・瓦・硯の分類基準は以下の文献による。
    太宰府市教育委員会　1983『大宰府条坊跡Ⅱ』
    太宰府市教育委員会　1992『宮ノ本遺跡Ⅱ－窯跡篇－』
    太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡 XV』
    九州歴史資料館　2000『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』
    横田賢次郎　1983「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一試案－」『九州歴史資料館 研究論集 9』
15. 本書に記載する時期区分については、下記の文献に基づく。
    山本信夫　1992「大宰府」『第 1 回古代土器研究会資料』

1 大宰府条坊跡第265次本文（中表紙～目次）.indd　4　2008/11/04　17:16:22

本文目次

Ⅰ．遺跡の位置と歴史 …… 1

Ⅱ．調査組織 …… 4

Ⅲ．調査に至る経緯 ……（堀苑孝志・中島恒次郎） 6

Ⅳ．調査方法 …… 6

Ⅴ．層　位 …… 7

Ⅵ．調査の報告 …… 10
　１．遺構 ……（堀苑孝志） 10
　２．遺物 ……（村上孝司） 22

Ⅶ．大宰府条坊跡第 265 次調査出土柱材の樹種 …… パリノ・サーヴェイ㈱ 59

Ⅷ．まとめ ……（堀苑孝志） 63

付表
　掘立柱建物跡・柱穴列・溝の座標・方位一覧
　遺構番号台帳
　掘立柱建物跡・柱穴列個別遺構番号台帳
　出土遺物一覧表
　遺物計測表

写真図版
　木材　Pla.1
　遺構　Pla.2 ～ 5

1 大宰府条坊跡第265次本文（中表紙～目次）.indd　2　　2008/11/04　17:16:22

Ⅰ．遺跡の位置と歴史

1．遺跡の立地と環境

太宰府市は北から東側にかけて四王寺山、宝満山などの三郡山系の低山が連なる。南側も背振山系の東端にあたる天拝山を望み、盆地的な立地環境にある。そしてこれら山系の切れる合間を御笠川が通り抜け、先には福岡平野が広がり、さらに北流して博多湾へと注ぐ。一方の南東側も狭隘な山間の先に筑紫平野が広がっており、太宰府はこれら大きな平野をちょうど繋ぐ帯状の地形にある。

さて、市内中心部は大まかに標高 30 ～ 40 mの低位面と、これより高い中位面の平坦部で占められている。ここでは北部九州で広く分布する ASO－4（9 万年前）が、低位面では流失しており、中位面でも面的な広がりをもたない。AT（2 万 1 千年前）については､低位面上に広く確認されている。これに含まれる植物腐食に由来した粘土層を放射性炭素年代測定すると、1 万 2 千年前に二次堆積したものであることが判明しており、広い範囲で低湿地化していたことを物語る。

2．遺跡の歴史的背景

本調査区の性格は条坊跡内に所在するだけに関連性が深く、こうした視点を中心に歴史的な背景を眺めていくことにする。天智 2（663）年に白村江で、日本と百済の連合軍が、新羅・唐の連合軍に破れたことにより、国際的緊張が一気に高まりをみせる。翌年には水城が、翌々年には大野城と基肄城が相次ぎ防衛施設の構築が開始された。かつての博多湾付近にあった那津官家も、こうした影響を受けて、内陸側の大宰府の地に移されたのもこの時期を前後してと考えられている。やがて緊張が緩むと , 大宰府は外交上の拠点として、あるいは西海道に属する九国三島を統括する地方最大の官衙として栄華を極めることになる。それは、まさに「遠の朝廷」とも表現される所以であり、中央の都城に倣い碁盤の目の状に都市計画も進められたと考えられている。その痕跡は、現在市内の各所の発掘において確認されている。

この大宰府も数度の変遷を経てきたことが、政庁の調査から知られるようになった。まず Ⅰ 期は掘立柱建物で構成された施設で、7 世紀後半から 8 世紀初頭においての構築と推測されている。次のⅡ期では、政庁南門と中門の基壇から地鎮具として埋めらた須恵器の壺が出土している。これより 8 世紀前半に、造営が行われたことが指摘されている。Ⅲ期は焼土層の上に礎石が配されるもので、天慶四（941）年に大宰府を灰燼とした藤原純友の乱以降の再建とみられる。こうした変遷は条坊内の遺構の在り方においても、類似する傾向を窺い知ることができる。その後の政庁は 12 世紀前半に、ほぼ機能を失い廃絶したことが発掘調査の成果から指摘されている。条坊内においても 11 世紀末から 12 世紀前半には、条坊西側から中央部にかけ遺構の廃絶が顕著になる傾向が示される。

さて本書で取り上げる調査地点は、四王寺山南側の丘陵上に位置している。ここは政庁の西側にあたり、中心から 0.8km ほどの距離にある。ところで条坊の存在は、鏡山猛の『大宰府都城の研究』（1968）によって初めて指摘されことに始まる。その規模は南北二十二条（約 2.4km）､東西十二坊（約 2.6km）に及び、一部は筑紫野市にまで広がることが推測される。ちなみにその条坊に則して、今回の調査地点を比定してみると右郭三条七坊にあたることが分かる。それは南側に隣接する第 264 調査で、両側に溝を伴う四条路が発見されている点からも蓋然性が高いと言えよう。

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　1　2008/11/04　17:20:00

Fig.1　太宰府市とその周辺の遺跡（1/25,000）

1. 大野城跡
2. 横岳山崇福寺跡
3. 陣ノ尾遺跡
4. 筑前国分寺跡
5. 辻遺跡
6. 国分松本遺跡
7. 筑前国分尼寺跡
8. 国分千足町遺跡
9. 御笠団印出土地
10. 水城跡
11. 大宰府政庁跡
12. 観世音寺
13. 遠賀団印出土地
14. 大宰府条坊跡
15. 君畑遺跡
16. 般若寺跡
17. 市ノ上遺跡
18. 神ノ前窯跡
19. 原口遺跡
20. 篠振遺跡
21. 前田遺跡
22. 宮ノ本遺跡
23. 雛川遺跡
24. フケ遺跡
25. 尾崎遺跡
26. 脇道遺跡
27. 殿城戸遺跡
28. 剣塚遺跡
29. 唐人塚遺跡
30. 峯遺跡
31. 桶田山遺跡
32. 太宰府天満宮（安楽寺跡）
33. 浦城跡
34. 原遺跡
35. 杉塚廃寺跡

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　2　2008/11/04　17:20:01

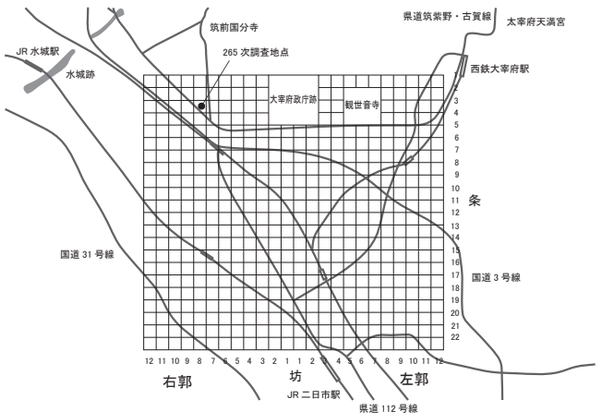


Fig.2　第 265 次調査地点位置図

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　3　　2008/11/04　17:20:02

Ⅱ．調査組織

調査・整理を実施した平成 18・20 年度の調査組織は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会

（平成 18 ／ 2006 年度）

総　括	教　育　長	關　　敏　治	
庶　務	教 育 部 長	松　永　栄　人	
	文化財課長	齋　藤　廣　之	
	保護活用係長	久保山　元　信	
	調 査 係 長	永　尾　彰　朗	
	主 任 主 査	齋　藤　実貴男	
		吉　原　慎　一	（7 月 1 日～）
	事 務 主 査	大　石　敬　介	（～ 6 月 30 日）
調　査	主 任 主 査	城　戸　康　利	
		山　村　信　榮	
		中　島　恒次郎	
	技 術 主 査	井　上　信　正	
	主 任 技 師	髙　橋　　学	
		宮　崎　亮　一	
	技師（嘱託）	柳　　智　子	
		下　高　大　輔	

（平成 20 ／ 2008 年度）

総　括	教　育　長	關　　敏　治
庶　務	教 育 部 長	松　田　幸　夫
	文化財課長	齋　藤　廣　之
	保護活用係長	菊　武　良　一
	調 査 係 長	永　尾　彰　朗
	主 任 主 査	吉　原　慎　一
		齋　藤　実貴男
調　査	主 任 主 査	城　戸　康　利
		山　村　信　榮
		中　島　恒次郎
	技 術 主 査	井　上　信　正
	主 任 技 師	髙　橋　　学
		宮　崎　亮　一
	技師（嘱託）	柳　　智　子
		下　高　大　輔
		大　塚　正　樹

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　4　　2008/11/04　17:20:03

岡三リビック株式会社　埋蔵文化財調査室

（平成 18 ／ 2006 年度）

社　　長	梅　林　文　夫	
九州支社長	野　田　高　志	
部　　長	大城戸　秀　人	（建設システム部　埋蔵文化財調査室）
室　　長	堀　苑　孝　志	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
研　究　員	入　江　俊　之	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
	青　木　　誠	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
	柳　田　利　明	（埋蔵文化財調査室）
調査補助員	中　下　まり江	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
	倉　園　眞　記	（埋蔵文化財調査室　九州分室）

（平成 20 ／ 2008 年度）

社　　長	梅　林　文　夫	
九州支社長	野　田　高　志	
部　　長	大城戸　秀　人	（建設システム部　埋蔵文化財調査室）
室　　長	堀　苑　孝　志	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
研　究　員	村　上　孝　司	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
調査補助員	松　尾　祥　子	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
	中　下　まり江	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
	倉　園　眞　記	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
	佐　田　裕　一	（埋蔵文化財調査室　九州分室）
整 理 作 業	加　集　和　子	
	山　本　良　子	

調査指導・助言者

馬　田　弘　稔（九州歴史資料館）、小 鹿 野　　亮（筑紫野市教育委員会）

河　合　英　夫・北　平　朗　久（㈱玉川文化財研究所）

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　5　　2008/11/04　17:20:03

Ⅲ．調査に至る経緯

調査は太宰府市坂本２丁目 98-1 外で計画された共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査である。当該地は周知の遺跡である大宰府条坊跡内に所在することから、太宰府教育委員会が確認調査を実施した。その結果、埋蔵文化財が包蔵されていることが確認され、かつ建設計画上、埋蔵文化財破壊を伴うものであったことから、地権者ならびに建設請負業者（以下「開発事業者」と記載）との協議の結果、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。開発の対象面積は 996.18 ㎡で、遺構に影響が及ぶと判断される 401.61 ㎡が発掘調査対象とされた。

当初、太宰府市教委による直営調査を実施することで内部調整を行っていたが、調査着手までの待ち期間１年を短縮することが困難となったため、開発事業者と協議の上、外部機関への発掘調査委託事業として実施することで合意を得た。調査委託については、従来どおり指名競争入札による委託業者選定を実施し、結果として、岡三リビック㈱を受託社として大宰府条坊跡第 265 次調査を実施することとなった。調査期間は、平成 18 年７月 19 日から同年 10 月５日である。なお隣接して専用住宅があることから、調査区に面する側には防塵用のネットフェンスを平成 18 年７月 21 日に設置し、バックホウによる表土掘削は 25 日から行った。廃土は敷地内に転圧しながら山積みしていったが、当初予想を上回る土量となり急遽 10 トンダンプで場外へと搬出することにした。

時期的に夏場の野外作業ということもあり、作業員の体力の消耗は著しく体調管理にはかなり配慮せねばならず、安全衛生や効率面が最後まで危惧させられた。また連日「定時」にくる夕立には、作業を中断させられては空を見上げ恨めしく思うばかりで、雨量の多い日など調査区内は瞬く間にプールと化していく様であった。漸く終盤を迎えた頃には、記録的な猛威を奮った台風 13 号が福岡市を直撃し、防音対策のため設置していたフェンスの支柱が隣家の外壁を破損するなどした。

それでも掘立柱建物跡９棟をはじめ、官衙域の範囲を考える上で条坊跡の新知見が得られたことは、今後の文化財保護に大いなる成果を得ることができた。

Ⅳ．調査方法

調査方法は発掘および整理作業において『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（2001 年９月改正）に従い実施した。また、これに記載されない詳細な部分については、太宰府教育委員会の監理の基、同等の成果物なるように努めた。

本調査区は事前の確認調査において柱穴と思われる遺構が、現地表面から約 1.3 m下で確認されている。確認面数は１面で、部分的に２面ある可能性も指摘されていた。そこでバックホウにより、客土を除去することからはじめた。遺構が確認できる面近くまで達すると、慎重に掘り下げ、場合によっては人力作業に切り替えた。

基準点は国土座標第Ⅱ座標系によりトラバース測量行い、調査区内には３m四方のグリットを設定した。これを基準に遺構図の実測は、遣り方で測り記録していくことにした。作図はまず遺構略測図を 1/100 で、遺構個別図・土層図等は 1/20 で作成した。これ以外では遺物微細図を 1/10 で作成している。

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　6　2008/11/04　17:20:03

V．層位

およそ 1m の盛土を除去すると、近現代に営まれた耕作面が認められる。この下は部分的ではあるが遺物包含層が存在し、遺構確認面であるローム層が広がる。

こうした状況から当調査区は可耕地化する際に、旧地形を削平したものと考えられる。

Fig.3　大宰府条坊跡第 265 次調査区東壁・南壁土層図（1/100）

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　7　　2008/11/04　17:20:03

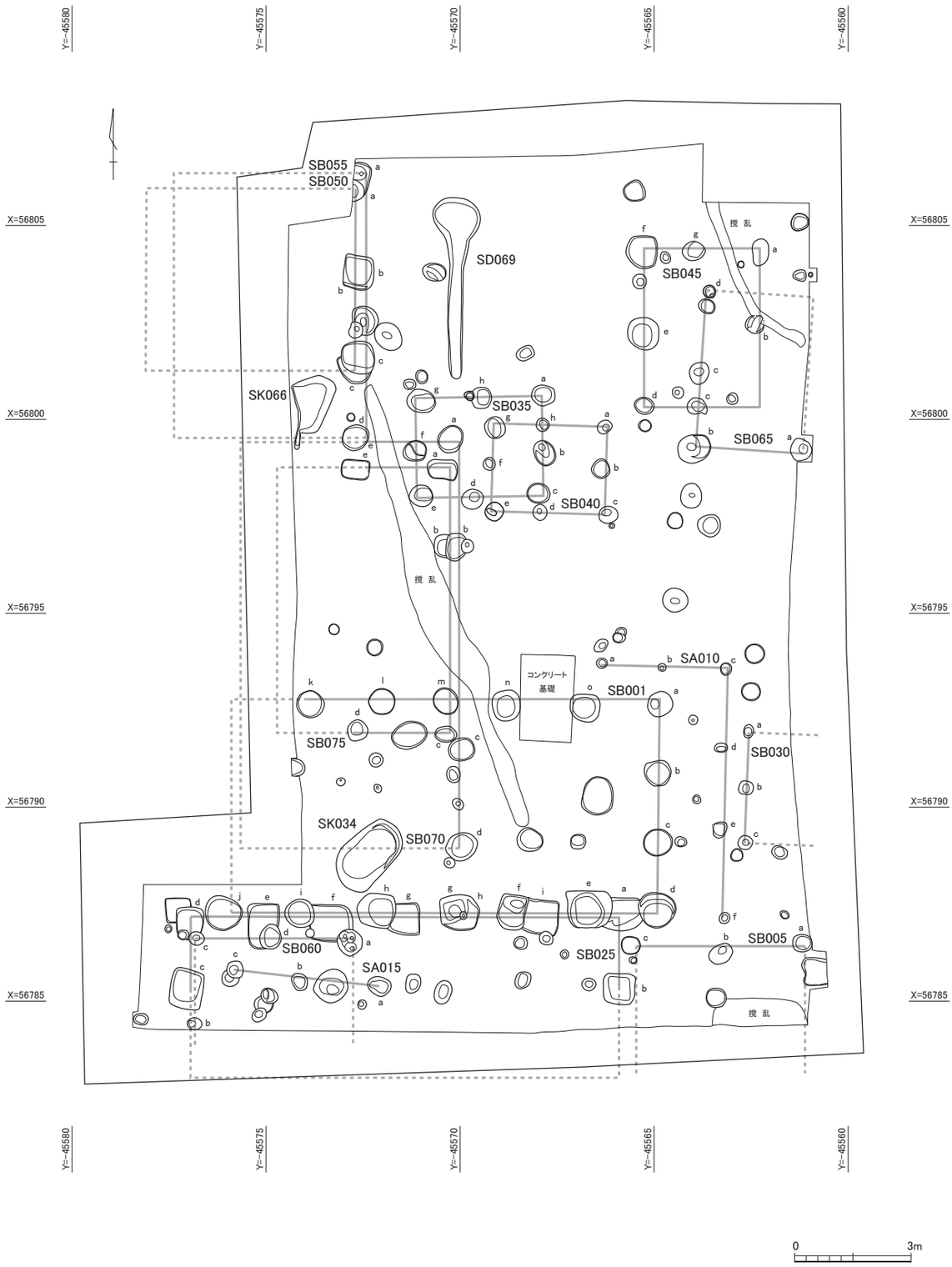


Fig.4　第 265 次調査遺構全体図（1/150）

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　8　　2008/11/04　17:20:04

Fig.5　第 265 次調査遺構略測図（1/150）

2 大宰府条坊跡第265次本文　01-10（地図～遺構）.indd　9　　2008/11/04　17:20:04

Ⅵ. 調査の報告

1. 遺 構

当該調査は、掘立柱建物を主体とする遺構群によって構成されており、調査時に遺構埋土状況や配列を考慮し認識していたものと、整理作業時の再検討によって大きく改変したものが存在する。調査情報を検証のための一次情報とし、報告の際に再統合したものとは分けて記載している。両者の照合については、Tab.3-1・3-2・4、Fig.4・5 に記載しているので対照いただきたい。

SA010（Fig.6）

調査区南東側で確認した。東西 2 間、南北 2 間で、4.9 m ×5.2 mのＬ字に屈曲する。SB0021 の北東桁行から東側梁行にかけての外側を並行することから、何らかの関連性が窺える。

SA015（Fig.6）

調査区南西側で確認した。東西方向に 2 間の規模で、心々の距離は 3.8 mを測る。この南側は調査区外であるため、未確認の遺構が存在すれば掘立柱建物跡になる可能性もある。

SB001（Fig.6）

調査区南側で確認した東西棟である。北西隅の柱穴は調査区外にあり未確認ではあるが､東西 6 間、南北 3 間で、心々での距離は 25 mと 13.6 mを測る。各柱間の距離は 0.45 m前後を測る。ここから出土する遺物は奈良時代前半から中頃のものである。南辺側の梁行は SB025 を切り構築される。北東桁行から東側梁行にかけての外側には、並行するように SA010 が構築されており、当遺構との関連性が窺える。個々の柱穴を比較すると柱痕が重複して確認されるものが一部で認められ、全く同じ位置での建替え、もしくは柱の差し替えがあったものと推測される。また底には柱材や根石が残るものもある。北東隅の柱穴からはほぼ完形の須恵器の蓋と、欠損した坏身が出土しており、祭祀的様相がみてとれる。時期は奈良時代中頃である。

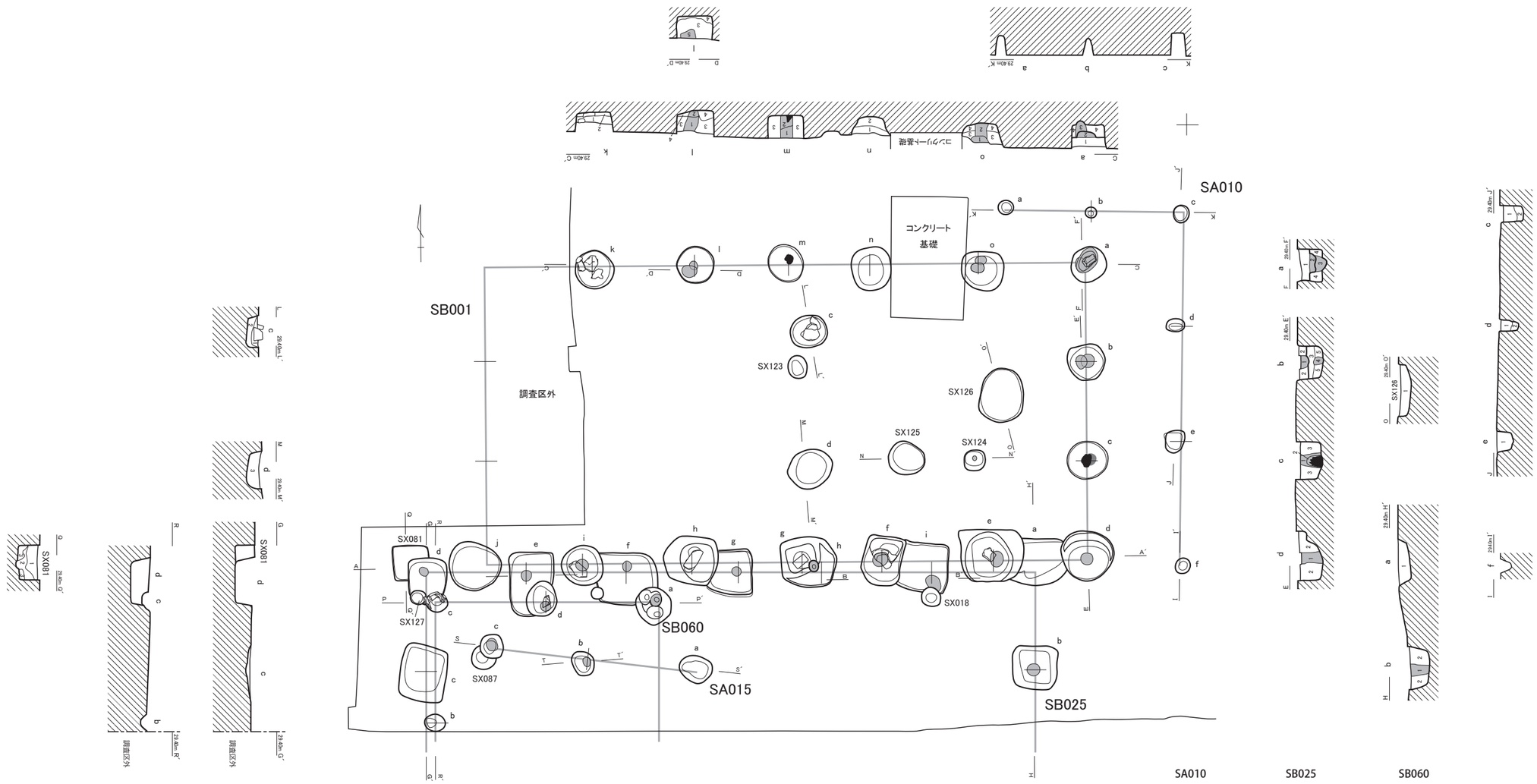
SB005（Fig.8）

調査区南側で確認したもので、南側及び東側は調査区外に展開する可能性があり、建物跡として扱うことにする。東西の心々での距離は 4.36 mで、柱間の距離は 2.18 mを測る。ここから出土する遺物には須恵器や土師器はあるが、いずれも小破片で奈良時代の所産としか判別できない。

SB025（Fig.6）

北辺側の桁行が SB001 の南辺桁行に切られるような格好で重複する。南側は調査区外にあり、全体の規模は不明であるが、東西棟の 6 間で、心々での距離は 27.8 mを測る。出土する遺物は奈良時代前半から中頃のもので、SB001 とは時期差がほとんど認められないが、遺構の重複関係からすると当遺構の方が古いのは明らかである。

2 大宰府条坊跡第265次本文 01-10（地図～遺構）.indd 10 2008/11/04 17:20:04



SB001

a
1. 褐灰色粘質土
2. 浅黄橙色粘質土
3. 褐灰色粘質土
4. 褐灰色粘質土

b
1. 浅黄橙色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 褐灰色粘質土
4. 褐灰色粘質土
5. 灰褐色砂質土

c
1. 褐灰色粘質土
2. 暗褐灰色粘質土
3. 灰褐色粘質土

d
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土

e
1. 褐灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 浅黄橙色粘質土
4. 褐灰色粘質土

f
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 浅黄橙色粘質土

g
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 浅黄橙色粘質土

h
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土

i
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土

j
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 褐色粘質土
4. にぶい褐色粘質土

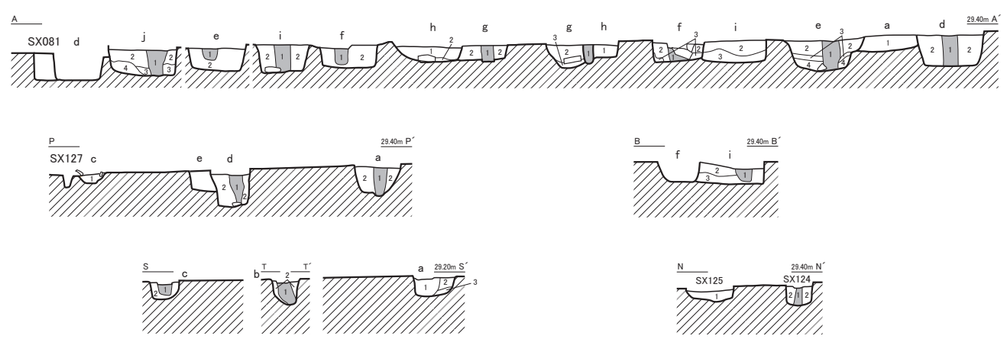
k
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色砂質土

l
1. にぶい橙色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 褐灰色粘質土
4. 褐灰色砂質土
5. 褐色粘質土

m
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 灰褐色粘質土

n
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土

o
1. 浅黄橙色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 灰褐色粘質土
4. 灰褐色砂質土



柱痕
柱材

SA010

c
1. 灰褐色粘質土

d
1. 灰褐色粘質土
2. 灰褐色砂質土

e
1. 灰褐色粘質土
2. 褐色砂質土

SA015

a
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. にぶい橙色粘質土

b
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土

c
1. 灰褐色粘質土
2. にぶい橙色粘質土

SB025

a
1. 灰褐色粘質土

b
1. 褐灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土

e
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土

f
1. 褐灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土

g
1. 褐灰色粘質土
2. にぶい黄橙色粘質土

h
1. 褐灰色粘質土

i
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 褐灰色粘質土

SB060

a
1. 灰褐色粘質土
2. にぶい橙色粘質土

c
1. にぶい黄橙色粘質土

d
1. 褐灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土

SB070

c
1. 褐灰色粘質土
2. 灰褐色砂質土

d
3. 灰褐色粘質土

SX081
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. にぶい黄橙色粘質土

SX124
1. 灰褐色粘質土
2. にぶい褐色粘質土

SX125
1. 灰褐色粘質土

SX126
1. にぶい褐色粘質土

0 2m

Fig.6　SA010・015・SB001・025・060 遺構実測図（1/80）

3 大宰府条坊跡第265次本文　11-12（遺構A3）.indd　11　　2008/11/04　17:20:30

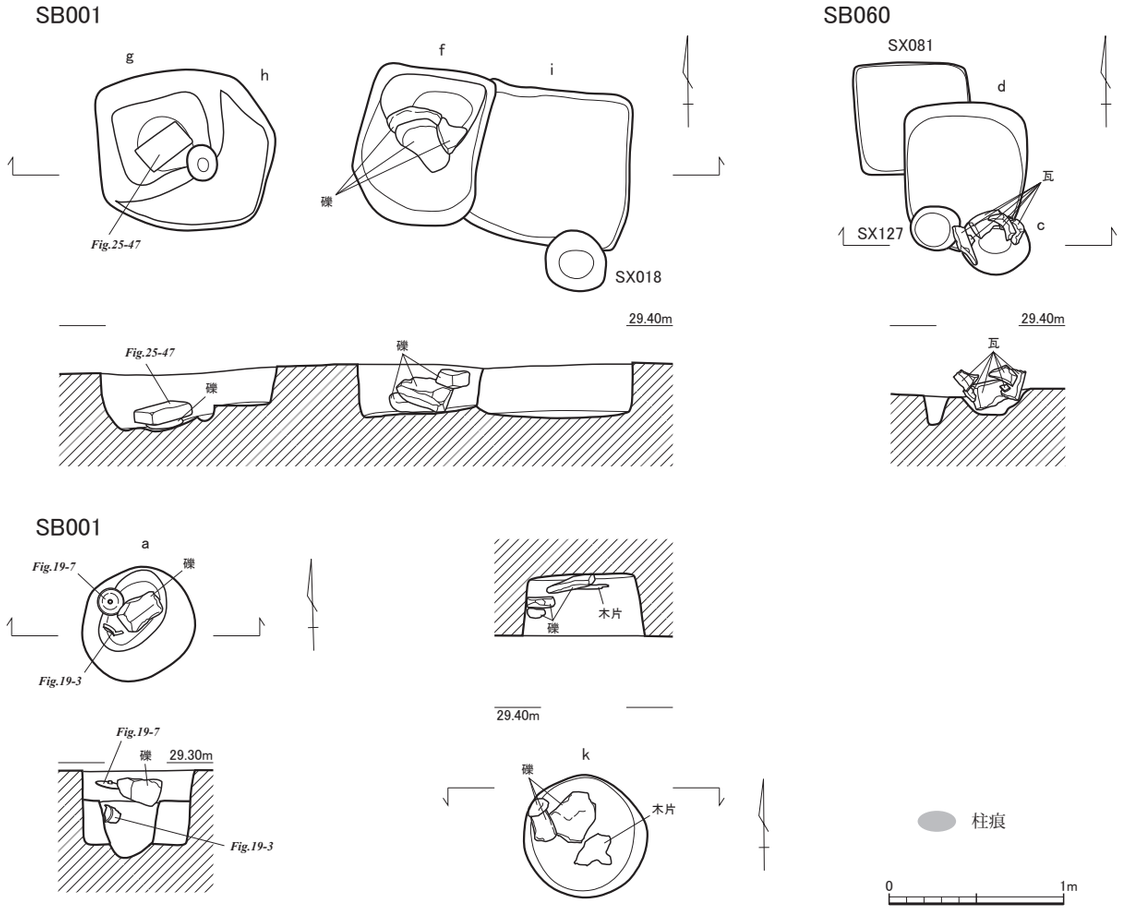


Fig.7　SB001・SB060 の柱穴実測図（1/40）

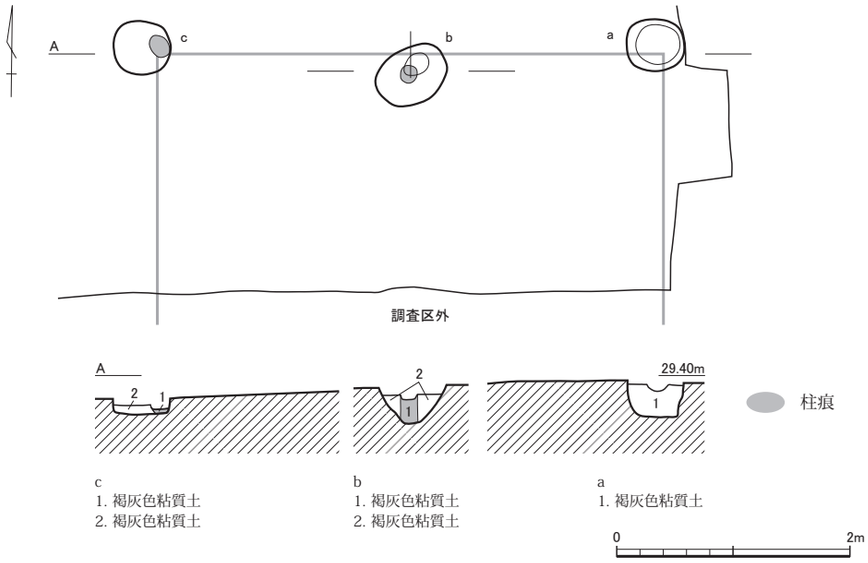


Fig.8　SB005 遺構実測図（1/60）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　13　2008/11/04　17:21:01

SB030（Fig.9）

調査区東側で確認したもので、東側は調査区外に展開する可能性があり、建物跡として扱うことにする。南北の心々距離は２ｍで、柱間の距離は 1m 前後を測る。ここから出土する遺物は奈良時代中頃である。

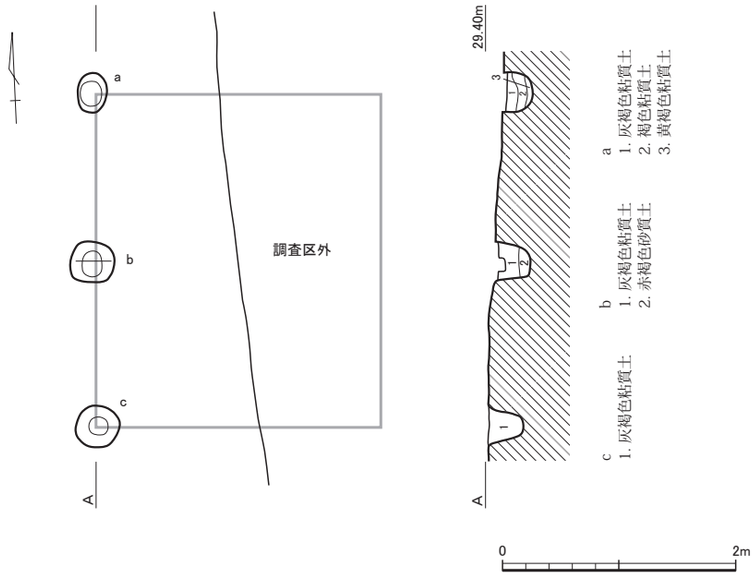


Fig.9　SB030 遺構実測図（1/60）

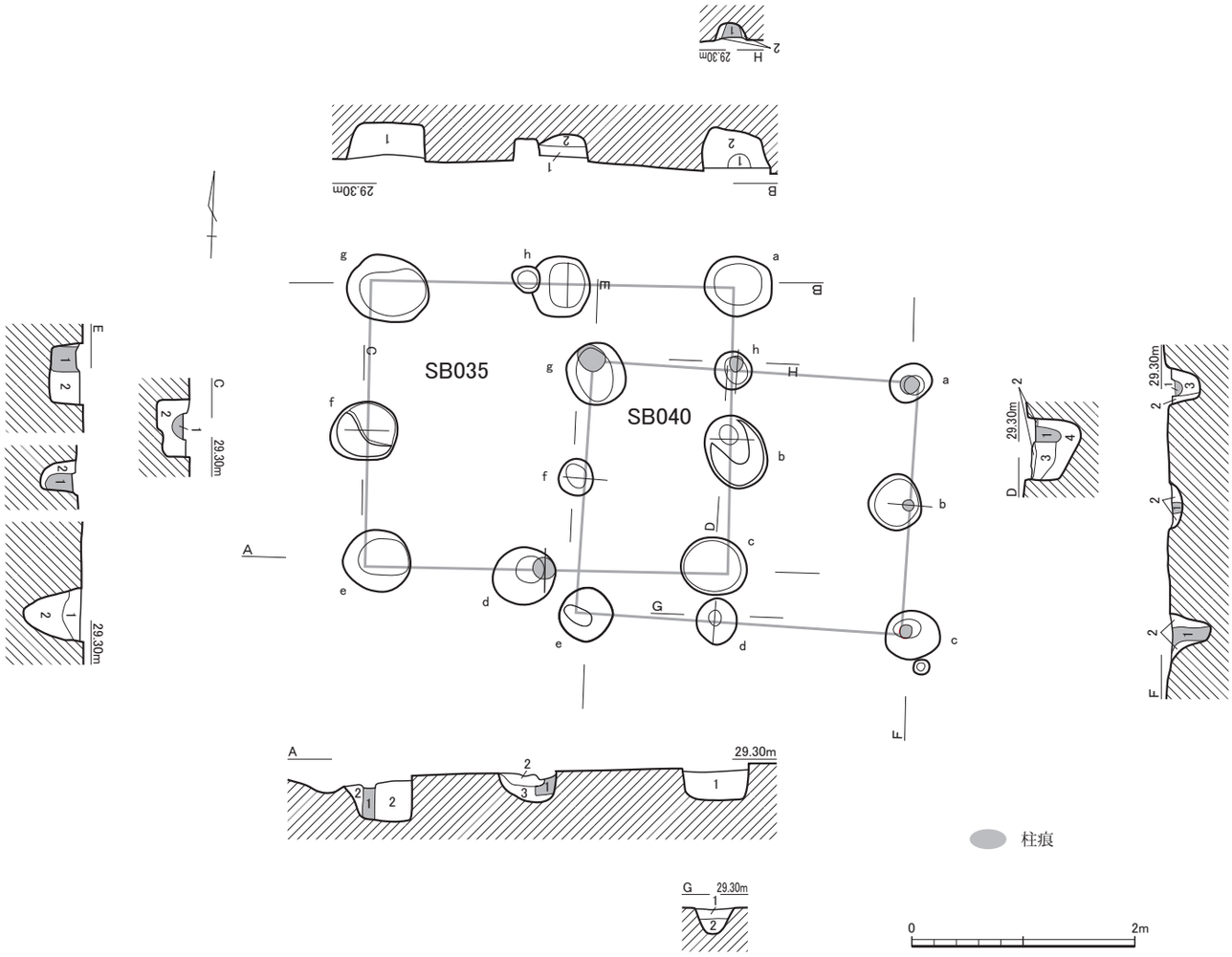
SB035（Fig.10）

調査区中央で確認したもので、建物の配置が SB040 と重複するような格好にある。東西の規模がやや長い程度の東西２間、南北２間である。心々の距離は 3.3 ｍと 2.56 ｍを測る。出土する遺物は奈良時代前半である。

SB040（Fig.10）

建物の配置が SB035 と重複する格好にあり、規模も類似し東西がやや長く東西２間、南北２間となる。心々での距離は東西 2.94 ｍと南北が 2.28 ｍを測る。出土する遺物は奈良時代後半のものがあり、SB035 の後に構築されたと理解できる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　14　　2008/11/04　17:21:02



SB035

a
1. 褐灰色粘質土
2. にぶい黄橙色粘質土

b
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. にぶい黄橙色粘質土
4. 褐灰色粘質土

c
1. 褐灰色粘質土

d
1. にぶい黄橙色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 明褐灰色粘質土

e
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土

f
1. 褐灰色粘質土
2. 灰褐色粘質土

g
1. 褐灰色粘質土

h
1. 褐灰色粘質土
2. にぶい黄橙色粘質土

SB040

a
1. 黒褐色粘質土
2. にぶい褐色粘質土
3. にぶい褐色粘質土

b
1. 褐灰色粘質土
2. 明褐色粘質土

c
1. にぶい褐色粘質土
2. 褐色粘質土

d
1. 灰褐色粘質土
2. 灰黄褐色粘質土

e
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土

f
1. 褐灰色粘質土
2. にぶい褐色粘質土

g
1. 褐灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土

h
1. 灰褐色粘質土
2. 褐色粘質土

Fig.10　SB035・040 遺構実測図（1/60）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　15　2008/11/04　17:21:02

SB045（Fig.11）

調査区北東側で確認した南北棟である。建物の配置がSB065と重複するような格好にあり、東西2間、南北2間で、心々の距離は2.96 mと4.1 mを測る。ここから出土する遺物は奈良時代前半から中頃のものである。

SB050（Fig.12）

調査区北西側で確認した。西側の柱穴は調査区外に展開するものと想定。SB055を切り構築される。遺構確認時に平面で両者を区別することは困難で、断面上で重複する遺構であることが判明。各柱穴の形態や埋土の堆積状況からして重複する建物跡とした。ここからの出土遺物はなく時期は明確にし難いが、SB055との関係から考えると奈良時代後半以降といえる。

SB055（Fig.12）

調査区北西側で確認した南北棟の東辺桁行と考えられるものである。西側の柱穴は調査区外に展開するものと想定。底には柱材が残存する。或いは北側の未調査区にも梁行は延びる可能性はあるが、現認できる範囲では南北3間、心々の距離は6.86 mを測る。ここから出土する遺物は奈良時代後半である。

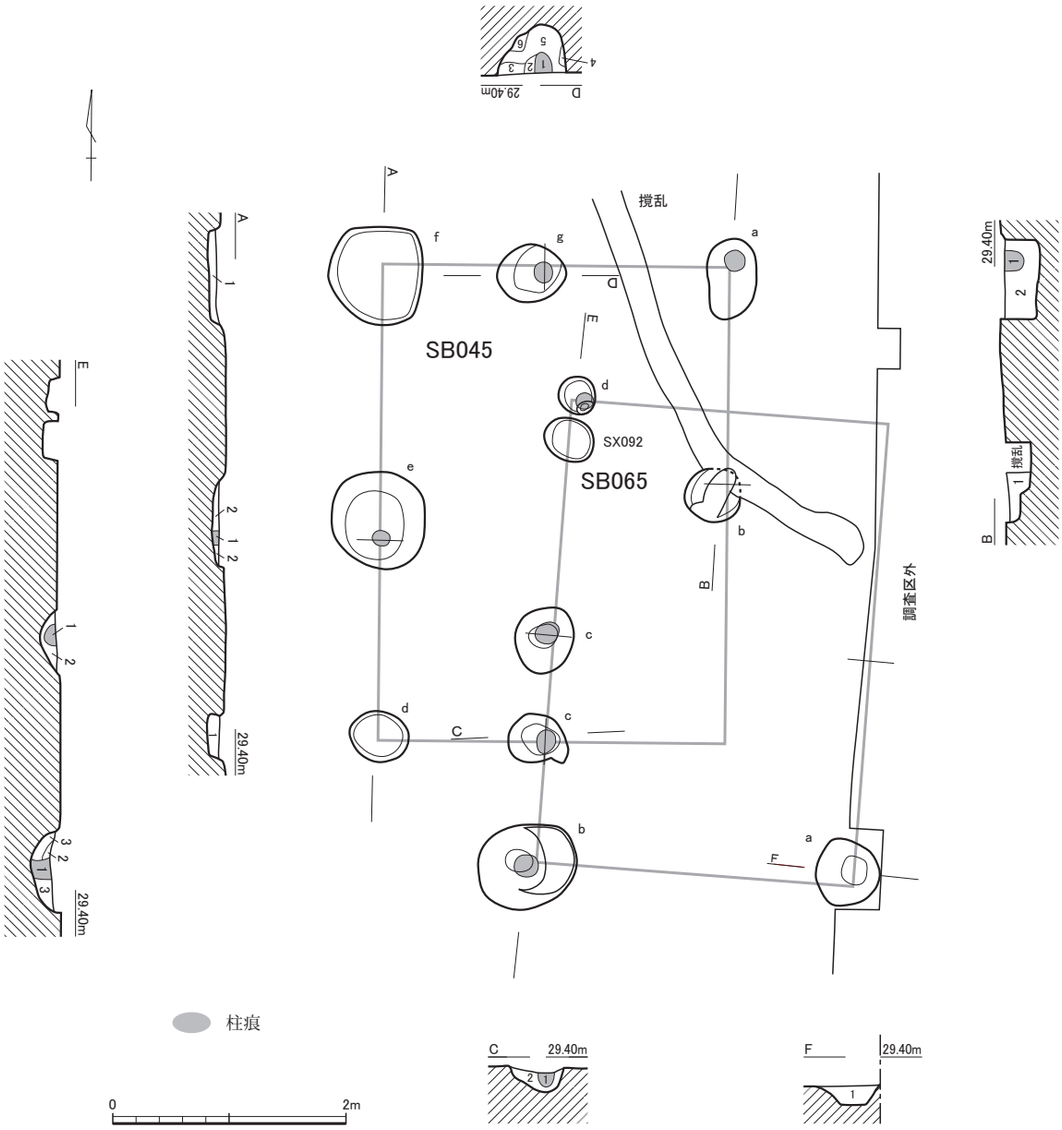
SB060（Fig.6）

調査区南東側で確認したもので、南側は調査区外に展開する可能性があり、建物跡として扱うことにする。SB025の南西隅柱穴を切り構築される。東西2間の心々距離は4 mで、柱間の距離は2mを測る。北西隅の柱穴には根固めのために瓦の破片が充填された状態で認められる。ここから出土する遺物は奈良時代後半である。

SB065（Fig.11）

調査区北東側で確認した南北棟である。北東隅と桁行中央の柱穴は調査区外にあり未確認である。建物の配置がSB045と重複するような格好にあり、東西1間、南北2間で、心々の距離は2.72 mと4.0 mを測る。ここから出土する遺物には平安時代前期のものがあることから、SB045の後に構築されたと理解できる。主軸も他の建物跡がほぼ真北を指すのに対して、やや東偏する傾向があり、時期差を反映した結果とも判断できそうである。

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 16 2008/11/04 17:21:02



SB045

a
1. 褐灰色粘質土
2. にぶい褐色粘質土

b
1. 褐灰色粘質土

c
1. 褐灰色粘質土
2. にぶい褐色粘質土

d
1. 褐灰色砂質土

e
1. にぶい黄橙色粘質土
2. 褐灰色粘質土

f
1. にぶい黄橙色粘質土

g
1. 灰褐色粘質土
2. にぶい橙色粘質土
3. 褐灰色粘質土
4. 褐灰色砂質土
5. 褐灰色粘質土
6. にぶい黄橙色粘質土

SB065

a
1. 褐灰色粘質土

b
1. 灰褐色粘質土
2. 褐灰色粘質土
3. 黄橙色粘質土

c
1. 灰褐色粘質土
2. にぶい褐色粘質土

Fig.11　SB045・065 遺構実測図（1/60）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　17　2008/11/04　17:21:03

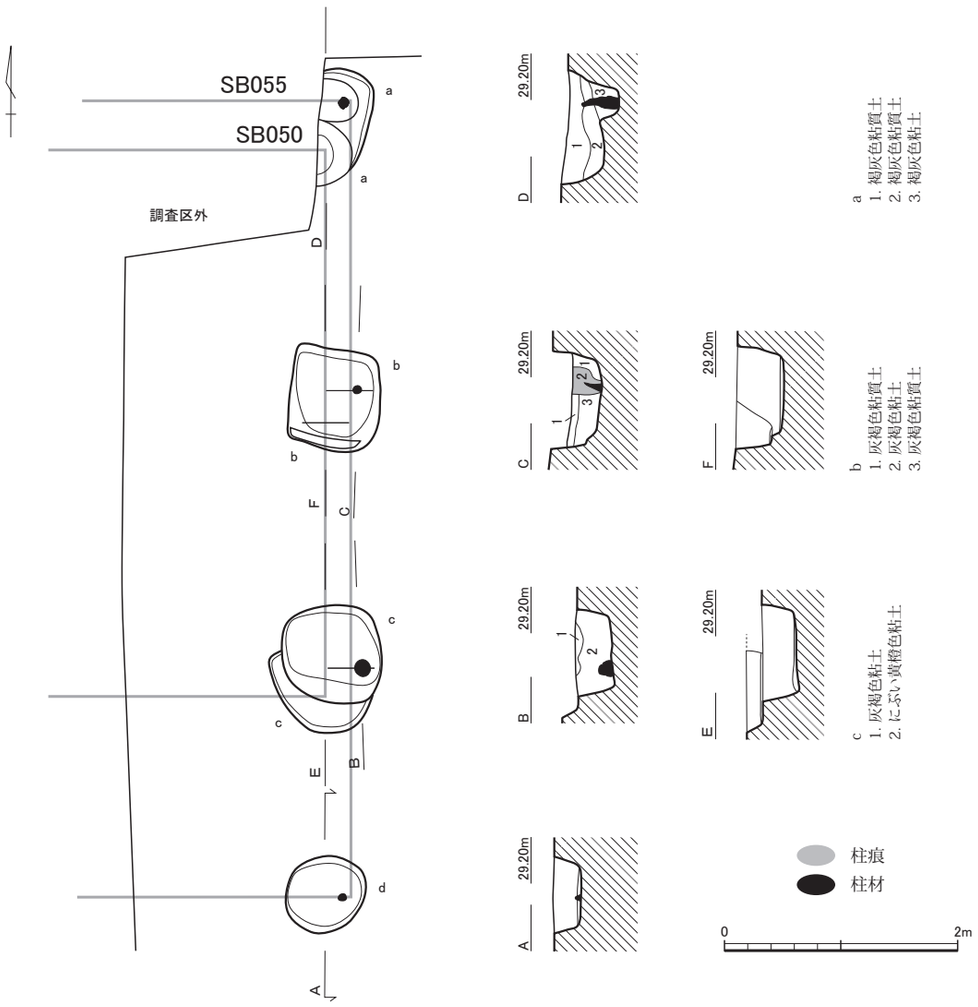


Fig.12　SB050・SB055 遺構実測図（1/60）

SB070（Fig.13）　調査時に別遺構扱いしていたものをまとめ一つの遺構とする。

調査区中央の北西側で確認した南北棟である。西側の柱穴は調査区外にあり全体の規模は不明である。南北桁行は、1 箇所が撹乱で消失しているものの、4 間であり、心々の距離は 10.7 mを測る。南辺桁行にある柱穴は SK034 により消失しているように見えるが、土層断面を観察すると幾つかの遺構の重複があることが窺える。おそらく当遺構の柱穴の一つがこれに該当するものと考えられる。その SK034 からは平安時代前期の遺物が出土しているが、これをいずれの遺構に帰属させるかについては、発掘時の認識不足から決めかねる。さらに当建物内には一回り小さな SB075 と、SB001 の北側梁行の一部が認められている。

SB075（Fig.13）　調査時に別遺構扱いしていたものをまとめ一つの遺構とする。

SB070 内にある一回り小さな南北棟である。西側の柱穴は調査区外にあり全体の規模は不明である。南北桁行は、1 箇所が撹乱で消失しているものの、3 間であり、心々の距離は 6.86 mを測る。ここから出土する遺物は奈良時中頃のものである。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　18　2008/11/04　17:21:03

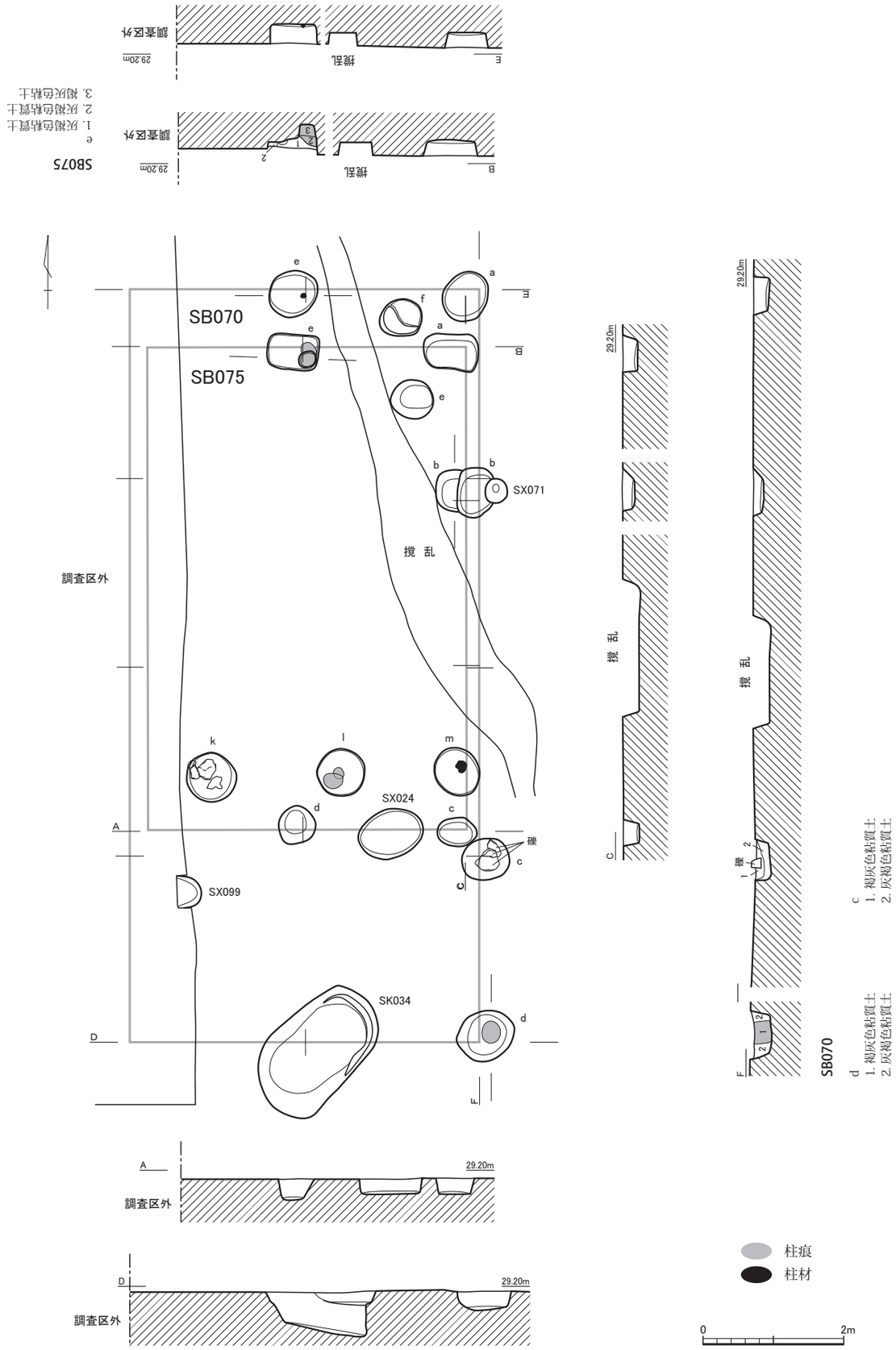


Fig.13　SB070・075 遺構実測図（1/80）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　19　2008/11/04　17:21:04

SK034（Fig.14）

調査区南側で確認した 1.2 m× 2.0 mの平面が楕円形の土坑である。北東端は浅い段があり、土層断面を観察すると浅い別遺構の堆積であることが認められる。この下においても 2 つ以上の遺構が重複する様相が観察され、ここが SB070 の南辺梁行の延長線にあることより、柱穴に該当するものがあると考えられる。出土する遺物には平安時代前期のものが認められるが、当遺構か SB070 に帰属させるかについては、発掘時の認識不足から決めかねるが、SB070 を破壊し構築されている点からは相互の新旧関係は理解し得る。

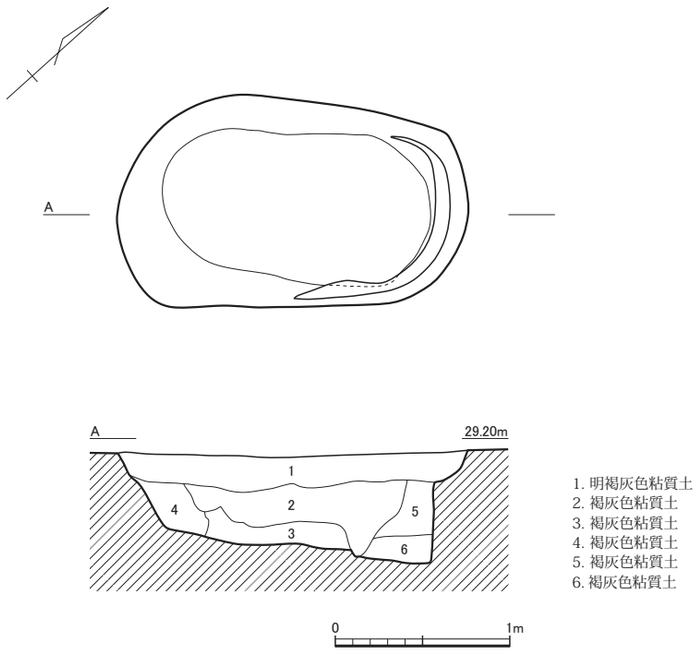


Fig.14　SK034 遺構実測図（1/40）

SK066（Fig.15）

調査区北西側で確認した不整形な平面形態の土坑である。円形の浅い窪みとその南側に南北方向に浅く短い溝状のものが延びる。出土する遺物は奈良時代後半である。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　20　2008/11/04　17:21:04

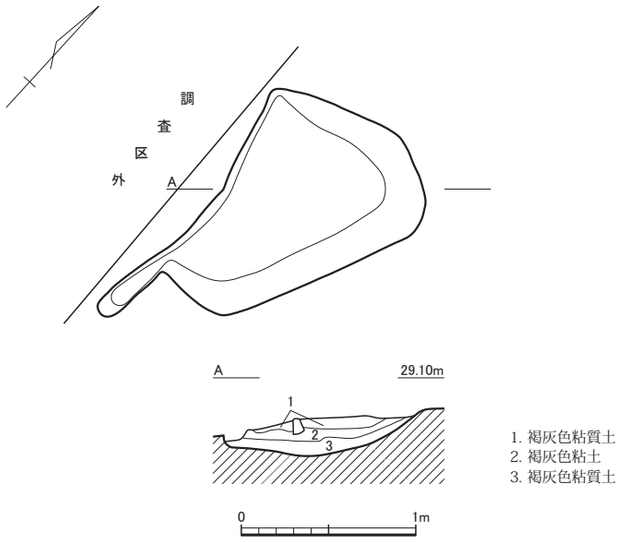


Fig.15　SK066 遺構実測図（1/40）

SD069（Fig.16）

調査区北西で確認した。北側の先端が円形の浅い窪みとなり、この南側から溝が延びる。出土する遺物は平安時代中期である。

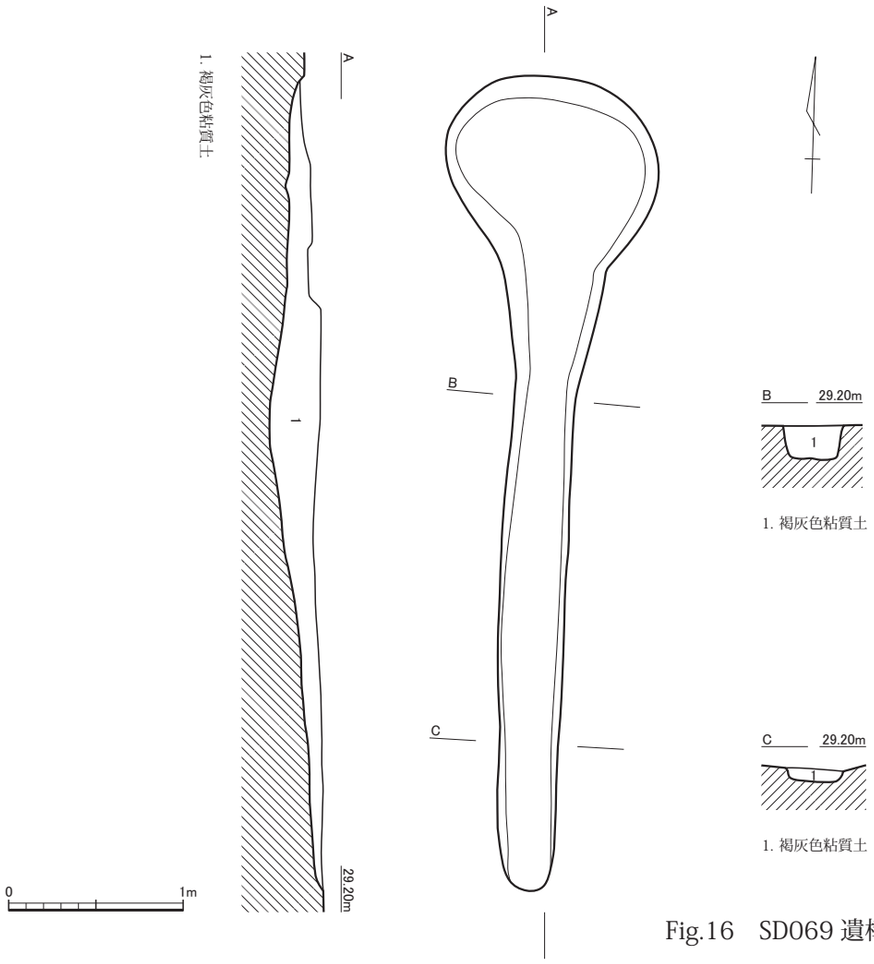


Fig.16　SD069 遺構実測図（1/40）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　21　2008/11/04　17:21:05

2. 遺 物

a. 柵列出土遺物

265SA010c 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.17）

須恵器

坏ｃ×皿ｃ（1） 体下部は丸みを帯びる。高台は低く外に開く。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

265SA010c 灰褐色粘質土

Fig.17 265SA010c 出土遺物実測図（1/3）

265SA010d 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.18）

須恵器

蓋３（2） 口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SA010d 灰褐色粘質土

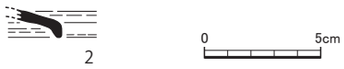


Fig.18 265SA010d 出土遺物実測図（1/3）

b. 掘立柱建物出土遺物

265SB001a 柱痕浅黄橙色粘質土出土遺物（Fig.19）

須恵器

坏ｃ（3） 復元値は口径 17.4cm、器高 5.3cm、高台径 10.8cm を測る。体部は僅かに外反しながら立ち上がる。高台は低く、底端部より内側に貼り付く。内面底部はナデ調整が行われ、これ以外は回転ナデが認められる。外面底部はヘラ切り後にナデ調整。根石下から出土しており、（7）と同様に祭祀として埋納された可能性あり。

土師器

甕（4） 器面の摩滅が著しいが、内面体部の一部にヘラ削りがみられる。

265SB001a 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.19）

須恵器

蓋３（5） 口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 22 2008/11/04 17:21:05

土師器

坏（6） 胎土に 0.1cm 程の白色砂粒を少量含む。内外面とも回転ナデが認められる。口縁部に磨きあり。

265SB001a 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.19）

須恵器

蓋 c3（7） 口径 15.8cm、器高 2.1cm を測る。釦状の扁平なツマミが付く。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。外面には回転ヘラ削りが認められる。内外面ともに焼成時の重ね焼きの影響を受けた色調の違いが認められる。根石脇から出土しており、（3）と同様に祭祀として埋納された可能性あり。

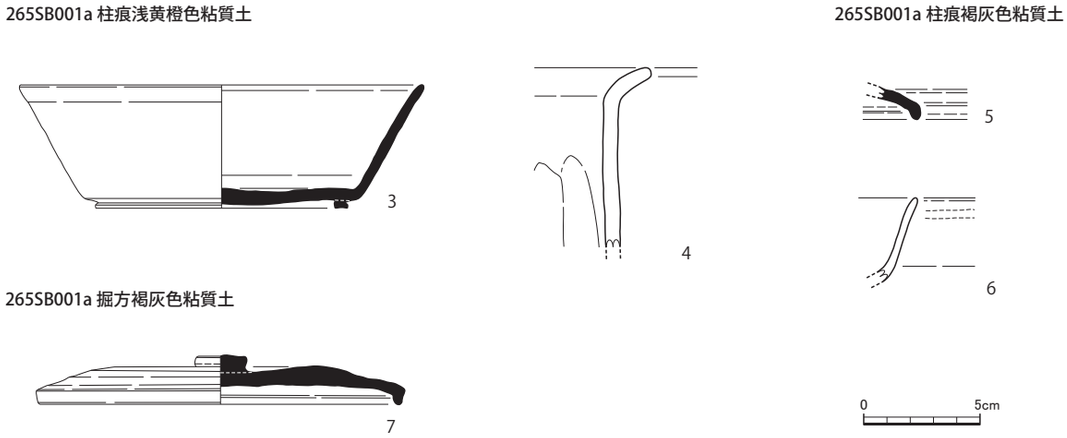


Fig.19 265SB001a 出土遺物実測図（1/3）

265SB001b 柱痕浅黄橙色粘質土出土遺物（Fig.20）

須恵器

蓋 3（8） 口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。内面に灰かぶりによる変色部分あり。

265SB001b 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.20）

須恵器

蓋 3（9） 復元値は口径 17.8cm を測る。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。

265SB001b 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.20）

須恵器

蓋 3（10） 復元値は口径 14.4cm を測る。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。天井部に回転ヘラ削りが認められる。端部外面と内面天井部に重ね焼き時における、他の須恵器の破片が付着する。

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 23 2008/11/04 17:21:06

265SB001b 掘方灰褐色粘質土出土遺物（Fig.20）

須恵器

坏（11・12） 11 は内湾しながら立ち上がり、口縁端部で外反する。11・12 とも内外面に回転ナデ調整が認められる。

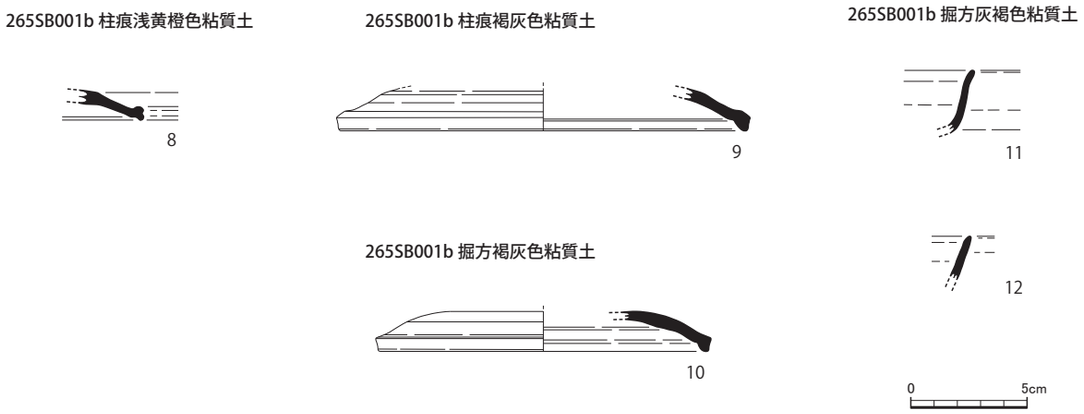


Fig.20　265SB001b 出土遺物実測図（1/3）

265SB001c 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.21）

須恵器

蓋 3（13・14） 13 と 14 は口縁端部を僅かに下方に摘みだした程度である。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

坏×皿（15） 口縁部の小破片で坏か皿かの判別はし難い。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SB001c 掘方灰褐色粘質土出土遺物（Fig.21）

須恵器

蓋 c（16） 扁平な釦状を呈し、還元焔焼成不良のため灰白色を示す。

蓋 3（17・18・19・20） 17 は口縁端部を僅かに下方に摘みだした程度である。内外面は回転ナデ調整が認められる。外面端部は重ね焼きによってうすく黒色化する。18 の復元値は口径 13.0cm を測る。口縁端部を短く屈曲はさせる。外面天井部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデが認められる。19 は口縁端部を僅かに下方に摘みだした程度である。内外面とも回転ナデ調整が認められる。20 は口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。外面は摩滅が著しく調整不明。還元焔焼成不良により灰白色を示す。

土師器

坏（21） 口縁部は薄い器厚のつくりとなり、内外面とも器面の摩滅が著しい。

坏×皿 c（22） 高台部のみの小破片により、坏か皿の判別はし難い。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　24　2008/11/04　17:21:07

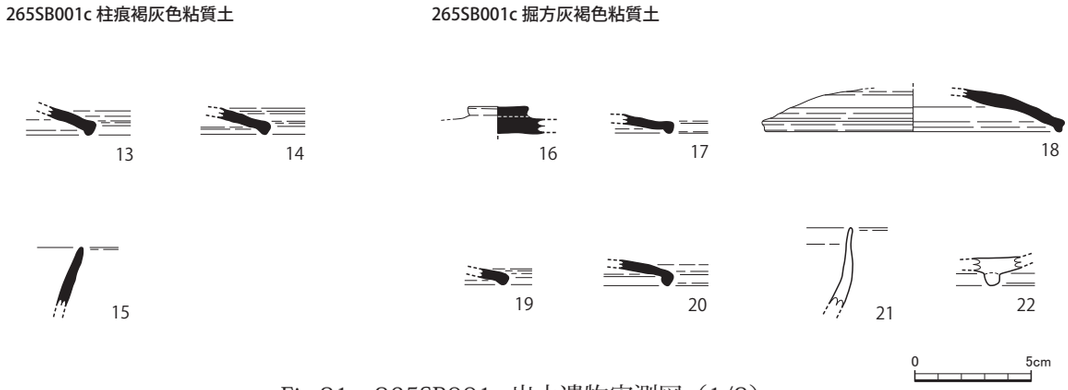


Fig.21　265SB001c 出土遺物実測図（1/3）

265SB001d 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.22）

須恵器

坏 c（23）　口径は 14.2cm、器高 4.2 ～ 4.3cm、高台径 9.65cm を測る。体部は外方へ直線的に立ち上がる。高台は底端部より内側に開き貼り付けられ、断面は丸みを帯びた台形を呈す。内面底部はナデ、その他は回転ナデが認められる。外面底部は回転ヘラ切り後にナデが認められる。

坏×皿（24）　口縁部の小破片で坏か皿の判別し難い。内外面とも回転ナデで、還元焔焼成不良により、暗赤褐色を示す。

皿（25）　0.1cm 程の白色粒を多く含み、内外面は回転ナデ。還元焔焼成不良により、暗紫灰色を示す。

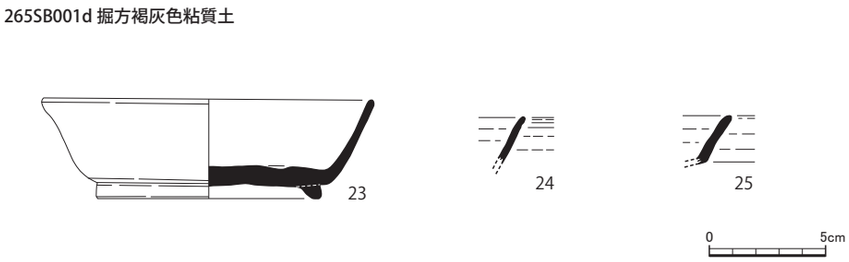


Fig.22　265SB001d 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　25　2008/11/04　17:21:10

265SB001e 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.23）

須恵器

蓋３（26･27･28） 26 と 27 は口縁端部を下方に僅かに摘みだされた程度である。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。27 は外面天井部が回転ヘラ削りされ、端部には重ね焼きによる黒色化が認められる。28 は口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。外面天井部は摩滅が著しいが、部分的に回転ナデ調整を認める。外面端部は重ね焼きにより淡灰黒色化する。

皿 a（29） 復元値は口径 18.6cm、器高 1.8cm、底径 14.9cm を測る。口縁端部が外反する。内外面は回転ナデ調整、底部は回転ヘラ削りが認められる。

小壺（30） 高台が付いた短頸の小型壺。復元値は口径 8.6cm、器高 6.6cm、底径 5.45cm を測る。頸部は外上方に短く立ち上がり、肩部はきつく張り出す。高台の断面は方形を呈し、底端部より内側に貼り付く。内面と外面口縁から肩部、高台部は回転ナデ調整、外面体部と底部は回転ヘラ削り後、回転ナデ調整が認められる。

265SB001e 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.23）

須恵器

坏（31） 内外面とも回転ナデ調整が認められる。

坏×皿（32） 口縁部小片で坏か皿かの判別はし難い。体部は外反しながら立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SB001e 掘方灰褐色粘質土出土遺物（Fig.23）

須恵器

蓋３（33･34） 33 の復元値は口径 15.8cm を測る。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。外面から内面にかけ、焼成時の重ね焼きによる黒色化あり。34 は口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。天井部は回転ヘラ削りで、これ以外は回転ナデ調整が認められる。

坏 c（35･36.37） 高台は底端部より内側に貼り付けられ、断面は四角を呈す。内面底部は回転ナデの後に更にナデ調整が認められる。

坏×皿（36･37･38） いずれも口縁部の小破片で坏か皿の判別はし難い。36 は口縁端部が外反しながら立ち上がる。内外面とも回転ナデによる調整が認められる。37 は口縁端部が外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。38 は口縁部は開き気味で、内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

土師器

把手（39） 指頭の痕がみられ、基部は体部に貼り付けた際のヨコナデが認められる。内面はヘラ削りが認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 26 2008/11/04 17:21:10

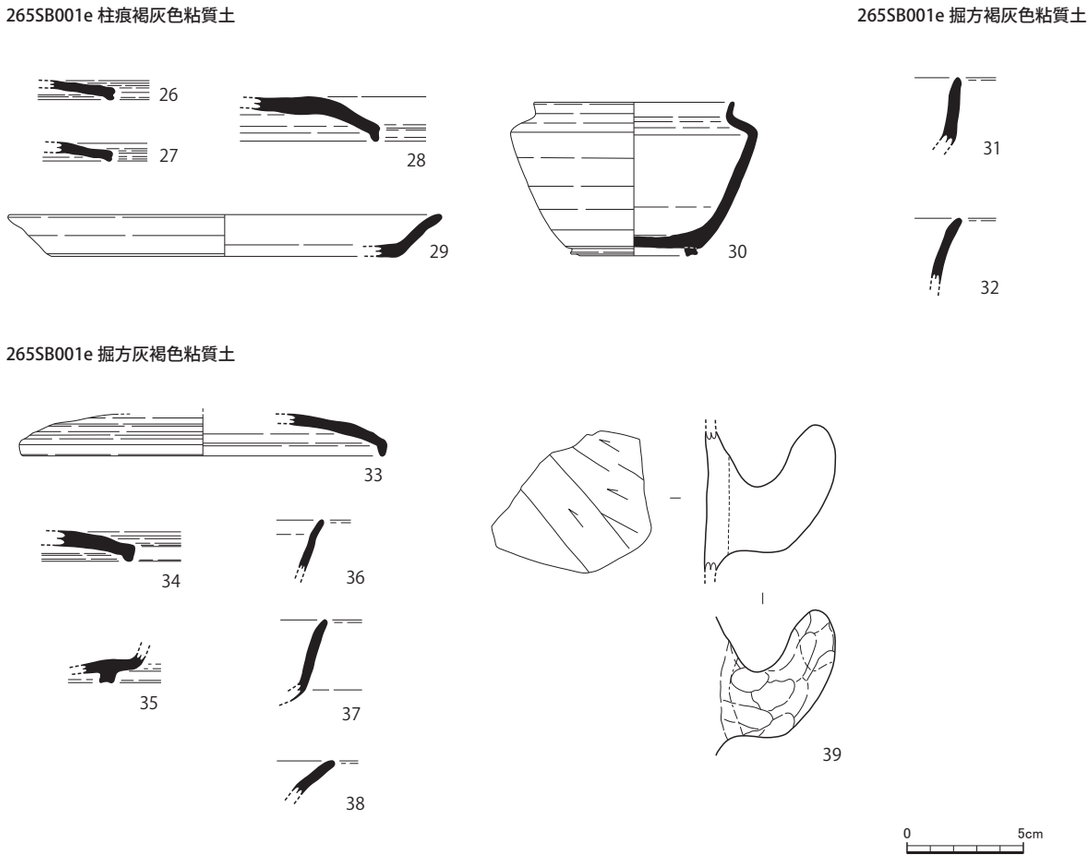


Fig.23　265SB001e 出土遺物実測図（1/3）

265SB001f 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.24）

須恵器

蓋３（40）　口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。外面は重ね焼きによる黒色化がみられる。

高坏（41）　内外面とも回転ナデが認められる。

甕（42）　端部を外を折り曲げ肥厚にする。

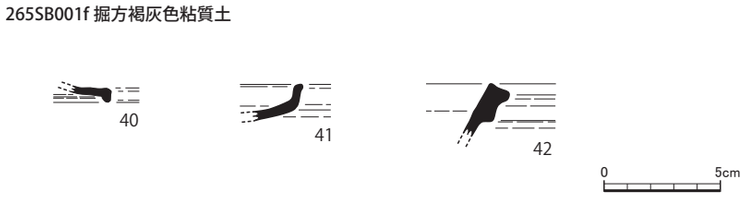


Fig.24　265SB001f 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　27　2008/11/04　17:21:14

265SB001g 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.25）

須恵器

蓋３（43）　口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも器面の摩滅が著しく調整等は不明である。

壺蓋（44）　復元値の口径 14.7cm、残存器高 2.15cm。口縁部はきつく内側に屈曲させる。天井部は回転ヘラ削り、口縁部は回転ナデが認められる。内面は回転ナデの後に更にナデ調整を行う。

高坏(45)　復元値は口径 15.6cm を測る。口縁部は真上に短く屈曲する。体部下半は回転ヘラ削り、これ以外は回転ナデ調整が認められる。

土師器

蓋３×高坏脚（46）　小破片により口縁端部か脚端部の判別がし難い。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土製品

塼（47）　縦 29.6cm、横 19.05cm、厚さ 7.0 ～ 7.6cm を測る。1 ～ 4mm 大の白色砂粒を多く含む。焼成は不良で脆い。表面を棒状の工具で押し伸ばしているためか、波打つような凹凸が認められる。遺構内の底面で出土しており、根石として転用されたものと考えられる。

265SB001g 掘方褐灰色粘質土

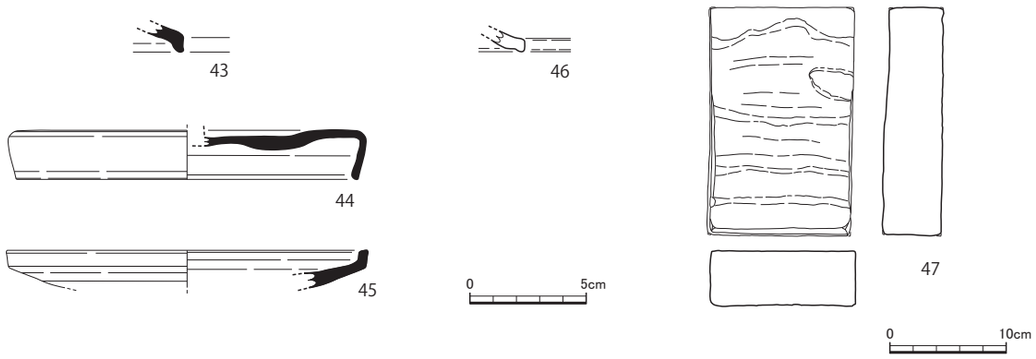


Fig.25　265SB001g 出土遺物実測図（1/3・1/6）

265SB001h 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.26）

須恵器

蓋３（48）　口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土師器

甕 a（49）　口縁部はヨコナデ。外面に指頭痕がみられる。内面は頸部以下がヘラ削り、外面頸部以下はハケメが認められる。白雲母を多く含む。

土製品

鞴羽口(50)　残存長は 5.95cm を測る。2 ～ 3mm の白色砂粒を多く含む。外面体部は指頭痕が残る。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　28　2008/11/04　17:21:15

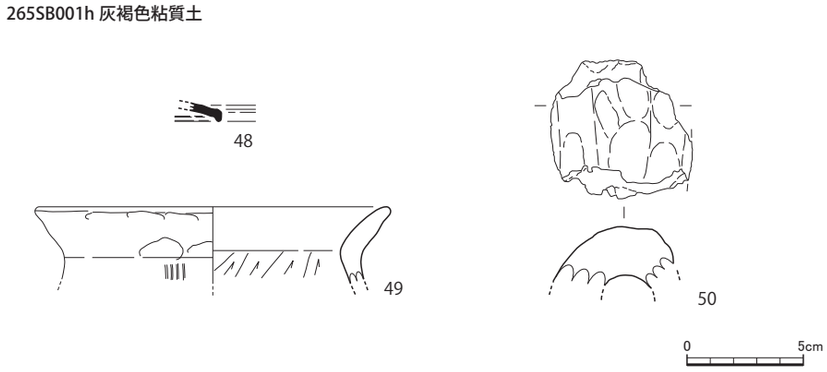


Fig.26　265SB001h 出土遺物実測図（1/3）

265SB001i 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.27）

須恵器

蓋３（51･52）　51 の復元値は口径 15.1cm を測る。口縁端部を短く屈曲させる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。52 の復元値は口径 15.6cm を測る。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内面は回転ナデの後ナデ、その他は回転ナデによる調整が認められる。端部は焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。

坏ｃ×皿ｃ（53）　低い高台が開き気味に貼り付く。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

高坏（54）　口縁端部を直立させる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

鉢（55）　口縁部の破片。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

硯（56･57）　56･57 とも円面硯の脚部で長方形の透かしを有し、同一個体の可能性あり。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

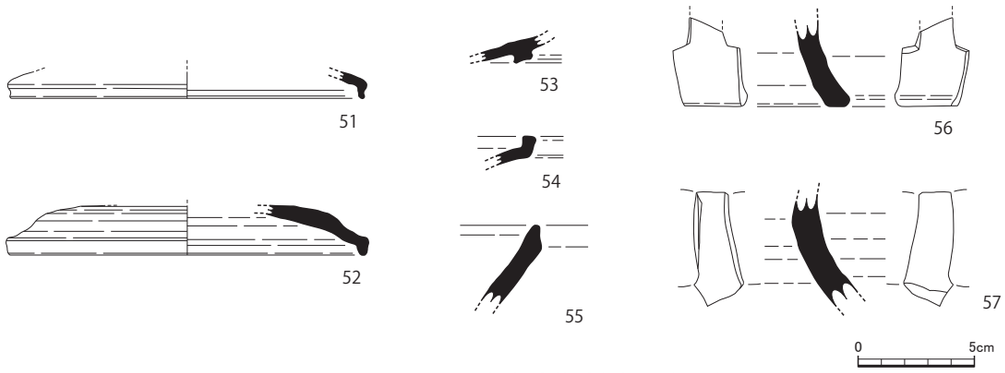


Fig.27　265SB001i 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　29　2008/11/04　17:21:17

265SB001j 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.28）

須恵器

蓋 3（58・59・60） いずれも口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。58 は天井部を回転ヘラ削りした後に、回転ナデ調整が認められる。59 は内面を回転ナデ、その他は摩滅が著しく調整不明である。60 は内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

坏×皿（61） 口縁部の破片。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

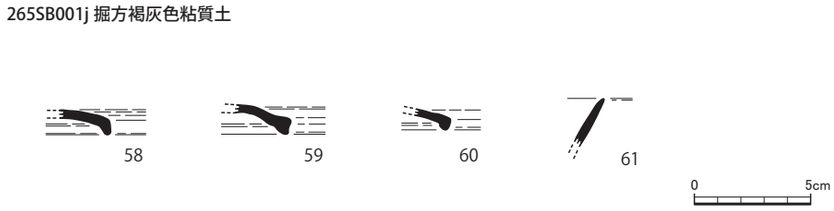


Fig.28　265SB001j 出土遺物実測図（1/3）

265SB001k 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.29）

須恵器

蓋 c3（62） 復元値は口径 15.8cm、器高 2.2cm、ツマミ径 2.4cm を測る。ツマミ形状は扁平な釦状を呈す。ツマミ頂部に判読不明の墨書あり。口縁端部を短く外側に屈曲させる。天井部は回転ヘラ削り、内面は回転ナデの後に、更にナデ調整が認められる。

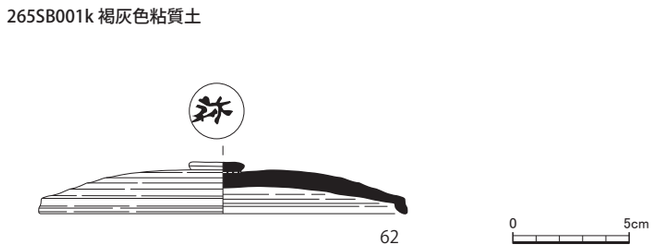


Fig.29　265SB001k 出土遺物実測図（1/3）

265SB001l 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.30）

須恵器

蓋 3（63・64・65） 63 は口縁端部を短く屈曲させる。内面は回転ナデ後にナデ、これ以外は回転ナデ調整が認められる。64 は口縁端部を開き気味に短く屈曲させる。内外面とも回転ナデ調整され、内面天井部に墨痕が認められる。65 は口縁端部を短く屈曲させる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　30　2008/11/04　17:21:18

265SB001l 掘方褐灰色粘質土

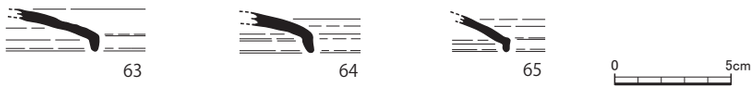


Fig.30　265SB001l 出土遺物実測図（1/3）

265SB001m 掘方灰褐色粘質土出土遺物（Fig.31）

須恵器

坏×皿（66）　口縁部のみの小破片で坏か皿の判別はし難い。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SB001m 掘方灰褐色粘質土

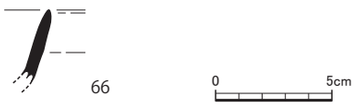


Fig.31　265SB001m 出土遺物実測図（1/3）

265SB001o 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.32）

須恵器

蓋３（67）　口縁端部を短く屈曲させる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。内面に焼成時の他製品の破片が付着する。

265SB001o 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.32）

須恵器

小壺（68）　復元値は口径 10.7cm、器高 3.0cm、底径 8.7cm を測る。薄手の丁寧なつくりである。口縁部は短く屈曲させ、肩部が丸く張り出す。短い断面四角の高台が外傾し貼り付く。

265SB001o 柱痕褐灰色粘質土　　265SB001o 掘方褐灰色粘質土

Fig.32　265SB001o 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　31　　2008/11/04　17:21:20

265SB005a 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.33）

須恵器

蓋３（69･70） 69 は口縁端部を僅かに摘みだした程度である。内外面とも回転ナデ調整が認められる。外面は焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。70 は口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

坏×皿（71･72） いずれも外面ともに回転ナデ調整が認められる。

Fig.33　265SB005a 出土遺物実測図（1/3）

265SB005b 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.34）

須恵器

蓋３（73･74･75･76） 73 は口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。74 は口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。焼成不良で脆く、内外面とも摩滅が著しい。外面は焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。75 は口縁端部を僅かに摘みだした程度である。内外面とも回転ナデ調整が認められる。外面は焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。76 は口縁端部は僅かに摘みだした程度である。内外面とも摩滅が著しい。外面は焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。

皿（77･78） 77 は体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。78 は体部が上方に開き外反する。底部はヘラ切りの後にナデ調整が認められる。

土師器

高坏（79） 脚裾部の破片で、内外面とも摩滅が著しく調整等は不明。

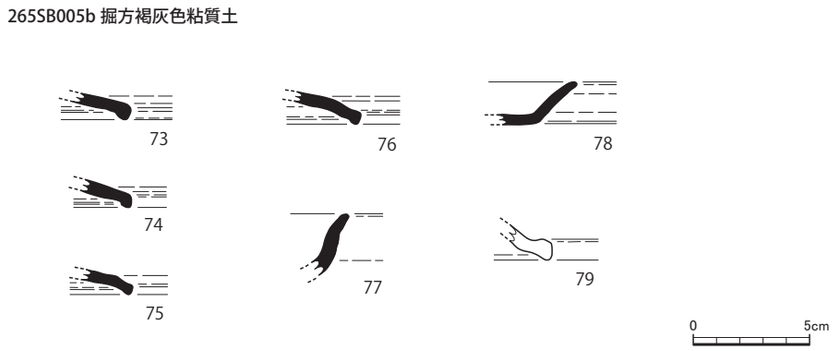


Fig.34　265SB005b 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　32　2008/11/04　17:21:22

265SB005c 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.35）

須恵器

蓋３（80） 口縁端部を僅かに摘みだした断面三角形を呈す。内面に火襷が認められる。

土師器

椀（81） 体部は内湾しながら立ち上がる。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

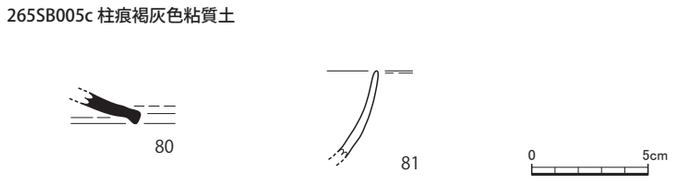


Fig.35　265SB005c 出土遺物実測図（1/3）

265SB025a 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.36）

須恵器

坏（82） 体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土師器

蓋３（83） 口縁端部を僅かに屈曲させる。外面は回転ヘラ削り、端部は回転ナデによる調整。外面の一部と内面にはヘラ磨きを認める。

Fig.36　265SB025a 出土遺物実測図（1/3）

265SB025b 掘方灰褐色粘質土出土遺物（Fig.37）

須恵器

蓋３（84･85･86） 84 は口縁端部を短く屈曲させる。焼成不良で内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。85 は口縁端部を僅かに摘みだした程度である。内外面とも回転ナデ調整が認められる。86 の復元値は口径 15.9cm、器高 1.25cm を測る。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、端部は回転ナデ、内面は回転ナデの後に更にナデ調整を行う。内外端部に焼成時の重ね焼きで生じた黒色化がみられる。

坏（87･88） 88 は体下部で緩やかに屈曲すると、直線的に立ち上がり口縁部が僅かに外反する。外面体部下半は回転ヘラ削りが認められる。坏は体部が開き気味に直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナデが認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　33　2008/11/04　17:21:23

高坏（89） 口縁を内側に屈曲させる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。
鉢（90） 内外面とも回転ナデ調整が認められる。

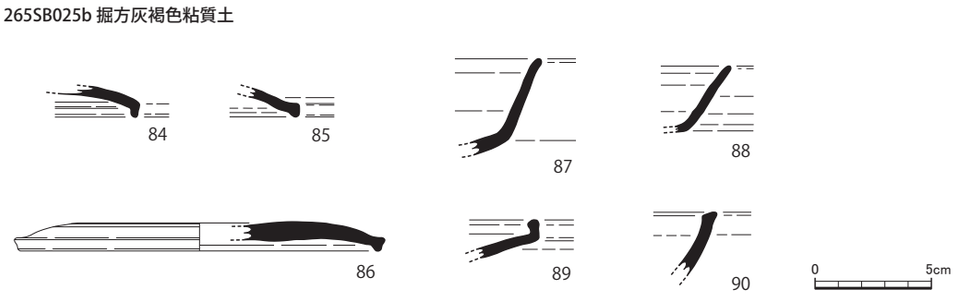


Fig.37 265SB025b 出土遺物実測図（1/3）

265SB025c 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.38）

須恵器

蓋 3（91・92） 92 は口縁端部は僅かに摘みださた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められ。端部には焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。92 は口縁端部を僅かに摘みだした程度で、断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、これ以外は回転ナデ調整が認められる。

坏（93） 体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土師器

甕（94） 内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

坏（95） 体部は開き気味に立ち上がる。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

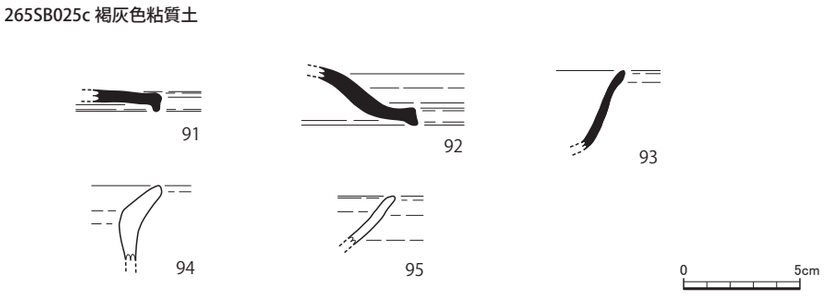


Fig.38 265SB025c 出土遺物実測図（1/3）

265SB025d 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.39）

須恵器

蓋 c3（96） 口径 12.7cm、器高 1.5cm、ツマミ径 1.6cm を測る。ツマミは断面が逆台形の釦状で、口縁端部を僅かに摘みだす程度である。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデの後ナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 34 2008/11/04 17:21:26

蓋３（97）　口縁端部は僅かに摘みだされる程度である。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデの後ナデ調整、端部は回転ナデ調整が認められる。

小蓋 c3（98）　復元値は口径 13.2cm、器高 1.2cm を測る。口縁端部は僅かに摘みだされ、断面三角形を呈す。外面天井部は粗い回転ヘラ削り、内面は回転ナデの後に更にナデ調整が認められる。端部は回転ナデ調整が認められる。

坏（99）　内湾気味に立ち上がると、口縁部で僅かに外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SB025d 掘方にぶい褐色粘質土出土遺物（Fig.39）

須恵器

蓋３（100）　口縁端部を短く開き気味に屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

小蓋３（101）　復元値は口径 12.4cm、器高 1.3cm を測る。口縁端部は僅かに摘みださた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。端部は重ね焼きによる薄い黒色化がみられる。

坏（102）　口縁部が外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

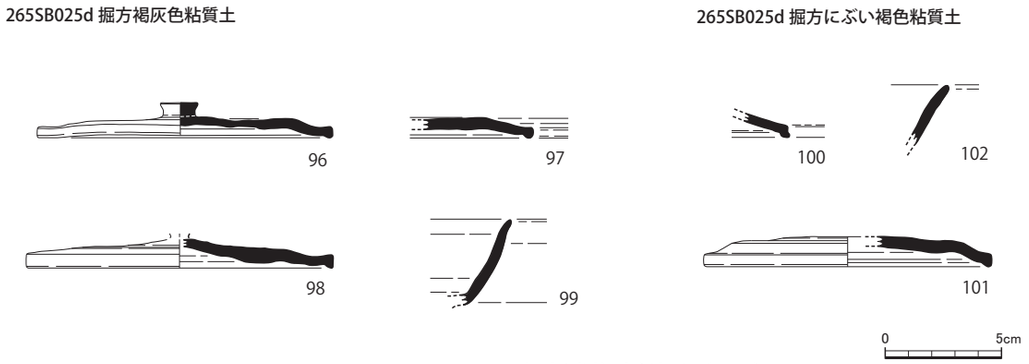


Fig.39　265SB025d 出土遺物実測図（1/3）

265SB025e 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.40）

須恵器

蓋３（103）　口縁端部を僅かに摘みだした断面三角形を呈す。焼成不良で内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

壺蓋（104）　復元値は口径 14.0cm、残存器高 2.9cm を測る。口縁部は開き気味で下方に延び、端部が僅かに摘みだされる。外面天井部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整が認められる。

坏（105）　体部は直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

皿（106）　体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

小壺（107）　頸部から胴部にかけての破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、胴部は膨らむ。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　35　2008/11/04　17:21:28

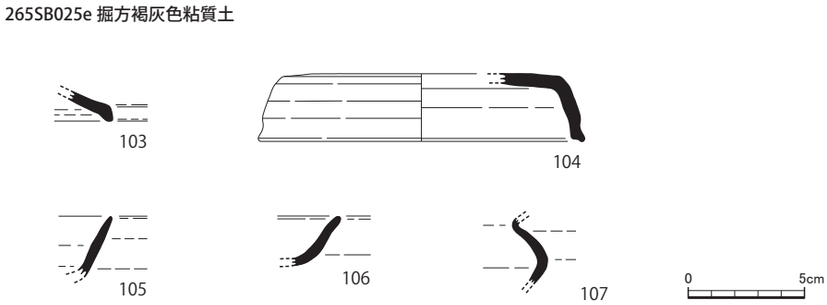


Fig.40　265SB025e 出土遺物実測図（1/3）

265SB025f 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.41）

須恵器

蓋３（108）　口縁端部は僅かに摘みだされた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

坏（109）　内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SB025f 掘方灰褐色粘質土出土遺物（Fig.41）

須恵器

蓋３（110）　口縁端部は僅かに摘みだされた断面三角形を呈す。焼成不良で内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

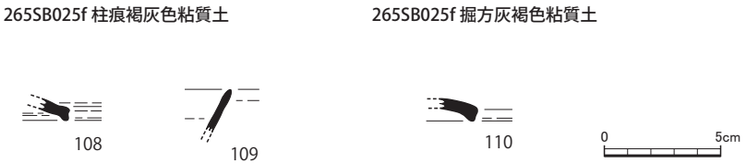


Fig.41　265SB025f 出土遺物実測図（1/3）

265SB025i 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.42）

須恵器

蓋ｃ（111）　ツマミは断面が逆台形状の扁平なツマミが付く。

蓋３（112）　内外面とも回転ナデ調整が認められる。

坏ｃ（113）　丸みを帯びた体部に低い高台が貼り付く。内面は回転ナデの後に更にナデ、外面底部は回転ヘラ切り後にナデが行われる。

皿（114）　体部は開き気味に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　36　2008/11/04　17:21:30

土師器

坏（115） 口縁部の小破片。体部は外上方に直線的に立ち上がる。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

265SB025i 掘方褐灰色粘質土上層出土遺物（Fig.42）

須恵器

蓋３（116） 復元値は口径 13.9cm、器高 1.8cm を測る。端部を短く屈曲させ、断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ切り後ナデ、端部は回転ナデ、内面は回転ナデの後にナデ調整を行う。

坏（117） 体部は直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外反させる。

265SB025i 掘方褐灰色粘質土下層出土遺物（Fig.42）

須恵器

甕（118） 復元値は口径 13.1cm、残存器高 5.2cm を測る。内面頸部下に指頭痕が認められる。

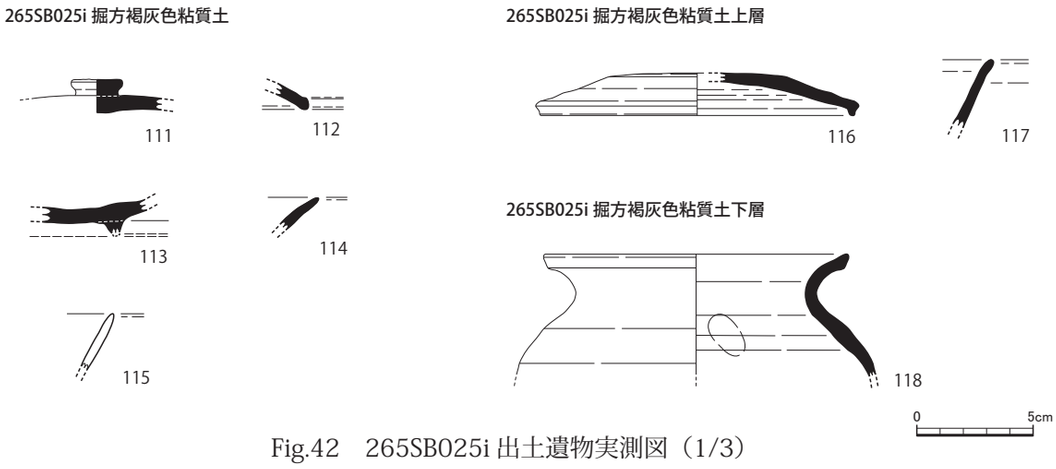


Fig.42　265SB025i 出土遺物実測図（1/3）

265SB030a 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.43）

須恵器

蓋 c3（119） 復元値は口径 18.2cm、器高 2.45cm、ツマミ径 2.5cm を測る。口縁端部は僅かに摘みだされた断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、口縁端部は回転ナデ、内面は回転ナデ後更にナデ調整が認められる。

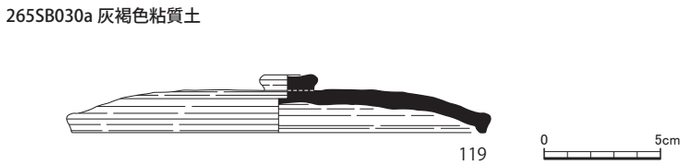


Fig.43　265SB030a 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 37 2008/11/04 17:21:32

265SB035a 掘方にぶい黄橙色粘質土出土遺物（Fig.44）

土師器

蓋 c（120）　ツマミ径 1.8cm。ツマミ形状は扁平な釦状。内外面とも調整は不明である。

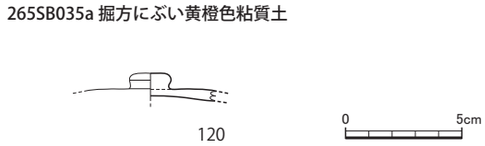


Fig.44　265SB035a 出土遺物実測図（1/3）

265SB035b 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.45）

石製品

平玉石（121）　縦 1.25cm、横 0.95cm、厚さ 0.4cm、重さ 0.8g を測る。薄青緑色のチャート製。

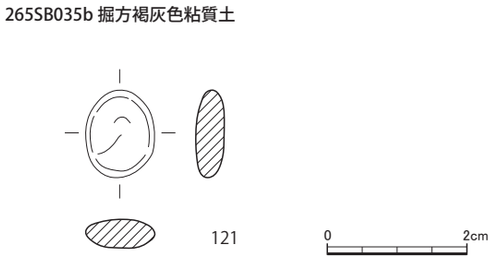


Fig.45　265SB035b 出土遺物実測図（1/1）

265SB035c 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.46）

須恵器

蓋 3（122）　口縁端部を短く屈曲させ、断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土師器

皿（123）　口縁部が外反する。内外面とも摩滅が著しいが、内面に回転ナデが部分的に認められる。

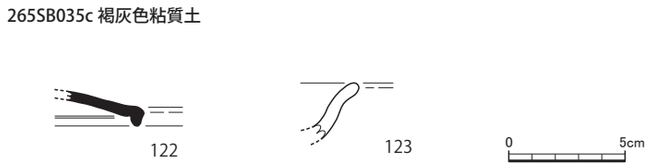


Fig.46　265SB035c 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　38　　2008/11/04　17:21:33

265SB035e 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.47）

須恵器

蓋３（124）　復元値は口径 18.05cm を測る。口縁端部を短く屈曲した断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。外面に火襷、内面に煤もしくは墨痕が認められる。

土師器

蓋 c（125）　ツマミ径 2.8cm。断面が逆台形の釦状である。

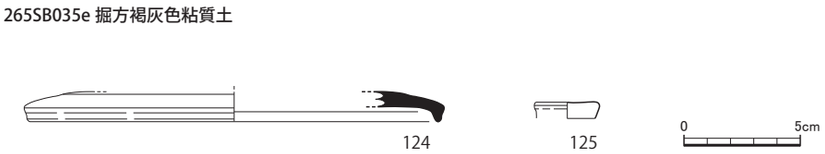


Fig.47　265SB035e 出土遺物実測図（1/3）

265SB035g 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.48）

須恵器

蓋３（126）　口縁端部を僅かに摘みだした断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

坏（127）　体部は開き気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

坏 c（128）　高台は底端部内側に内傾して貼り付く。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土師器

蓋３（129）　内外面とも摩滅が著しく調整不明である。

壺 a × c（130）　頸部で屈曲した口縁は短く外傾する。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

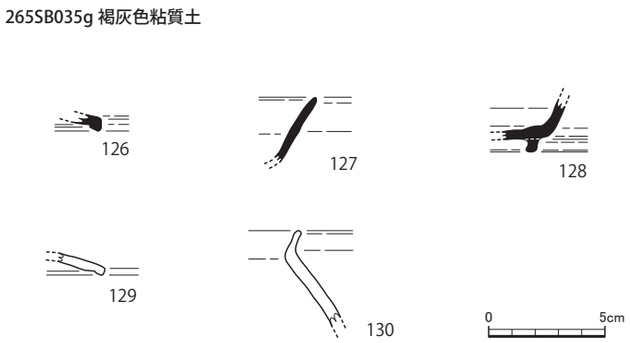


Fig.48　265SB035g 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　39　2008/11/04　17:21:34

265SB035h 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.49）

須恵器

蓋３（131） 復元値は口径 14.3cm、器高 2.0cm を測る。口縁端部を短く屈曲させる。外面は回転ヘラ削り、内外口縁端部は回転ナデ、内面は回転ナデの後更にナデ調整が認められる。

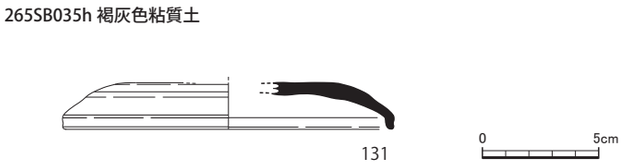


Fig.49　265SB035h 褐灰色粘質土出土遺物実測図（1/3）

265SB040g 柱痕褐灰色粘質土（Fig.50）

須恵器

蓋３（132） 復元値は口径 15.7cm を測る。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土師器

蓋３（133） 口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも摩滅が著しく調整不明である。

265SB040g 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.50）

須恵器

蓋 c3（134） 復元値は口径 13.4cm、器高 1.65cm、ツマミ径 1.9cm を測る。ツマミ形状は扁平な釦状となる。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、口縁端部は回転ナデ、内面は回転ナデの後に更にナデ調整が認められる。

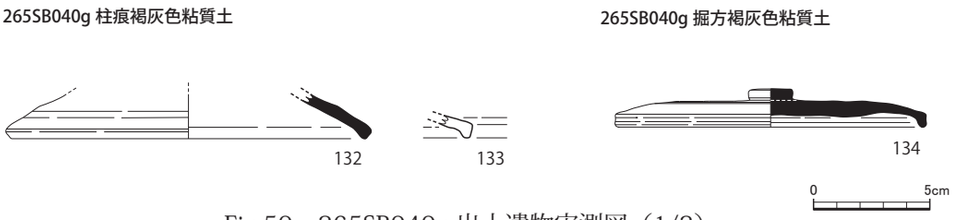


Fig.50　265SB040g 出土遺物実測図（1/3）

265SB045a 掘方にぶい褐色粘質土出土遺物（Fig.51）

須恵器

坏 d（135） 底部は回転ヘラ削り、内外体部は回転ナデ、内底部は回転ナデの後に更にナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　40　2008/11/04　17:21:35

265SB045a 掘方にぶい褐色粘質土

Fig.51　265SB045a 出土遺物実測図（1/3）

265SB045e 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.52）

須恵器

蓋 3（136）　口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SB045e 掘方褐灰色粘質土

Fig.52　265SB045e 出土遺物実測図（1/3）

265SB045g 掘方褐灰色粘質土出土遺物（Fig.53）

須恵器

壺（137）　底径 9.75cm。高台は開き気味に貼り付く。内外体部は回転ナデ、外底部は回転ヘラ削り、内面は回転ナデの後に更にナデ調整を行う。

265SB045g 掘方褐灰色粘質土

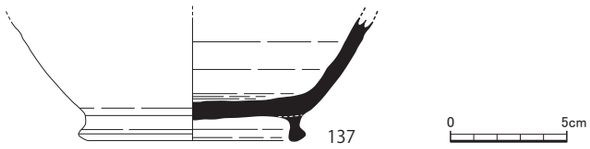


Fig.53　265SB045g 出土遺物実測図（1/3）

265SB055c 柱痕灰褐色粘土出土遺物（Fig.54）

須恵器

蓋 3（138）　口縁端部は僅かに摘みだされた程度の膨らみである。外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整が認められる。

坏（139）　体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　41　2008/11/04　17:21:36

坏 a（140） 復元値は口径 13.2cm、器高 3.0cm、復元底径 8.1cm を測る。体部上半から外反しながら立ち上がる。底部は回転ヘラ切り後にナデ、その他は回転ナデ調整が認められる。

坏 c（141） 体下部は丸みを帯びる。低い高台が底端部より内側に貼り付く。底部は回転ヘラ削り後ナデ、内面は回転ナデの後に更にナデが認められる。内外体部は回転ナデが認められる。

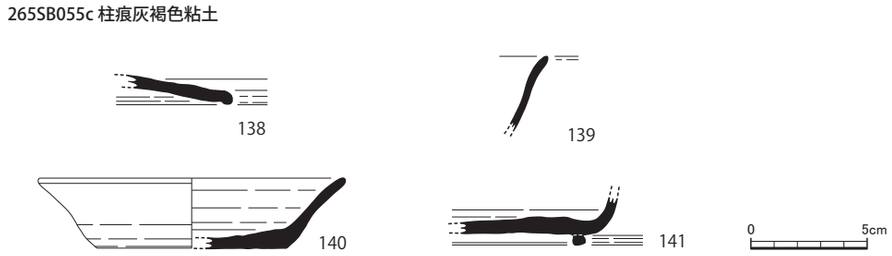


Fig.54 265SB055c 出土遺物実測図（1/3）

265SB060a 柱痕灰褐色粘質土出土遺物（Fig.55）

須恵器

坏 a（142） 復元値は口径 14.2cm、器高 3.1cm、底径 10.8cm を測る。底部から口縁部にかけ内湾気味に立ち上がる。底部は回転ヘラ切りの後ナデ、内面底部はナデ調整。内外面に火襷が認められる。

265SB060a 掘方にぶい橙色粘質土出土遺物（Fig.55）

須恵器

蓋 3（143） 口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

坏（144） 底部から体部にかけ内湾し、口縁部で僅かに外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

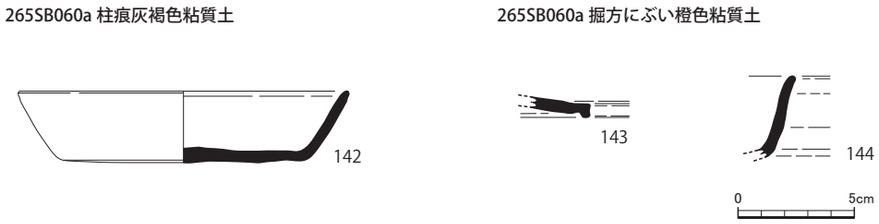


Fig.55 265SB060a 出土遺物実測図（1/3）

265SB060c にぶい黄橙色粘質土出土遺物（Fig.56）

須恵器

蓋 c（145） ツマミ径 2.2cm。ツマミは扁平な宝珠形で、僅かに頂部が尖る。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

蓋 3（146） 口縁端部を短く屈曲した断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 42 2008/11/04 17:21:38

265SB060c にぶい黄橙色粘質土

Fig.56　265SB060c 出土遺物実測図（1/3）

265SB060d 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.57）

須恵器

蓋 3（147）　口縁端部は僅かに摘みだされた断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削りが認められる。内面および口外面は縁端部に回転ナデ調整が認められる。

坏（148）　復元値の口径 12.4cm。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

坏×皿（149）　口縁部が外反する。内外面ともに回転ナデ調整がを認められる。口縁部の内面に火襷あり。

265SB060d 掘方灰褐色粘質土出土遺物（Fig.57）

須恵器

坏（150・151）　150 は口縁部が外反する。内外面ともに回転ナデによる調整が認められる。151 は体部から口縁部にかけ直線的に立ち上がる。器厚が薄い。

坏 c（152）　底端部より内側に低い高台が貼り付く。底部はナデ、その他は回転ナデ調整が認められる。

土師器

坏c（153）　底径7.9cmを測る。高台は開き底端部に貼り付く。焼成不良で内外面とも摩滅が著しい。

皿（154）　体部が僅かに外反しながら短く立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

石製品

平玉石（155）　縦 1.5cm、横 1.3cm、厚さ 0.5cm、重さ 1.5cm。チャート製。

265SB060d 柱痕褐灰色粘質土　　265SB060d 掘方灰褐色粘質土

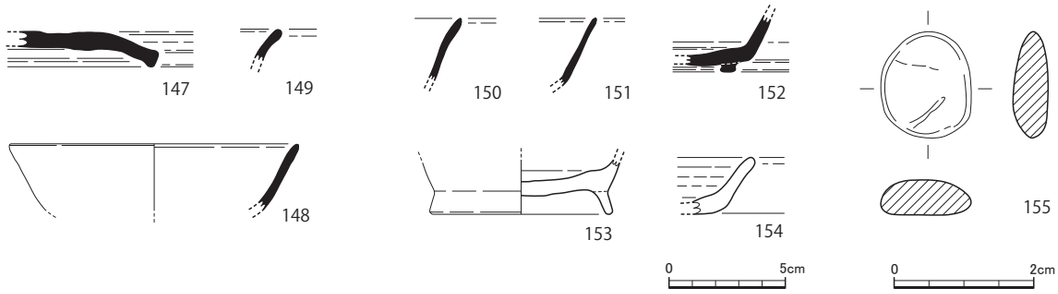


Fig.57　265SB060d 出土遺物実測図（1/3・1/1）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　43　　2008/11/04　17:21:40

265SB065c 柱痕灰褐色粘質土出土遺物（Fig.58）

土師器

椀 c2（156）　体部は内湾しながら立ち上がる。高台は底端部に開き貼り付く。

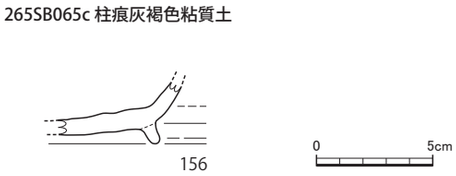


Fig.58　265SB065c 出土遺物実測図（1/3）

265SB070a 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.59）

須恵器

蓋 3（157・158）　158 は口縁端部を僅かに摘みだした断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデによる調整。外面端部は焼成時の重ね焼きにより白色化をする。158 は口縁端部を短く屈曲させる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

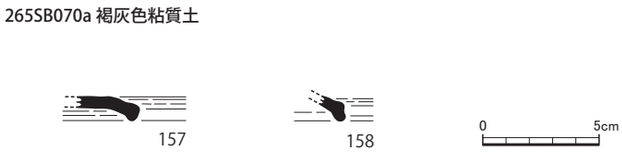


Fig.59　265SB070a 出土遺物実測図（1/3）

265SB070c 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.60）

須恵器

蓋 3（159・160）　159 は口縁端部を短く屈曲させる。内外面ともに回転ナデによる調整が認められる。160 は僅かに摘みだされた口縁端部が断面三角形を呈す。焼成不良で脆く、内外面とも摩滅が著しい。

壺蓋（161）　口縁を下方に長く折り延ばす。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

坏 c（162）　低い高台が貼り付く。内面は回転ナデ後に不定方向のナデが、外面は回転ナデ調整が認められる。

坏 c（163）　高台断面は四角で、底端部より内側に高台を貼り付ける。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

土師器

蓋 c（164）　ツマミ径 2.2cm。回転ナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　44　2008/11/04　17:21:41

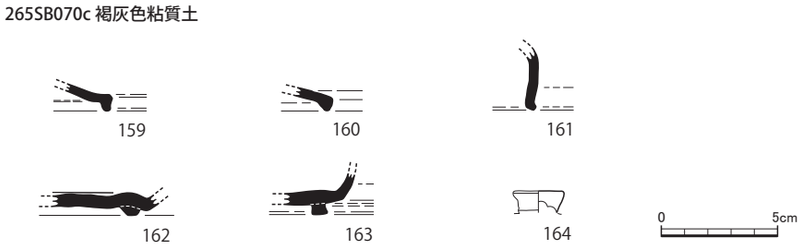


Fig.60　265SB070c 出土遺物実測図（1/3）

265SB070d 柱痕褐灰色粘質土出土遺物（Fig.61）

須恵器

坏（165）　体部から口縁部にかけ直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

坏 c（166）　体部は外反しながら立ち上がる。高台は底端部の内側に貼り付く。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

265SB070d 掘方灰褐色粘質土出土遺物（Fig.61）

須恵器

蓋 3（167･168･169）　167 は口縁端部を短く屈曲した断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。168 は口縁端部を短く屈曲させる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。169 は口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整認められる。焼成時の重ね焼きによる黒色化が認められる。

坏（170）　直線的に立ち上がる形状で、内外面とも回転ナデ調整が認められる。

Fig.61　265SB070d 出土遺物実測図（1/3）

265SB075a 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.62）

須恵器

高坏（171）　短い口縁が外傾する。外面体部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整が認められる。

甕（172）　口縁端部は折り曲げて肥厚にする。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土師器

甕（173）　口縁部から頸部の破片。頸部を「く」字状に屈曲させる。内外口縁部はヨコナデ、内面頸部はヘラ削り。2 ～ 3mm の白色砂粒を多く含む。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　45　2008/11/04　17:21:44

265SB075a 明褐色粘質土出土遺物（Fig.62）

石製品

平玉石（174・175・176）　174 は縦 1.45cm、横 1.0cm、厚さ 0.3cm、重さ 0.7g。灰白色のチャート製。175 は縦 1.4cm、横 1.15cm、厚さ 0.3cm、重さ 0.7g。灰白色のチャート製。176 は縦 1.25cm、横 1.1cm、厚さ 0.4cm、重さ 0.8g。淡灰色のチャート製。

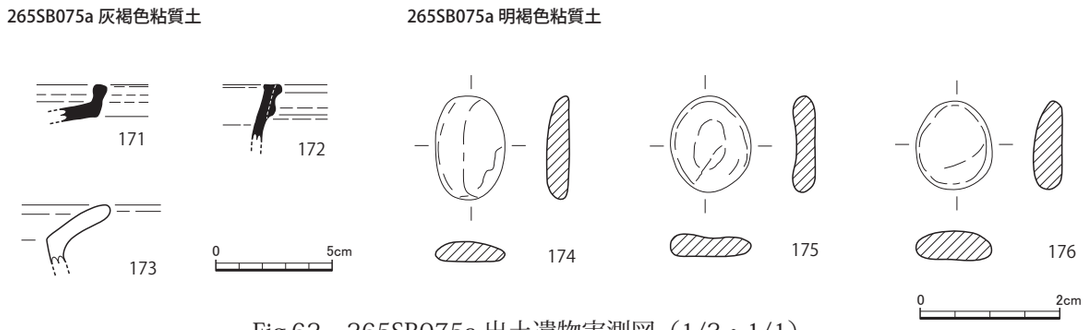


Fig.62　265SB075a 出土遺物実測図（1/3・1/1）

265SB075b 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.63）

須恵器

蓋 3（177）　口縁端部を短く内側に屈曲させた断面三角形を呈す。外面天井部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整。また、内外口縁端部には重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。

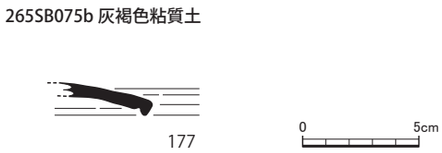


Fig.63　265SB075b 出土遺物実測図（1/3）

265SB075e 柱痕褐灰色粘土出土遺物（Fig.64）

須恵器

蓋 3（178）　口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

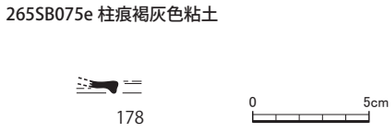


Fig.64　265SB075e 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　46　2008/11/04　17:21:46

c. 溝出土遺物

265SD069 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.65）

須恵器

蓋３（179･180） いずれも口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈し、内外面とも回転ナデ調整が認められる。

皿×坏（181） 内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

土師器

椀 c2（182） 体下部は丸みを帯び、内湾しながら立ち上がるものと思われる。高台は開き気味に貼り付く。焼成は不良で内外面とも摩滅が著しい。

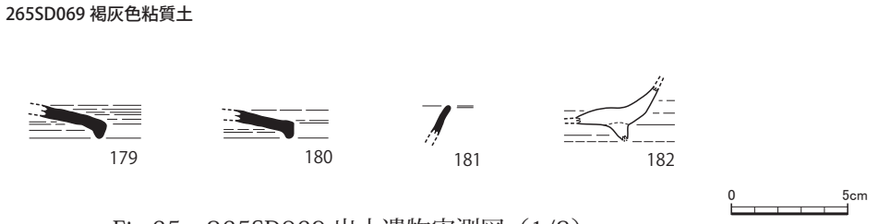


Fig.65 265SD069 出土遺物実測図（1/3）

d. 土坑出土遺物

265SK034 褐灰色粘質土（Fig.66）

土師器

椀 c1（183） 低い高台が開き貼り付く。内外面とも摩滅が著しく調整は不明。

265SK034 明褐色粘質土出土遺物（Fig.66）

須恵器

蓋３（184） 口縁端部を僅かに摘みだす。内外面とも回転ナデ調整。外面は焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。

坏 c（185） 体下部は丸みを帯びる。高台は底端部内側に開き貼り付く。外面底部は回転ナデ、内面は回転ナデ後に更にナデを行う。肥後産。

土師器

坏 c1（186） 内外面とも摩滅が著しく調整不明。

瓦

瓦玉（187） 四方を打ち欠く。内面は布目、外面は格子目状の文様が認められる。

265SK034 明褐灰色粘質土出土遺物（Fig.66）

ガラス製品

臼玉（188） 長さ 0.65cm、幅 0.75cm、厚さ 0.5cm。輝きの鈍い濃紺色を示す。

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 47 2008/11/04 17:21:47

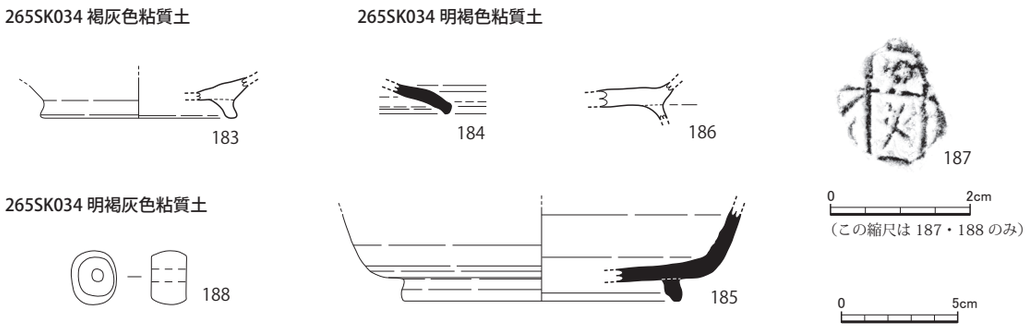


Fig.66　265SK034 出土遺物実測図（1/3・1/1）

265SK066 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.67）

須恵器

蓋（189）　外面は粗い回転ヘラ削をした後に、口縁にかけ回転ナデによる調整が認められる。内面は回転ナデの後に、更にナデ調整を行う。内面全体に薄い墨痕がみられる。

蓋 a3（190）　復元値は口径 12.7cm、器高 1.7cm。天井部から口縁部にかけ肥厚なつくりで、口縁端部は短く屈曲し、断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り後にナデ調整を行う。内面天井部は回転ナデ後に更にナデ調整を行う。内外面ともに薄い墨痕が認められる。

蓋 3（191）　口縁端部を下方に長く摘みだすようにして延ばす。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

土師器

坏 c（192）　底部の破片。体下部は丸みを帯びる。焼成不良で内外面とも摩滅が著しい。

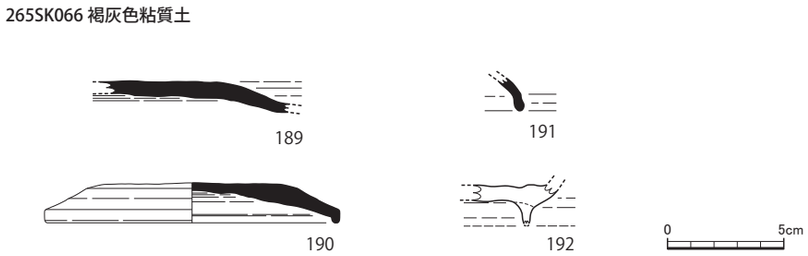


Fig.67　265SK066 出土遺物実測図（1/3）

e. その他の遺構出土遺物

小穴出土遺物

265SX002 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.68）

須恵器

蓋 3（193･194）　口縁端部を短く短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。外面には焼成時の重ね焼きによる黒色化がみられる。194 は口縁端部を僅かに摘みだした断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、これ以外は回転ナデ調整が認められる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　48　2008/11/04　17:21:49

坏（195）　復元値は口径 19.6cm を測る。体部は外上方に直線的に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

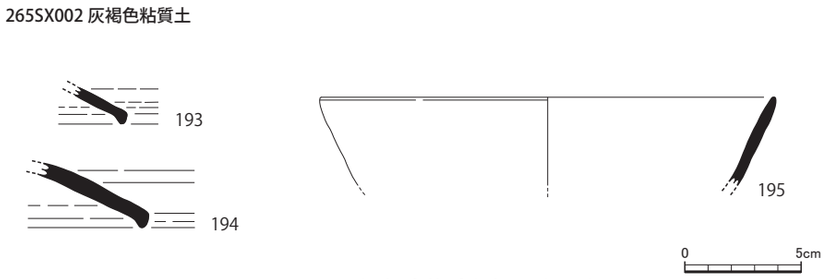


Fig.68　265SX002 出土遺物実測図（1/3）

265SX003 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.69）

須恵器

大皿 c（196）　復元値は口径 23.0cm、器高 4.1cm、復元底径 17.4cm を測る。高台は開き気味に貼り付く。体下部は丸みを帯びる。底部は回転ヘラ削り、内面はナデ、これ以外は回転ナデ調整が認められる。

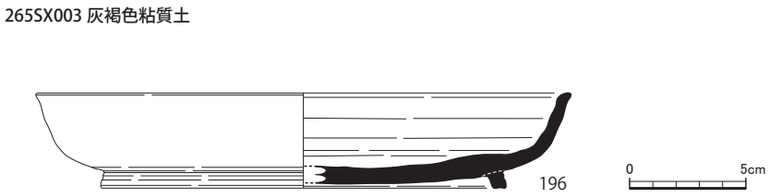


Fig.69　265SX003 出土遺物実測図（1/3）

265SX006 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.70）

須恵器

蓋 c（197）　ツマミ径 2.2cm。ツマミ形状は逆台形の釦状。内外面とも回転ナデ調整が認められる。内面には判読し難いほど薄い墨痕あり。

蓋 3（198）　口縁端部を僅かに摘みだした断面三角形を呈す。外面天井部はヘラ削りが認められる。外面には焼成時の重ね焼きで生じた黒色化がみられる。

壺蓋（199）　下方に内湾した口縁は、端部で僅かに摘みだされる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

高坏×蓋 3（200）　短い口縁を直立させる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　49　2008/11/04　17:21:50

265SX006 灰褐色粘質土

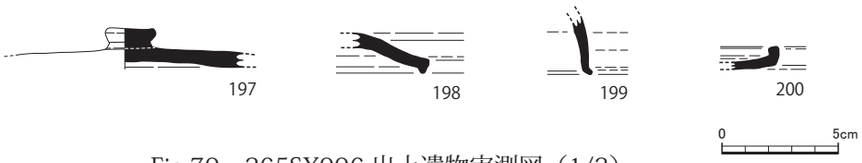


Fig.70　265SX006 出土遺物実測図（1/3）

265SX008 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.71）

須恵器

蓋３（201）　口縁端部を僅かに摘みだした断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SX008 灰褐色粘質土

Fig.71　265SX008 出土遺物実測図（1/3）

265SX011 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.72）

須恵器

蓋３（202）口縁端部は僅かに摘みだした断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデによる調整が認められる。内外面に焼成時の重ね焼きにより生じた青灰色化がみられる。

坏ｃ（203）　体部が内湾気味に立ち上がる。扁平な高台が外に開き貼り付く。

265SX011 灰褐色粘質土

Fig.72　265SX011 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　50　2008/11/04　17:21:52

265SX012 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.73）

土師器

坏 a ×皿 a（204） 体部は開き気味に立ち上がる。内外面とも摩滅が著しく調整は不明。

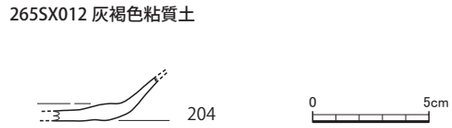


Fig.73　265SX012 出土遺物実測図（1/3）

265SX014 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.74）

須恵器

蓋 3（205） 復元値は口径 11.9cm を測る。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内面は回転ナデ後にナデ調整。これ以外は回転ナデによる調整を認める。焼成不良で暗茶褐色の色調となる。

石製品

平玉石（206） 縦 1.1cm、横 1.0cm、厚さ 0.55cm、重さ 1.0g。白色の石英質。

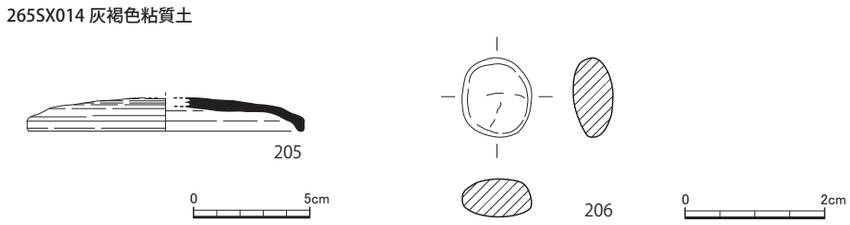


Fig.74　265SX014 出土遺物実測図（1/3・1/1）

265SX018 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.75）

須恵器

皿（207） 口縁部が屈曲し上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

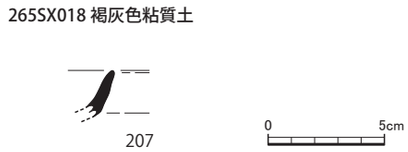


Fig.75　265SX018 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 51 2008/11/04 17:21:53

265SX021 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.76）

須恵器

皿（208） 口縁部が外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

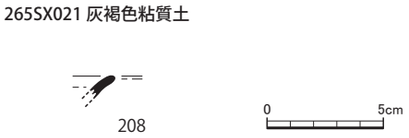


Fig.76　265SX021 出土遺物実測図（1/3）

265SX024 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.77）

須恵器

蓋 c（209） ツマミ径 2.4cm、扁平な釦状の形状で頂部が僅かに尖る。外面は回転ナデ、内面はナデの調整が認められる。

蓋 3（210･211） 210 は復元値が口径 16.2cm、器高 1.45cm を測る。口縁端部を短く屈曲させる。内外面とも回転ナデ調整が認められる。内外面に焼成時の重ね焼きによる色調の変化がみられる。211 は口縁端部を短く屈曲させる。内面は回転ナデの後ナデ、これ以外は回転ナデによる調整が認められる。外面には焼成時の重ね焼きで生じた黒色化と降灰がみられる。

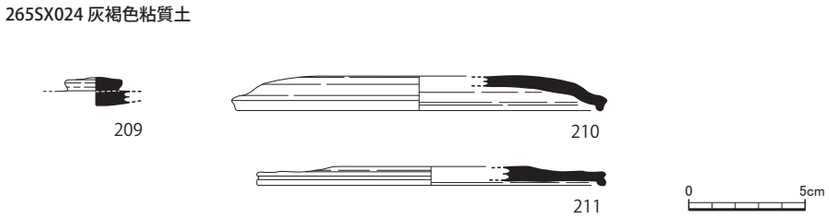


Fig.77　265SX024 出土遺物実測図（1/3）

265SX027 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.78）

須恵器

蓋 3（212） 口縁端部は僅かに摘みだされた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。端部は焼成時の重ね焼きにより生じた灰白色化がみられる。

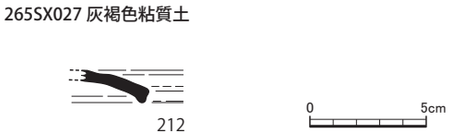


Fig.78　265SX027 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文 13-62（遺構・遺物）.indd 52 2008/11/04 17:21:54

265SX028 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.79）

土師器

坏 a（213） 復元値は口径 11.7cm、器高 3.6cm、底径 8.0cm を測る。体下部は丸みを帯びる。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

265SX028 灰褐色粘質土

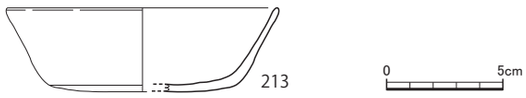


Fig.79　265SX028 出土遺物実測図（1/3）

265SX033 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.80）

須恵器

坏 c（214） 体下部は丸みを帯び、体部は直立する。低い高台が開き貼り付く。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

265SX033 灰褐色粘質土

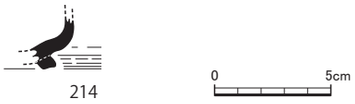


Fig.80　265SX033 出土遺物実測図（1/3）

265SX043 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.81）

須恵器

蓋 3(215） 口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

土師器

坏（216） 体部は直線的に立ち上がる。内外面とも摩滅が著しく調整は不明である。

265SX043 にぶい褐色砂質土出土遺物（Fig.81）

土師器

坏 a（217） 復元値は底径 7.8cm を測る。底部は回転ヘラ切りの後ナデ、体部下半はヘラ削りで上半は回転ナデ、内面底部は不定方向ナデ調整である。

皿（218） 口縁部が外反する。摩滅が著しく調整は不明である。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　53　2008/11/04　17:21:55

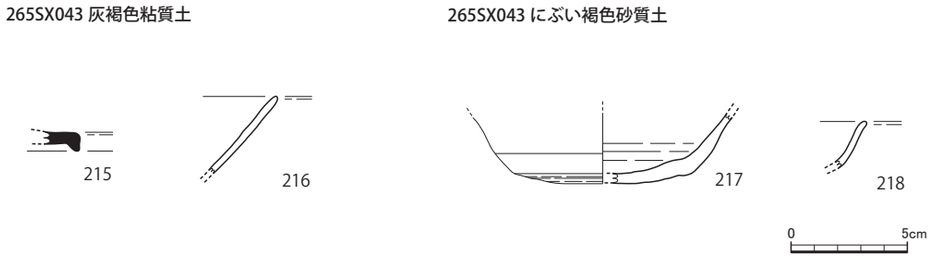


Fig.81　265SX043 出土遺物実測図（1/3）

265SX062 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.82）

須恵器

皿（219）　体部が開き短く立ち上がる。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

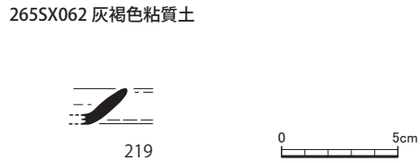


Fig.82　265SX062 出土遺物実測図（1/3）

265SX071 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.83）

須恵器

坏（220）　体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

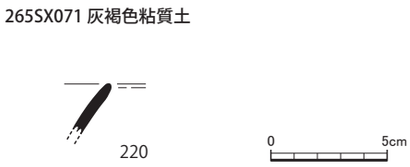


Fig.83　265SX071 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　54　2008/11/04　17:21:56

265SX083 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.84）

土師器

坏 d（221）　体部は僅かに内湾しながら立ち上がる。焼成不良で内外面とも摩滅が著しい。

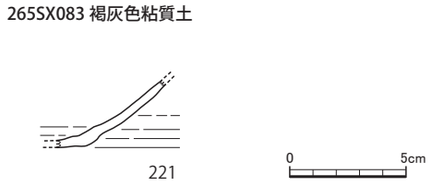


Fig.84　265SX083 出土遺物実測図（1/3）

265SX091 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.85）

須恵器

蓋 3（222）　口縁端部は僅かに摘みだした断面三角形を呈す。内外面ともに回転ナデによる調整が認められる。

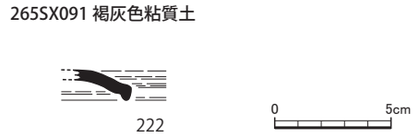


Fig.85　265SX091 出土遺物実測図（1/3）

265SX096 褐灰色粘質土出土遺物（Fig.86）

須恵器

坏 c（223）　復元値は口径 14.8cm、器高 4.0cm、底径 9.6cm を測る。底部から体部中位にかけては直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。高台は低めで、底端部より内側に貼り付く。内面は回転ナデの後に更にナデ調整が行われる。

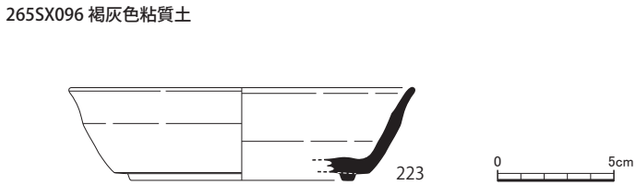


Fig.86　265SX096 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　55　2008/11/04　17:21:57

265SX098 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.87）

須恵器

蓋３（224）　口縁端部は僅かに摘みだした断面三角形を呈す。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

小坏ｃ（225）　底端部より内側に低い高台が開き貼り付く。

Fig.87　265SX098 出土遺物実測図（1/3）

265SX099 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.88）

須恵器

蓋３（226）　口縁端部は僅かに摘みだされた断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデの後に更にナデ調整が行われる。

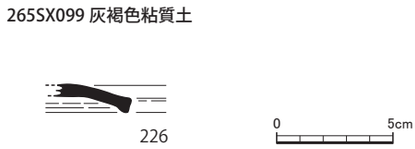


Fig.88　265SX099 出土遺物実測図（1/3）

265SX102 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.89）

須恵器

皿×坏（227）　体下部で上方に屈曲し、口縁部まで外反する。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

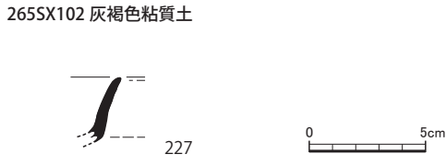


Fig.89　265SX102 出土遺物実測図（1/3）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　56　2008/11/04　17:21:58

265SX124 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.90）

須恵器

蓋３（228）　口縁端部を摘み出した程度で断面三角形を呈す。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

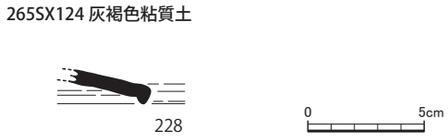


Fig.90　265SX124 出土遺物実測図（1/3）

265SX125 灰褐色粘質土出土遺物（Fig.91）

須恵器

坏c（229）　器高3.75cm。体部が内湾気味に立ち上がる。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。

Fig.91　265SX125 出土遺物実測図（1/3）

265SX126 にぶい褐色粘質土出土遺物（Fig.92）

須恵器

蓋３（230･231･232･233･234）230 は復元値が口径 16.9cm を測る。口縁端部は短く屈曲した断面三角形を呈す。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。231 は復元値が口径 14.9cm を測る。口縁端部を短く屈曲させた断面三角形を呈す。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。232 は口縁端部を短く外側に屈曲させた断面三角形を呈す。焼成不良で脆く摩滅が著しい。焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。233 は口縁端部を短く内側に屈曲させた断面三角形を呈す。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。234 は口縁端部を僅かに摘みだした程度で断面三角形を呈す。焼成不良で脆く摩滅が著しい。

小蓋 c3（235）　口径 10.9cm、器高 1.8cm、ツマミ径 1.5cm。端部は僅かに摘みだされ、断面三角形を呈す。外面は回転ヘラ削り、口縁端部は回転ナデ、内面は回転ナデの後に不定方向のナデ調整が認められる。外面端部には焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。

高坏×大蓋３（236）　復元値の口径 26.2cm、残存器高 1.5cm。底部は平坦で、口縁部は外上方に短く屈曲する。外面底部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ調整が認められる。口縁部には焼成時の重ね焼きにより生じた黒色化がみられる。

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　57　2008/11/04　17:21:59

土師器

坏ｃ（237） 摩滅が著しく調整は不明。体下部は丸みを帯び、内湾気味に立ち上がると、口縁部で外反する。高台は底端部より内側に貼り付く。

265SX126 にぶい褐色粘質土

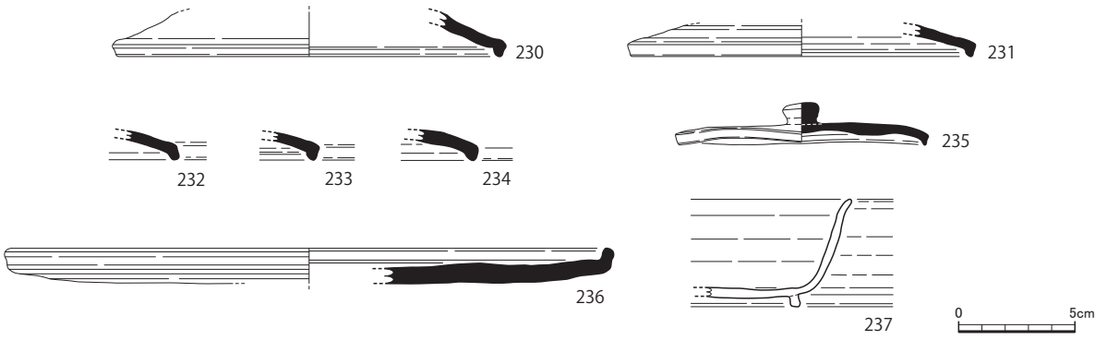


Fig.92　265SX126 出土遺物実測図（1/3）

f. 土層出土遺物

表土出土遺物（Fig.93）

須恵器

壺（238） 肩部付近の耳部分の破片。残存度は完全ではないが、形状は縦に貼り付けた段を有し、ヘラ状の工具で調整した痕が認められる。外面胴部はカキ目の後タタキ、耳周辺は本体に貼り付けた際の指ナデが、内面には当具痕がみられる。

緑釉陶器

皿（239） 復元値は底径 8.2cm を測る。内面底部には線刻で草花文を施す。外面の緑釉の残存状態は良いが、内面は大部分を剥落する。釉調はガラス質の淡灰緑色を示す。東海産である。

鉄製品

釘（240） 現存の長さ 3.75cm、幅 1.7cm、厚さ 1.1cm、重さ 3.6g を測る。

石製品

平玉石（241） 縦 1.25cm、横 1.05cm、厚さ 0.45cm、重さ 0.9cm を測る。白色の石英製。

表 土

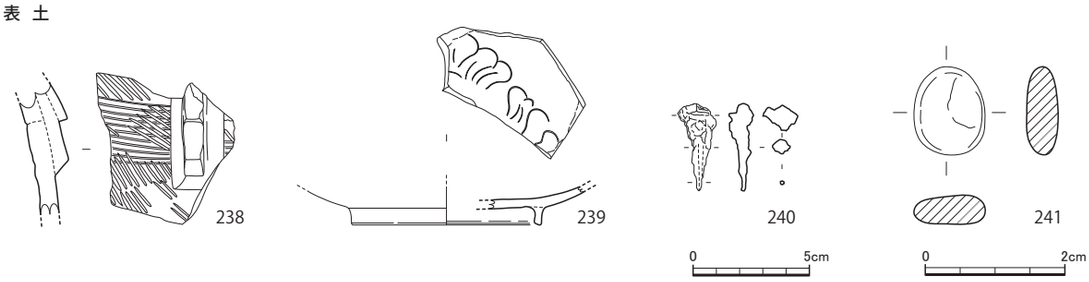


Fig.93　表土出土遺物実測図（1/3・1/1）

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　58　2008/11/04　17:22:01

Ⅶ. 大宰府条坊跡第 265 次調査出土柱材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大宰府条坊跡第 265 次調査では、8 世紀代の条坊に関連する施設と考えられる掘立柱建物跡が検出されている。保存状態は悪いものの、柱穴内部に柱根が残存している事例もいくつかある。

今回の分析調査では、出土した柱根材を対象として、柱材の木材利用を明らかにするために樹種同定を実施する。

1. 試　料

試料は、8 世紀前半と考えられる 2 軒の掘立柱建物跡（SB001･055）の柱穴から出土した柱材 6 点である。

2. 分析方法

柱材の状態を観察した上で、破損部など目立たない部分から木片を採取する。剃刀の刃を用いて、木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列などを観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較しながら類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結　果

樹種同定結果を Tab.1 に示す。柱は全て常緑広葉樹で、3 分類群（ツブラジイ・スダジイ・イスノキ）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ツブラジイ（Castanopsis cuspidata (Thunberg) Schottky）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に 1-2 個幅で放射方向に配列する。孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・スダジイ（Castanopsis cuspidata var. sieboldii (Makino) Nakai）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に 1-3 個幅で放射方向に配列する。孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　59　2008/11/04　17:22:01

互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高。プレパラートおよび資料の外観を観察した範囲では集合～複合放射組織は認められない。

ツブラジイとスダジイの最も大きな違いは、集合～複合放射組織の有無であるが、ツブラジイの集合～複合放射組織は、個体によって出現率が異なり、中には出現率がかなり低い個体もある。今回のように、ツブラジイとスダジイが混在している場合、スダジイとした中に集合～複合放射組織の出現率が低いツブラジイが含まれている可能性があるが、本報告ではプレパラートおよび資料の外観観察で集合～複合放射組織が認められない個体はスダジイとして区別した。

・イスノキ（Distylium racemosum Sieb. et Zucc.） マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有するが、段数は 5 前後で少ない。放射組織は異性、1-3 細胞幅、1-20 細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

遺 構	時期	用途	樹 種
SB001c	8 世紀	柱材	イスノキ
SB001m		柱材	ツブラジイ
SB001l		柱材	スダジイ
SB055a	8 世紀	柱材	ツブラジイ
SB055b		柱材	スダジイ
SB055c		柱材	スダジイ

Tab.1　樹種同定結果

4. 考　察

掘立柱建物跡から出土した柱材は、SB055b が芯持材である。他は、観察した範囲では樹芯が認められず、分割材を利用している可能性があるが、いずれも保存状態が良好ではないため、形状については詳細不明である。これらの柱材は、SB001c にイスノキが認められた他は、全てシイノキ属（ツブラジイ・スダジイ）であり、シイノキ属を主とした木材利用が推定される。

シイノキ属の木材は、やや重硬で強度も比較的高い部類に入り、加工は困難ではないが、乾燥による狂いが出やすいとされる。一方、イスノキは、極めて重硬・緻密で強度も高いが、加工は困難である。シイノキ属は、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種であり、イスノキも常緑広葉樹林中に生育する。現在の本地域は暖温帯であり、周辺の山地･丘陵地には常緑広葉樹を主とした森林が見られる。8 世紀頃の古植生については資料が少ないが、第 225 次調査の 9 世紀後半～ 10 世紀前半とされる SE036 の花粉分析結果で、アカガシ亜属やシイノキ属等の花粉化石が多い結果が報告されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2004）。これらの調査事例を考慮すれば、8 世紀頃の周辺地域にもシイノキ属やアカガシ亜属を主とした常緑広葉樹林が見られ、森林内に多く生育していた樹木を柱材に利用したことが推定される。

イスノキは櫛によく利用される樹種であり、櫛としての出土例はイスノキが分布していない地域からも報告されており、櫛が広範囲に運ばれていたことが推定される。一方、古代の柱材に利用される例として、周辺地域では東那珂遺跡で確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1995）、イス

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　60　2008/11/04　17:22:01

ノキが自生する地域における利用例として注目される。

大宰府関連遺跡では、大宰府政庁跡で 8 世紀前半とされる掘立柱建物跡 SB055a の柱材について樹種同定が実施されており、調査した全点が針葉樹のコウヤマキに同定されている（伊東・島地,1979）。コウヤマキは、藤原宮や平城宮でヒノキと共に柱材として利用されていたことが明らかになっている樹種であり、耐水性に優れた材質を有する。現在のコウヤマキ自生地は、本州・四国・九州に散在し、九州では宮崎県と熊本県の県境地域（椎葉村）等に分布しているが、太宰府市周辺には分布していない。このことから、本地域では、8 世紀前半の柱材に、周辺に生育していた常緑広葉樹のシイノキ属を中心に利用する建物と、周辺に生育していなかった可能性がある針葉樹のコウヤマキを利用する建物とがあることが指摘できる。このような違いは、建物の規模・用途・機能の違い等が関係している可能性がある。今後、同時期の建物柱材に関する資料を蓄積し、出土遺物等の情報も合わせて検討することがのぞまれる。

【引用文献】

林　　昭三 , 1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .
伊東　隆夫 , 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.
伊東　隆夫 , 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 ,66-176.
伊東　隆夫 , 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.
伊東　隆夫 , 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.
伊東　隆夫 , 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.
伊東　隆夫・島地　謙 , 1979, 古代における建造物柱材の使用樹種 . 木材研究資料 ,14, 京都大学木材研究 ,49-76.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,1995, 東那珂遺跡出土木製品の樹種 .「福岡市東那珂遺跡Ⅰ」, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 400 集 , 福岡市教育委員会 ,34-38.

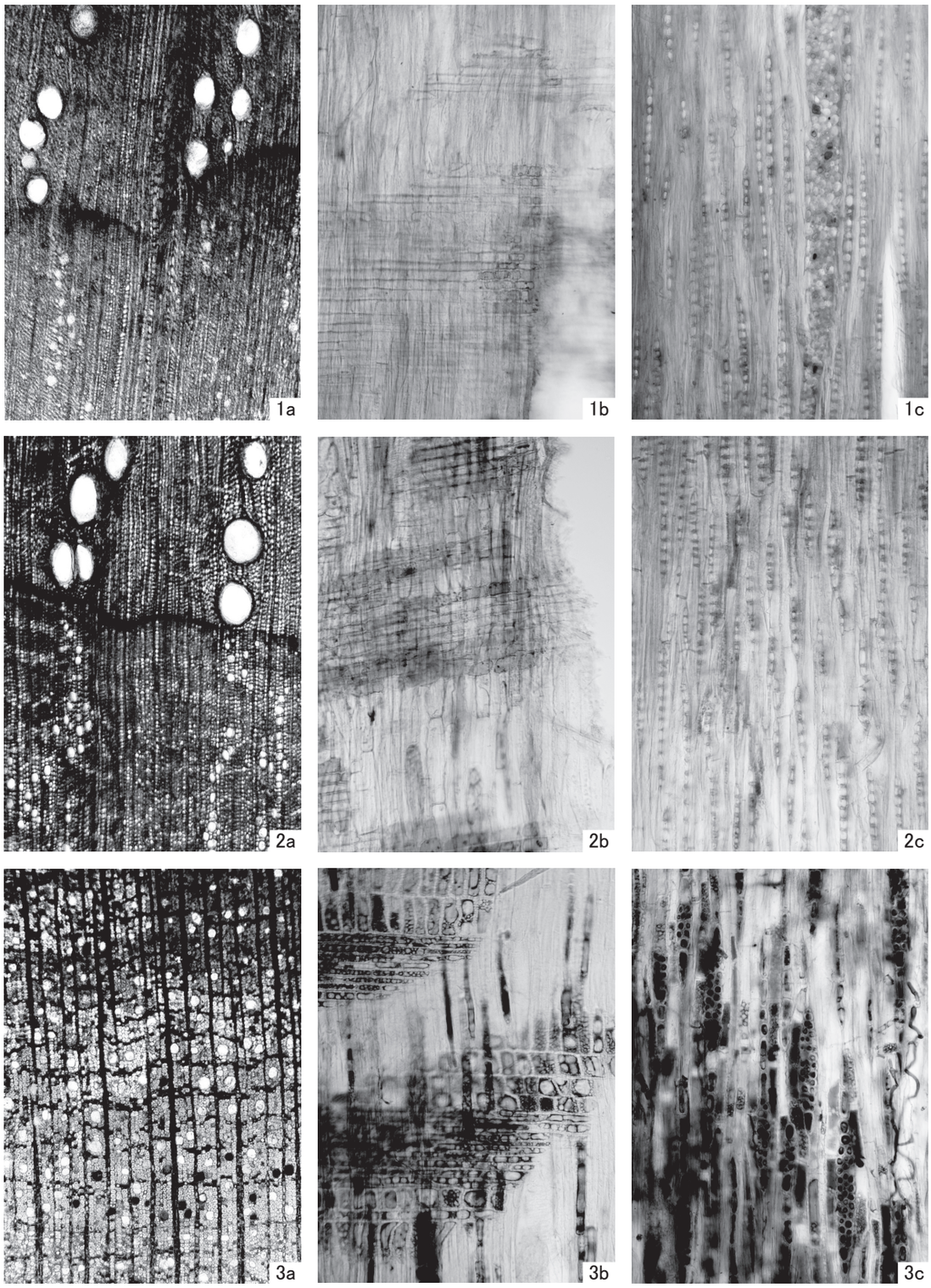
パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2004, 自然科学分析 .「太宰府市の文化財第 76 集　大宰府条坊跡 26　- 第 225 次調査 -」, 太宰府市教育委員会 ,81-91.

島地　謙・伊東　隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　61　2008/11/04　17:22:01

Pla.1



1. ツブラジイ（SB001m）
2. スダジイ（SB055b）
3. イスノキ（SB001c）
　a:木口，b:柾目，c:板目

300 μm:a
200 μm:b,c

4 大宰府条坊跡第265次本文　13-62（遺構・遺物）.indd　62　2008/11/04　17:22:02

Ⅷ. まとめ

ここでは今回の条坊跡第 265 次調査の概要を述べ、導き出された傾向と今後の問題点を整理しておきたい。

当該地は政庁から西へ 0.85km に位置する。この南の隣接地でも同時に 264 次調査が開始され、相互の進捗状況を反映しながら発掘ができた点では有効な成果が残せたのではと思う。その第 264 次調査区内において、四条路に該当する遺構が確認されたことで、条坊でどの辺りの位置を占めていたのかを具体的にし得たことは大きな成果である。これによると鏡山猛氏の推定大宰府条坊案（『大宰府都城の研究』1968 年）の右郭三条七坊に比定することができる。

当該地で検出した遺構面は 1 面であり、掘立柱建物跡を主体とする遺構群であった。総数は掘立柱建物、もしくは調査区外にも柱穴が存在するとみられ建物の可能性があるものが 12 棟である。時期的には、奈良時代前半から中頃にかけての遺物を伴うものが最も多く、最盛期もこのあたりに求めることができよう。続く後半にも建物跡は数を減じながらも存続し、平安時代になると他の建物跡と比較して、主軸をやや西偏させる SB065 のみとなる。調査区内において奈良時代前半から中頃にかけての建物跡は、南側に集中する傾向が指摘できる。そして時期が下るにつれ北側に展開していく様相が窺える。また規模も前半から中頃にかけての SB001 や SB025 のように大きなものから、やがて小振りになる傾向がある。しかし時期が異なろうと建物の配置関係については、SB065 以外は強い規制が働いているようで、各柱穴の南北及び東西の通りには、何らかの規則性がみうけられる。

さて、各建物跡はその配置や柱穴が重複するものが多く、短期の間に建て直しや柱の差し替え等が行われたことが考えられる。SB001 などは南辺の桁行が SB025 を切り構築されており、中には一つの柱穴内で柱痕が重複するものも認められた。また根石のあるもの、直に柱を立てるものと混在しているのは、やはりそうした背景の結果なのか、類例とも比較していくなかで明らかにしていかねばならないであろう。

ところで SB001 の北東隅の柱穴からは、須恵器のほぼ完全の蓋と、一部が欠損した坏が出土している。その状況から祭祀的行為が窺えるが、当遺構の廃絶時に埋められたとすると奈良時代中頃の時期が指摘できる。また SB001 にこうした行為が行われた特殊性についても、この建物における機能的な役割を示すものか、或いは往時の都市計画の中での背景に起因した所産かは興味ある点である。

いずれにしても政庁の西側にあたる地域は調査の密度が希薄と言え、遺構の広がりや条坊の及ぶ範囲など不明な点が多かった。しかし今回の成果により、少なくとも奈良時代前半には官衙としての機能を有する建物等が、整然と構築されていたのが具体的にし得たのは重要と言える。

5 大宰府条坊跡第265次本文　63-82(まとめ・表・写真).indd　63　2008/11/04　17:23:54

遺構名	計測位置	X座標	Y座標	政庁南門中点からの距離（m）		遺構の方位
				南北距離（△x）	東西距離（△ y）	
265SA010	北東端任意中点	56793.625	−45563.075	92.369	−741.458	G.N.1°　16′　34″　E
	南東端任意中点	56787.161	−45563.219	85.907	−741.667	
265SA015	北東端任意中点	56785.038	−45572.061	83.872	−750・529	
265SB001	北端任意中点	56792.802	−45568.785	91.603	−747.176	G.N.1°　29′　9″　W
	南端任意中点	56787.289	−45568.642	86.089	−747.088	
265SB005	北端任意中点	56786.432	−45563.261	85.178	−741.716	
265SB025	北端任意中点	56787.182	−45571.379	86.009	−749.826	
	南端任意中点					
265SB030	北西端任意中点	56791.946	−45562.530	90.685	−740.930	G.N.2°　22′　3″　E
	南西端任意中点	56789.092	−45562.648	87.832	−741.076	
265SB035	北端任意中点	56800.595	−45569.388	99.402	−747.701	G.N.4°　52′　44″　E
	南端任意中点	56798.006	−45569.609	96.815	−747.948	
265SB040	北端任意中点	56798.885	−45567.861	97.647	−746.191	G.N.3°　40′　17″　E
	南端任意中点	56797.655	−45567.938	96.447	−746.280	
265SB045	北端任意中点	56804.429	−45563.925	103.181	−742.200	G.N.1°　12′　8″　W
	南端任意中点	56800.331	−45563.839	99.082	−742.155	
265SB050	北東端任意中点	56805.965	−45572.679	104.804	−750.938	G.N.0°　11′　55″　E
	南東端任意中点	56801.351	−45572.695	100.191	−751.000	
265SB055	北東端任意中点	56806.370	−45572.415	105.207	−750.670	G.N.0°　7′　2″　W
	南東端任意中点	56799.542	−45572.401	98.379	−750.724	
265SB060	北端任意中点	56786.637	−45574.833	85.499	−753.285	
265SB065	北端任意中点	56803.289	−45562.254	102.024	−740.540	G.N.4°　51′　43″　E
	南端任意中点	56799.245	−45562.598	97.984	−740.925	
265SB070	北端任意中点	56799.431	−45572.728	98.271	−751.052	G.N.3°　25′　35″　W
	南端任意中点	56788.959	−45572.101	87.793	−750.530	
265SB075	北端任意中点	56798.779	−45572.658	97.619	−750.989	G.N.0°　7′　32″　W
	南端任意中点	56791.937	−45572.643	90.777	−751.042	
265SD069	北端任意中点	56805.732	−45570.160	104.546	−748.421	G.N.1°　0′　21″　W
	南端任意中点	56801.062	−45570.078	99.876	−748.386	

※数値は小数点以下第 4 位を五捨五入している。
※政庁南門中点は、X=56708.680、Y=−44820.730（国土座標第Ⅱ系）である。
※政庁南門中点からの距離は、政庁中軸線の振れ（G.N.0°　34′　24″　E）を考慮。

Tab.2　大宰府条坊跡第 265 次調査　掘立柱建物跡・柱穴列・溝の座標・方位一覧

S- 番号	遺構番号	種 別	備 考	堆積状況 （古→新）	遺構間切合 （古→新）	時 期	地区番号
1	265SB001 265SB070 265SX123 265SX124 265SX125 265SX126	掘立柱建物跡 小穴	S-1a･1b･1c･1d･1e･1f･1g･1j･1k･1l･20a･20c･20d･20e･20g。 S-1h･1p は S-70 に帰属させる。 S-1i は S-123、S-1m は S-124、S-1n は S-125、S-1o は S-126 として本表に記載。		SB025 → SB001 SB001 → SX029	奈良時代前半 奈良時代中頃に廃絶ヵ	D2 他
2	265SX002 265SA010	小穴群・柵列	3 基の内 1 基を S-10 に帰属させる	灰褐色粘質土		奈良時代中頃	C1
3	265SX003	小穴		灰褐色粘質土		奈良時代前半	B2
4	265SX004	小穴		灰褐色粘質土		不明	B3
5	265SB005	掘立柱建物跡	S-5a･5b･5d。　S-5c は欠番。	灰褐色粘質土	SX005 → SX021	奈良時代	B1
6	265SX006	小穴		褐灰色粘質土	SX042 → SX006	奈良時代前半	B1
7	265SA010	掘立柱建物跡	2 基を S-10 に帰属させる	灰褐色粘質土			E2
8	265SX008	小穴		褐灰色粘質土			B3
9	265SX009	小穴		褐灰色粘質土			D1
10	265SA010	柵列	S-2(10a)・7（2 基）・10b･10c･10d		SX076 → SA010	奈良時代前半	C1
11	265SX011	小穴		灰褐色粘質土		奈良時代末	C2
12	265SX012	小穴	2 基	灰褐色粘質土	SX119 → SX012	平安時代前期	E2
13	265SB030	小穴	S-30b に変更	灰褐色粘質土			D1
14	265SX014	小穴		灰褐色粘質土		奈良時代	B6
15	265SA015	柵列	S-15a･15b･15c		SX087 → SA015	奈良時代	B4
16	265SX016	小穴		灰褐色粘質土		奈良時代	B6
17	265SB060	掘立柱建物跡	S-60a に変更	にぶい橙色粘質土			B4
18	265SX018	小穴		褐灰色粘質土	SB025 → SX018	奈良時代	B3
19	265SB025	掘立柱建物跡	S-25i に変更	褐灰色粘質土			B3
20	265SB001	掘立柱建物跡 小穴	S-20a･20c･20d･20e･20g を S-1 に帰属させる。 S-20b は S-91、S-20f は S-81 に変更。				D4
21	265SX021	小穴		灰褐色粘質土	SX005 → SX021	奈良時代	B2
22	265SB025	掘立柱建物跡	S-25k に変更	灰褐色粘質土			B2
23	265SX023	小穴		褐灰色粘質土		不明	D1
24	265SX024	小穴		灰褐色粘質土		奈良時代中頃	D4
25	265SB025	掘立柱建物跡 小穴	S-25a･25d･25e･25f･25g･25h･25i･25j･25k S-25b は S-102、S-25c は S-83 に変更		SB025 → SB001 SB025 → SX018 SB025 → SB060 SB025 → SX077 SB025 → SX018 SX081 → SB025	奈良時代中頃	B5 他
26	265SB075	掘立柱建物跡	S-75 に帰属させる	褐灰色粘質土			D4
27	265SX027	小穴		褐灰色粘質土		奈良時代中頃	E4
28	265SX028	小穴		褐灰色粘質土	SX028 → SX083・084	平安時代前期	B5
29	265SX029	シミ状の確認範囲		褐灰色粘質土	SB001 → SX029		C6
30	265SB030	掘立柱建物跡	S-30a･30b･30c			奈良時代中頃	C1
31	265SX127	小穴	S-60c に変更。 本表では S-127 に記載。	灰褐色粘質土			B6
32	265SB060	堀立柱建物跡	S-60 に帰属させる	灰褐色粘質土			B4
33	265SX033	小穴		褐灰色粘質土→灰褐色粘質土		奈良時代前半	C1
34	265SK034	土坑		褐灰色粘質土→明褐灰色粘質土		平安時代前期	C4
35	265SB035 265SB040	掘立柱建物跡	S-35a･35b･35c･35d･35e･35f･35g･35h。 S-35i は S-40 gに変更		SB035 → SX067	奈良時代中頃	G2 G3
36	265SX036	小穴		灰褐色粘質土			B4
37	265SX037	小穴		灰褐色粘質土			E5
38	265SB070	小穴	S-1p に変更	褐灰色粘質土			D4
39	265SX039	小穴		褐灰色粘質土			C4
40	265SB040	掘立柱建物跡	S-40a･40b･40c･40d･40e･40f･40g･40h		SX046 → SB040	奈良時代後半	G2
41	265SX041	小穴		灰褐色粘質土			B3
42	265SX042	シミ状の確認範囲			SX042 → SX006		B1
43	265SX043	小穴		にぶい褐色粘質土→灰褐色粘質土		平安時代前期	E2
44	265SB040	掘立柱建物跡	S-40b に変更	褐色粘質土			F2
45	265SB045	掘立柱建物跡	S-45a･45b･45c･45d･45e･45f･45g			奈良時代中頃	G2
46	265SX046	小穴		灰褐色粘質土	SX046 → SB040	平安時代	F2
47	265SB045	掘立柱建物跡	S-45c に変更	褐灰色粘質土			G2
48	265SX048	小穴		灰褐色粘質土		奈良時代	H2
49	265SB035	掘立柱建物跡	S-35a に変更	にぶい黄橙色粘質土			G3
50	265SB050	掘立柱建物跡	S-50a･50b･50c		SB055 → SB050		I4
51	265SX051	小穴		灰褐色粘質土		古代	G3
52	265SB040	掘立柱建物跡	S-40e に変更	褐灰色粘質土			G3
53	265SB070	堀立柱建物跡	S-70 に帰属させる	褐灰色粘質土			G4
54	265SB075	堀立柱建物跡	S-75 に帰属させる	灰褐色粘質土→褐灰色粘質土→明褐色粘質土			F4
55	265SB055 265SB070	掘立柱建物跡	S-55a･55b･55c･59。 S-59 は S-70 と重複する。	灰褐色粘質土	SB055 → SB050	奈良時代後半	I4
56	265SB035	掘立柱建物跡	S-35e に変更	褐灰色粘質土			F4
57	265SB070	堀立柱建物跡	S-70 に帰属させる	灰褐色粘質土			F4
58	265SB075	堀立柱建物跡	S-75 に帰属させる	褐灰色粘質土→灰褐色粘質土			F4
59	265SB055 265SB070	堀立柱建物跡	S-55 と S-70 に帰属させる。 S-70 とは重複する。	灰褐色粘質土			G4
60	265SB060	掘立柱建物跡	S-32･60a･60b･60d S-60c は S-127 として本表に記載。		SB025 → SB060	平安時代	B4
61	265SB035	掘立柱建物跡	S-35g に変更	褐灰色粘質土			G4
62	265SX062	小穴		灰褐色粘質土		平安時代前期	H4
63	265SB065	堀立柱建物跡	S-65c に変更	褐灰色粘質土			G1
64	265SB055	堀立柱建物跡	S-55c に変更	褐灰色粘質土			H4
65	265SB065	掘立柱建物跡	S-65a･65b･65c･65d			平安時代中期	H1
66	265SK066	土坑		褐灰色粘質土→褐灰色粘土→褐灰色粘質土		奈良時代後半	G5
67	265SX067	小穴		灰褐色粘質土	SB035 → SX067	不明	G3
68	265SB060	掘立柱建物跡	S-60b に変更	褐灰色粘質土			B5
69	265SD069	溝状遺構		褐灰色粘質土		平安時代中期	H4
70	265SB070	掘立柱建物跡	S-1h･1p･53･57･59		SB075 → SB070 → SX071	奈良時代中頃	C3
71	265SX071	小穴		灰褐色粘質土	SB075 → SB070 → SX071	不明	F3
72	265SB075	堀立柱建物跡		橙色粘質土→灰褐色粘土		奈良時代	F4
73	265SX073	小穴		灰褐色粘質土		不明	H2
74	265SX074	小穴		灰褐色粘質土			H4
75	265SB075	掘立柱建物跡	S-26･54･58･72･78		SB075 → SB070 → SX071	奈良時代中頃	D4

Tab.3-1　大宰府条坊跡第 265 次調査　遺構番号台帳

S- 番号	遺構番号	種 別	備　考	堆積状況 （古→新）	遺構間切合 （古→新）	時　期	地区番号
76	265SX076	シミ状の確認範囲		褐灰色粘質土	SX076 → SA010		C1
77	265SX077	小穴		褐灰色粘質土	SB025 → SX077	平安時代前期	B5
78	265SB075	堀立柱建物跡	S-75 に帰属させる	褐灰色粘質土			D4
79	265SX079	小穴		灰褐色粘質土	SX079 → SB070		C4
80			欠番				
81	265SX081	小穴		にぶい黄橙色粘質土→褐灰色粘質土	SX081 → SB025		C6
82	265SB060	堀立柱建物跡	S-60d に変更	にぶい黄橙色粘質土			B6
83	265SX083	小穴		褐灰色粘質土	SX028 → SX083・084	平安時代前期	B5
84	265SX084	小穴		褐灰色粘質土	SX028 → SX083・084	平安時代前期	B5
85			欠番				
86	265SX086	小穴		灰褐色粘質土			B4
87	265SX087	小穴		褐灰色粘質土	SX087 → SA015	不明	B5
88	265SX088	小穴		褐灰色粘質土		不明	D4
89	265SX089	小穴		褐灰色粘質土			D5
90			欠番				
91	265SX091	小穴		褐灰色粘質土		奈良時代	D4
92	265SX092	小穴		褐灰色粘質土		奈良時代	H1
93	265SX093	小穴		褐灰色粘質土			G1
94	265SX094	小穴		にぶい褐色砂質土			F1
95			欠番				
96	265SX096	小穴		褐灰色粘質土		奈良時代中頃	F1
97	265SX097	小穴		褐灰色粘質土→灰褐色粘質土		平安時代前期	F2
98	265SX098	小穴		灰褐色粘質土		奈良時代	B4
99	265SX099	小穴		灰褐色粘質土		奈良時代	D5
100			欠番				
101	265SX101	小穴		褐灰色粘質土		奈良時代	H4
102	265SX102	小穴		にぶい褐灰色粘質土→褐灰色粘質土→灰褐色粘質土		奈良時代	B5
103	265SX103	小穴		褐灰色粘質土			H4
104	265SX104	小穴		褐灰色粘質土			B1
105			欠番				
106	265SB065	掘立柱建物跡	S-65d に変更	褐灰色粘質土			G1
107	265SX107	小穴		にぶい褐色粘質土		古代	H1
108	265SX108	小穴		褐灰色粘質土			H1
109	265SX109	小穴		褐灰色粘質土			H1
110			欠番				
111	265SX111	小穴		褐灰色粘質土			H1
112	265SX112	小穴		にぶい褐色粘質土		不明	G2
113	265SX113	小穴		褐灰色粘質土			G4
114	265SX114	小穴		褐灰色粘質土			G4
115			欠番				
116	265SX116	小穴		褐灰色粘質土			G4
117	265SX117	小穴		褐灰色粘質土			I2
118	265SX118	小穴		褐灰色粘質土			G2
119	265SX119	小穴		褐灰色粘質土	SX119 → SX012		E2
120			欠番				
121	265SX121	小穴		褐灰色粘質土			E1
122	265SX122	小穴		褐灰色粘質土			E1
123	265SX123	小穴	S-1i から変更	灰褐色砂質土			D3
124	265SX124	小穴	S-1m から変更	にぶい褐色粘質土→灰褐色粘質土（柱痕）		奈良時代	C2
125	265SX125	小穴	S-1n から変更	灰褐色粘質土		奈良時代前半	C3
126	265SX126	小穴	S-1o から変更	にぶい褐色粘質土		奈良時代	D2
127	265SX127	小穴	S-60c から変更	灰褐色粘質土			B4

Tab.3-2　大宰府条坊跡第 265 次調査　遺構番号台帳

S- 番号	遺構番号	種別	備　考	堆積状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期
1a	265SB001	掘立柱建物跡	根石あり。須恵器の坏と蓋が出土しており、祭祀的意図が考えられる。2 時期の柱痕跡あり。	褐灰色粘質土→灰褐色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）→浅黄橙色粘質土→（柱痕）褐灰色粘質土		奈良時代中頃（Ⅲ -2 期）
1b	265SB001	掘立柱建物跡	2 時期の柱痕跡あり。	灰褐色砂質土→褐灰色粘質土（柱痕）→灰褐色粘質土→浅黄橙色粘質土（柱痕）		奈良時代
1c	265SB001	掘立柱建物跡	柱材残存。	灰褐色粘質土→暗褐灰色粘質土（柱痕）→褐灰色粘質土（柱痕）		奈良時代
1d	265SB001	掘立柱建物跡	柱材残存。	褐灰色粘質土→灰褐色粘質土（柱痕）	S-25h → S-1d	奈良時代中頃
1e	265SB001	掘立柱建物跡	根石あり。	褐灰色粘質土→浅黄橙色粘質土→灰褐色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）	S-25h → S-1e	奈良時代中頃
1f	265SB001	掘立柱建物跡	根石あり。	浅黄橙色粘質土→褐灰色粘質土→灰褐色粘質土（柱痕）	S-25i → S-1f	奈良時代
1g	265SB001	掘立柱建物跡	塼を転用した根石あり。底面変色あり。	浅黄橙色粘質土→褐灰色粘質土→灰褐色粘質土（柱痕）	S-25g → S-1g	奈良時代
1j	265SB001	掘立柱建物跡	柱材残存。	灰褐色砂質土→褐灰色粘質土（柱痕）		不明
1k	265SB001	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→灰褐色粘質土		不明
1l	265SB001	掘立柱建物跡	2 時期の柱痕跡あり。	灰褐色砂質土→灰褐色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）→浅黄橙色粘質土（柱痕）		奈良時代前半
20a	265SB001	掘立柱建物跡	底面変色あり。	褐灰色砂質土→褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）→にぶい橙色粘質土（柱痕）		奈良時代
20c	265SB001	掘立柱建物跡	根石あり。	褐灰色粘質土→灰褐色粘質土	S-25j → S-20c	奈良時代
20d	265SB001	掘立柱建物跡	根石あり。	にぶい褐色粘質土→褐色粘質土→褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）	S-25a → S-20d・60a	奈良時代中頃
20e	265SB001	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）		奈良時代
20g	265SB001	掘立柱建物跡	根石・根固あり。	褐灰色砂質土→褐灰色粘質土		奈良時代中頃
5a	265SB005	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		奈良時代
5b	265SB005	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）		奈良時代
5d	265SB005	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）		奈良時代
7	265SA010	柱穴列	2 基あり。	灰褐色粘質土		奈良時代
10b	265SA010	柱穴列		灰褐色粘質土		不明
10c	265SA010	柱穴列		灰褐色粘質土		奈良時代
10d	265SA010	柱穴列		褐色砂質土→灰褐色粘質土		奈良時代前半
25a	265SB025	掘立柱建物跡		灰褐色砂質土→褐灰色粘質土	S-25a → S-20d・60a	奈良時代
25d	265SB025	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		奈良時代
25e	265SB025	掘立柱建物跡		にぶい褐色粘質土→褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）	S-25e → S-60c・60d	奈良時代後半
25f	265SB025	掘立柱建物跡	底面変色あり。	褐灰色砂質土→灰褐色粘質土	S-25f → S-60b	奈良時代前半
25g	265SB025	掘立柱建物跡	底面変色あり。	褐灰色粘質土		不明
25h	265SB025	掘立柱建物跡		灰褐色粘質土	S-25 h→ S-1d・1e	奈良時代
25i	265SB025	掘立柱建物跡	底面変色あり。	褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）	S-25i → S-1f	奈良時代中頃
25j	265SB025	掘立柱建物跡	底面変色あり。	にぶい黄橙色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）	S-25j → S-20c	不明
25k	265SB025	掘立柱建物跡	底面変色あり。	灰褐色砂質土→褐灰色粘質土		奈良時代中頃
30a	265SB030	掘立柱建物跡		灰褐色粘質土		
30b	265SB030	掘立柱建物跡		赤褐色砂質土→灰褐色粘質土		奈良時代
30c	265SB030	掘立柱建物跡		黄褐色粘質土→褐色粘質土→灰褐色粘質土		奈良時代中頃
35a	265SB035	掘立柱建物跡		にぶい黄橙粘質土→褐灰色粘質土		奈良時代中頃
35b	265SB035	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→にぶい黄橙色粘質土→褐灰色粘質土→灰褐色粘質土（柱痕）		不明
35c	265SB035	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		奈良時代
35d	265SB035	掘立柱建物跡		明褐灰色粘質土→にぶい黄橙粘質土（柱痕）→褐灰色粘質土		不明
35e	265SB035	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）		奈良時代前半
35f	265SB035	掘立柱建物跡		灰褐色粘質土→褐灰色粘質土		不明
35g	265SB035	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		奈良時代前半
35h	265SB035	掘立柱建物跡		にぶい黄橙粘質土→褐灰色粘質土		
40a	265SB040	掘立柱建物跡		にぶい褐灰色粘質土→黒褐灰色粘質土（柱痕）		
40b	265SB040	掘立柱建物跡		褐色粘質土→にぶい褐灰色粘質土（柱痕）		奈良時代
40c	265SB040	掘立柱建物跡		灰黄褐色粘質土→灰褐色粘質土		不明
40d	265SB040	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		不明
40e	265SB040	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）		奈良時代後半
40f	265SB040	掘立柱建物跡		褐色粘質土→灰褐色粘質土		
40g	265SB040	掘立柱建物跡		にぶい褐色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）		不明
40h	265SB040	掘立柱建物跡		にぶい褐色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）		不明
45a	265SB045	掘立柱建物跡		にぶい褐色粘質土→褐灰色粘質土		奈良時代
45b	265SB045	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		
45c	265SB045	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→にぶい黄橙色粘質土（柱痕）		奈良時代前半
45d	265SB045	掘立柱建物跡		にぶい褐色粘質土		
45e	265SB045	掘立柱建物跡		にぶい褐色粘質土・褐灰色砂質土→褐灰色粘質土→にぶい橙色粘質土→灰褐色粘質土		奈良時代前半
45f	265SB045	掘立柱建物跡		にぶい褐色粘質土→褐灰色粘質土		奈良時代中頃
45g	265SB045	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		不明
50a	265SB050	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土	S-55a → S-50a	不明
50b	265SB050	掘立柱建物跡		灰褐色粘質土→灰褐色粘土（柱痕）	S-55b → S-50b	不明
50c	265SB050	掘立柱建物跡		にぶい黄橙色粘土→灰褐色粘土	S-55c → S-50c	不明
55a	265SB055	掘立柱建物跡	柱材残存。底面変色あり。	褐灰色粘質土（柱痕）→褐灰色粘土		不明
55b	265SB055	掘立柱建物跡	柱材残存。底面変色あり。	灰褐色粘質土→灰褐色粘土（柱痕）		不明
55c	265SB055	掘立柱建物跡	柱材残存。底面変色あり。	にぶい黄橙色粘土→灰褐色粘土		奈良時代後半
59	265SB055	掘立柱建物跡	SB070 と重複。新旧関係は不明。	灰褐色粘質土		奈良時代
32	265SB060	掘立柱建物跡		灰褐色粘質土		平安時代
60a	265SB060	掘立柱建物跡		にぶい黄橙色粘質土→にぶい橙色粘質土→灰褐色粘質土		奈良時代後半
60b	265SB060	掘立柱建物跡		灰褐色粘質土→褐灰色粘質土（柱痕）		奈良時代後半
60d	265SB060	掘立柱建物跡	根固あり。	にぶい黄橙色粘質土	S-25e → S-60d	奈良時代
65a	265SB065	掘立柱建物跡		褐灰粘質土→灰褐色粘質土		奈良時代
65b	265SB065	掘立柱建物跡		にぶい褐灰色粘質土→灰褐色粘質土		平安時代中期
65c	265SB065	掘立柱建物跡		黄橙色粘質土→褐灰色粘質土→灰褐色粘質土		
65d	265SB065	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		奈良時代
1h	265SB070	掘立柱建物跡		灰褐色砂質土→褐灰色粘質土		奈良時代
1p	265SB070	掘立柱建物跡	根石あり。	灰褐色砂質土→褐灰色粘質土		奈良時代中頃
53	265SB070	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		奈良時代
57	265SB070	掘立柱建物跡		橙色粘質土→灰褐色粘土		奈良時代
59	265SB070	掘立柱建物跡	SB055 と重複。新旧関係は不明。	灰褐色粘質土		
26	265SB075	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土→灰褐色粘質土		奈良時代中頃
54	265SB075	掘立柱建物跡		明褐色粘質土→灰褐色粘質土→明褐色砂質土→褐色粘質土		奈良時代
58	265SB075	掘立柱建物跡		褐色粘質土→灰褐色粘土		奈良時代
72	265SB075	掘立柱建物跡		灰褐色粘質土		
78	265SB075	掘立柱建物跡		褐灰色粘質土		

Tab.4　大宰府条坊跡第 265 次調査　掘立柱建物跡・柱穴列個別遺構番号台帳

S-1a 柱痕浅黄橙色粘質土

須恵器	坏c 壺 供膳具
土師器	甕（角閃石）

S-1a 掘方褐灰色粘質土

須恵器	蓋c3 蓋3 坏×皿
土師器	甕（角閃石・在地）

S-1b 柱痕浅黄橙色粘質土

須恵器	蓋3 坏×皿

S-1b 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3 坏×皿
土師器	破片

S-1b 掘方灰褐色粘質土

須恵器	甕 蓋3 供膳具 坏×皿
土師器	供膳具 破片
瓦	塼

S-1c 柱痕暗褐灰色粘質土

瓦	丸瓦
木製品	柱材

S-1c 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3 壺 蓋3×高坏 坏×皿
土師器	供膳具 破片

S-1c 掘方灰褐色粘質土

須恵器	蓋c 蓋3 甕 坏×皿
土師器	供膳具 甕（角閃石・在地） 坏×皿 坏c×皿c 煮沸具
瓦	破片

S-1d 柱痕灰褐色粘質土

土師器	供膳具

S-1d 掘方褐灰色粘質土

須恵器	坏c 蓋 坏×皿
土師器	供膳具 破片

S-1e 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3 皿 小壺 破片
土師器	甕（在地） 煮沸具
瓦	丸瓦（縄目）
土製品	カマド

S-1e 掘方褐灰色粘質土

須恵器	坏×皿
土師器	供膳具

S-1e 掘方灰褐色粘質土

須恵器	蓋3 甕 皿 坏×皿 坏c×皿c
土師器	把手 煮沸具 破片
瓦	平瓦

S-1e 掘方浅黄橙色粘質土

須恵器	破片
土師器	破片

S-1f 掘方灰褐色粘質土

瓦	平瓦（縄目）

S-1f 掘方褐灰色粘質土

須恵器	甕 蓋3 高坏
土師器	甕（角閃石・在地） 供膳具 煮沸具
瓦	平瓦（縄目）
金属製品	鉄滓

S-1g 掘方褐灰色粘質土

須恵器	高坏 蓋3 壺 壺蓋
土師器	蓋3 煮沸具 破片
瓦	塼 破片

S-1h 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	供膳具

S-1h 掘方灰褐色粘質土

須恵器	蓋3 甕 坏×皿
土師器	甕 供膳具 煮沸具

S-1j 柱痕褐灰色粘質土

土師器	供膳具
木製品	柱材

S-1j 掘方灰褐色粘質土

須恵器	坏×皿
土師器	坏c 供膳具 煮沸具（角閃石・在地）

S-1k 掘方灰褐色粘質土

土師器	煮沸具

S-1l 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3

S-1l 掘方褐灰色粘質土

須恵器	小壺 供膳具
土師器	供膳具
瓦	丸瓦

S-1m 柱痕灰褐色粘質土

須恵器	蓋3
土師器	供膳具

S-1n 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	坏c 甕
土師器	甕 供膳具
瓦	塼

S-1n 灰褐色粘質土

須恵器	坏c
土師器	煮沸具（角閃石・在地） 供膳具

S-1o にぶい褐色粘質土

須恵器	高坏 小蓋c3 蓋1 坏a
土師器	坏c 甕（在地）
製塩土器	焼塩壺
瓦	平瓦（縄目）

S-1p 褐灰色粘質土

須恵器	壺蓋 蓋3
土師器	煮沸具 供膳具
金属製品	鉄滓

S-2 灰褐色粘質土

須恵器	蓋3 坏 壺 坏c×皿c
土師器	煮沸具

S-3 灰褐色粘質土

須恵器	坏c

S- 4灰褐色粘質土

土師器	供膳具 煮沸具

S- 5a 掘方褐灰色粘質土

須恵器	蓋3 坏×皿 供膳具
土師器	煮沸具 供膳具
瓦	塼 破片（縄目）

S- 5b 掘方褐灰色粘質土

須恵器	坏c 蓋3 皿 皿a 甕
土師器	煮沸具 供膳具
瓦	破片（縄目） 破片

S- 5d 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3 甕
土師器	坏

S- 5d 掘方褐灰色粘質土

須恵器	供膳具
土師器	供膳具

S- 6柱痕褐灰色粘質土

須恵器	甕
土師器	煮沸具 供膳具
瓦	破片

S- 6掘方灰褐色粘質土

須恵器	蓋c（墨痕あり） 蓋3 高坏 甕 壺蓋
土師器	煮沸具

S- 7灰褐色粘質土

須恵器	供膳具
土師器	破片

S- 8灰褐色粘質土

須恵器	蓋3

S- 9灰褐色粘質土

須恵器	破片

S-10b 灰褐色粘質土

須恵器	破片
土師器	破片

S-10c 灰褐色粘質土

須恵器	蓋3

S-10d 灰褐色粘質土

須恵器	坏c

Tab.5-1　大宰府条坊跡第 265 次調査　出土遺物一覧表

S-11 灰褐色粘質土

須恵器	蓋3　甕
土師器	供膳具
瓦	破片

S-12 灰褐色粘質土

須恵器	破片
土師器	坏 a

S-14 灰褐色粘質土

須恵器	蓋3　甕
土師器	破片

S-15a 灰褐色粘質土

須恵器	供膳具
土師器	煮沸具

S-15b 柱痕灰褐色粘質土

須恵器	甕　供膳具
土師器	煮沸具

S-16 灰褐色粘質土

須恵器	坏×皿

S-18 褐灰色粘質土

須恵器	皿
土師器	供膳具　煮沸具
製塩土器	焼塩壺

S-20a 柱痕褐灰色粘質土

土師器	供膳具
瓦	瓦
木製品	柱材

S-20a 掘方褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　供膳具
土師器	供膳具　破片

S-20c 褐灰色粘質土

須恵器	破片

S-20c 灰褐色粘質土

須恵器	蓋3
土師器	煮沸具（在地）　甕
瓦	破片
土製品	羽口

S-20d 柱痕褐灰色粘質土

土師器	供膳具

S-20d 掘方褐灰色粘質土

須恵器	甕　高坏　蓋3　坏c×皿c　蓋3×高坏　円面硯
土師器	供膳具　煮沸具
石製品	平玉石

S-20e 柱痕褐灰色粘質土

土師器	破片

S-20e 掘方褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　蓋×皿　坏×皿
土師器	供膳具　煮沸具　坏c×皿c　破片

S-20g 褐灰色粘質土

須恵器	蓋c3（墨書あり）

S-21 灰褐色粘質土

須恵器	坏×皿

S-23 褐灰色粘質土

須恵器	甕

S-24 灰褐色粘質土

須恵器	蓋3　蓋c
土師器	破片

S-25a 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　坏×皿
土師器	供膳具　煮沸具
瓦	破片

S-25a 掘方灰褐色粘質土

須恵器	蓋3　甕
土師器	煮沸具
瓦	丸瓦
石製品	剥片（サヌカイト）
金属製品	鉄滓

S-25d 褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　坏×皿　供膳具　鉢
土師器	甕　坏×皿　供膳具　煮沸具

S-25e 柱痕褐灰色粘質土

土師器	供膳具　煮沸具

S-25e 掘方褐灰色粘質土

須恵器	坏　蓋3　蓋c3　小蓋c3　坏×皿
土師器	煮沸具　供膳具
瓦	破片（縄目）
金属製品	鉄滓

S-25e 掘方にぶい褐色粘質土

須恵器	蓋3　坏×皿
土師器	蓋3　坏c×皿c　煮沸具
製塩土器	焼塩壺

S-25f 掘方褐灰色粘質土

須恵器	壺蓋　皿　蓋3　坏 c　甕　坏×皿
土師器	煮沸具　供膳具
瓦	破片

S-25g 柱痕灰褐色粘質土

須恵器	供膳具
土師器	供膳具　破片

S-25h 灰褐色粘質土

須恵器	坏×皿　供膳具
土師器	煮沸具　蓋3　破片
瓦	破片

S-25i 褐灰色粘質土

須恵器	供膳具　蓋b　蓋c
土師器	供膳具　煮沸具
製塩土器	焼塩壺
瓦	平瓦

S-25i 褐灰色粘質土（上層）

須恵器	坏　蓋3　甕
土師器	坏c　煮沸具
瓦	丸瓦（縄目）　平瓦（縄目）

S-25i 褐灰色粘質土（下層）

須恵器	蓋3　甕　坏c×皿c
土師器	蓋3
瓦	丸瓦（縄目）

S-25j 掘方にぶい黄橙色粘質土

土師器	供膳具

S-25k 掘方　灰褐色粘質土

須恵器	蓋3　坏　高坏　鉢 a　供膳具
土師器	煮沸具　供膳具　甕　皿 a

S-26

須恵器	蓋c　坏c×皿c
土師器	甕

S-27 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3
土師器	供膳具　煮沸具　把手

S-27 掘方褐灰色粘質土

須恵器	坏c
土師器	破片
瓦	破片

S-28 灰褐色粘質土

須恵器	坏　蓋3　甕　高坏
土師器	甕　高坏　坏 a
瓦	平瓦（縄目）　破片

S-30b 灰褐色粘質土

土師器	供膳具

S-30c 灰褐色粘質土

須恵器	蓋c3
瓦	破片（縄目）

S-32 灰褐色粘質土

須恵器	蓋　破片
土師器	供膳具　坏c

S-33 灰褐色粘質土

須恵器	坏c　蓋3
土師器	供膳具　煮沸具
製塩土器	焼塩壺

Tab.5-2　大宰府条坊跡第 265 次調査　出土遺物一覧表

S-34 明褐色粘質土

須恵器	小蓋3　蓋3　坏c　壺（肥後産）
土師器	供膳具　煮沸具　椀c
瓦	破片（縄目・格子）
ガラス製品	臼玉
金属製品	鉄滓

S-34 褐灰色粘質土

須恵器	蓋1　蓋3　蓋c　坏c　坏×皿
土師器	坏　坏 a　坏c　蓋3　椀
瓦	破片（縄目・格子）

S-35a 掘方にぶい黄橙色粘質土

須恵器	壺　甕　坏c
土師器	蓋3　蓋c　供膳具　煮沸具　坏×皿　破片
瓦	破片

S-35b 柱痕灰褐色粘質土

須恵器	破片

S-35b 掘方褐灰色粘質土

土師器	供膳具
石製品	平玉石

S-35c 褐灰色粘質土

須恵器	蓋3
土師器	皿　煮沸具
瓦	破片
金属製品	鉄滓

S-35d 柱痕褐灰色粘質土

土師器	破片

S-35e 掘方褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　供膳具
土師器	蓋c　甕　破片
瓦	平瓦（縄目）
金属製品	鉄滓

S-35f 柱痕褐灰色粘質土

土師器	供膳具

S-35f 掘方灰褐色粘質土

須恵器	甕
土師器	供膳具　壺（古式土師）

S-35g 褐灰色粘質土

須恵器	坏c　蓋3
土師器	壺　蓋3　供膳具（漆付着）　煮沸具　把手
瓦	破片（縄目）破片
金属製品	鉄滓

S-35h 褐灰色粘質土

黒色土器 A	高坏

S-40b 掘方　褐色粘質土

土師器	坏×皿　煮沸具

S-40c 灰褐色粘質土

須恵器	蓋

S-40d 褐灰色粘質土

土師器	破片
瓦	塼

S-40e 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　甕　坏c×皿c
土師器	甕　煮沸具
瓦	平瓦（縄目）

S-40e 掘方褐灰色粘質土

須恵器	蓋c3　甕　破片
土師器	煮沸具　破片

S-40g 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	供膳具　壺
土師器	破片

S-43 掘方にぶい褐色砂質土

須恵器	蓋　蓋3　甕　供膳具
土師器	坏 a　坏c　皿　把手
瓦	破片

S-43 柱痕灰褐色粘質土

須恵器	甕
土師器	蓋c　坏
瓦	平瓦

S-45a 柱痕褐灰色粘質土

土師器	破片

S-45a 掘方にぶい褐色粘質土

土師器	坏c　破片

S-45c 掘方褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　坏c
土師器	供膳具　坏c
瓦	丸瓦　破片（縄目）

S-45e 掘方褐灰色粘質土

須恵器	壺
土師器	煮沸具
瓦	平瓦（縄目）

S-45f 掘方にぶい褐色粘質土

須恵器	坏b　破片
土師器	煮沸具

S-45g 褐灰色粘質土

土師器	供膳具　煮沸具
製塩土器	破片

S-46 灰褐色粘質土

土師器	供膳具　破片

S-48 褐灰色粘質土

須恵器	甕
土師器	供膳具
瓦	丸瓦

S-51 灰褐色粘質土

須恵器	供膳具
土師器	供膳具　煮沸具
金属製品	鉄滓

S-53 褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　甕　破片
土師器	供膳具　煮沸具
瓦	破片（縄目）
土製品	羽口

S-54 褐灰色粘質土

土師器	破片

S-54 灰褐色粘質土

須恵器	高坏　甕　蓋3　壺
土師器	甕　供膳具
瓦	破片（縄目）
土製品	羽口

S-54 明褐色粘質土

須恵器	甕
石製品	平玉石

S-55a 柱痕褐灰色粘土

木製品	柱材

S-55b 柱痕灰褐色粘土

木製品	柱材

S-55c 柱痕灰褐色粘質土

須恵器	蓋3　蓋c　壺　坏 a　坏c　甕
土師器	甕　坏 a　供膳具
瓦	平瓦（縄目）

S-55c 柱痕にぶい黄橙色粘土

木製品	柱材

S-55c 掘方にぶい黄橙色粘土

須恵器	甕　供膳具
土師器	甕　供膳具　破片
瓦	平瓦（縄目）破片

S-57 灰褐色粘質土

須恵器	壺　壺蓋　坏×皿
土師器	甕　坏c×皿c　煮沸具　破片
製塩土器	焼塩壺

S-58 黒褐色粘質土

須恵器	供膳具
土師器	破片

S-58 柱痕褐灰色粘土

須恵器	蓋3
土師器	煮沸具

S-58 掘方褐灰色粘質土

須恵器	供膳具
土師器	煮沸具　供膳具　高坏

Tab.5-3　大宰府条坊跡第 265 次調査　出土遺物一覧表

S-59 灰褐色粘質土

須恵器	甕　供膳具
土師器	供膳具　坏d
瓦	破片（縄目）破片

S-60a 柱痕灰褐色粘質土

須恵器	坏 a　坏c　破片
土師器	供膳具　煮沸具　破片

S-60a 掘方にぶい橙色粘質土

須恵器	坏　蓋3
土師器	供膳具　高坏　破片
瓦	破片

S-60b 柱痕褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　坏　坏×皿
土師器	煮沸具　供膳具　坏 a

S-60b 掘方灰褐色粘質土

須恵器	甕　壺　坏c
土師器	坏c　皿　供膳具　煮沸具
瓦	破片
石製品	平玉石

S-60d にぶい黄橙色粘質土

須恵器	蓋3　蓋c
土師器	煮沸具　供膳具
瓦	破片　平瓦（縄目）

S-62 灰褐色粘質土

須恵器	甕　皿　破片
土師器	坏c　煮沸具
瓦	破片（縄目）平瓦（縄目・格子）破片
白磁	1-1（1 点）

S-65a 掘方褐灰色粘質土

土師器	坏c×皿c
瓦	平瓦（縄目）

S-65b 柱痕灰褐色粘質土

土師器	坏 lc2

S-65c 柱痕灰褐色粘質土

土師器	破片（角閃石）

S-65d 褐灰色粘質土

須恵器	甕

S-66 褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　蓋（墨痕あり）壺
土師器	甕　椀c　供膳具
瓦	平瓦（縄目）丸瓦（縄目）
金属製品	鉄滓

S-67 灰褐色粘質土

土師器	破片

S-69 褐灰色粘質土

須恵器	蓋3　甕　壺　坏×皿
土師器	煮沸具　椀 lc2
瓦	破片（縄目）
木製品	炭化物
金属製品	鉄滓
土製品	羽口

S-71 灰褐色粘質土

須恵器	供膳具　坏×皿
土師器	甕
瓦	平瓦（縄目）

S-72 灰褐色粘質土

須恵器	蓋3　甕
土師器	破片

S-77 褐灰色粘質土

須恵器	坏×皿
土師器	坏c　坏c×皿c

S-83 褐灰色粘質土

須恵器	坏　甕
土師器	坏 a　坏c×皿c

S-84 褐灰色粘質土

須恵器	破片
土師器	供膳具　煮沸具

S-87 褐灰色粘質土

土師器	破片

S-88 褐灰色粘質土

土師器	供膳具

S-91 褐灰色粘質土

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-92 褐灰色粘質土

土師器	供膳具
瓦	平瓦（縄目）

S-96 掘方褐灰色粘質土

須恵器	坏c

S-97 掘方褐灰色粘質土

土師器	坏 a　煮沸具
瓦	丸瓦（格子）

S-98 灰褐色粘質土

須恵器	坏c　蓋3　甕
土師器	煮沸具　供膳具
瓦	破片（縄目）

S-99 灰褐色粘質土

須恵器	蓋3
土師器	破片

S-101 褐灰色粘質土

須恵器	坏
土師器	坏 a
瓦	破片（縄目）

S-102 灰褐色粘質土

須恵器	甕　蓋c　坏×皿　供膳具
土師器	煮沸具　供膳具
製塩土器	焼塩壺

S-107 にぶい褐色粘質土

瓦	破片

S-112 にぶい褐色粘質土

土師器	破片

表土

須恵器	甕　甕 b　坏 a　坏c　高坏　蓋3　蓋c　皿　壺　小壺　鉢b　把手
土師器	椀c　大椀c　坏c　甕　高坏　坏 a　破片
長沙窯系青磁	壺（1 点）
龍泉窯系青磁	皿 1-1
瓦	平瓦（縄目・格子）丸瓦（格子）
石製品	平玉石
緑釉陶器	皿（東海系）
国産磁器	染付
金属製品	鉄滓　釘
土製品	羽口

表採

土製品	人形

カクラン

須恵器	蓋c

Tab.5-4　大宰府条坊跡第 265 次調査　出土遺物一覧表

A: 内底ナデ　B: 板状圧痕　なお計測値の（ ）は復元値

S-1a 柱痕浅黄橙色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c	R-001	(17.4)	5.3	10.8	○		1/3	Fig.19-3
土師器	甕	R-002	−	7.7+ α	−			片	Fig.19-4

S-1a 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.4+ α	−			片	Fig.19-5
土師器	坏	R-002	−	3.65+ α	−			片	Fig.19-6

S-1a 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 c3	R-001	15.8	2.1	−	○		完形	Fig.19-7
土師器	不明	R-002						片	
土師器	不明	R-003						片	

S-1b 柱痕浅黄橙色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.3+ α	−	−		片	Fig.20-8

S-1b 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	(17.8)	1.8+ α	−			片	Fig.20-9

S-1b 掘方灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	(14.4)	1.75+ α	−	−		1/7	Fig.20-10

S-1b 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏	R-001	−	2.7+ α	−			片	Fig.20-11
須恵器	坏	R-002	−	1.9+ α	−			片	Fig.20-12

S-1c 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.2+ α	−			片	Fig.21-13
須恵器	坏×皿	R-002	−	2.55+ α	−			片	Fig.21-15
須恵器	蓋 3	R-003	−	1.15+ α	−	○		片	Fig.21-14

S-1c 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 c	R-001	−	1.15+ α	−	−		片	Fig.21-16
土師器	坏×皿 c	R-002	−	1.2+ α	−	−		片	Fig.21-22
須恵器	蓋 3	R-003	−	0.8+ α	−			片	Fig.21-17
土師器	坏	R-004	−	3.4+ α	−	−		片	Fig.21-21
須恵器	蓋 3	R-005	(13.0)	1.85+ α	−	−		1/8	Fig.21-18
須恵器	蓋 3	R-006	−	0.7+ α	−			片	Fig.21-19
須恵器	蓋 3	R-007	−	1.1+ α	−			片	Fig.21-20

S-1d 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c　ヘラ	R-001	14.2	4.2−4.3	9.65	○		1/2	Fig.22-23
須恵器	坏×皿	R-002	−	2.0+ α	−			片	Fig.22-24
須恵器	皿	R-003	−	2.1+ α	−			片	Fig.22-25

S-1e 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	小壺	R-001	(8.6)	6.6	5.45	○		1/2	Fig.23-30
須恵器	蓋 3	R-002	−	0.8+ α	−			片	Fig.23-26
須恵器	蓋 3	R-003	−	0.8+ α	−			片	Fig.23-27
須恵器	蓋 3	R-004	−	1.9+ α	−	−		片	Fig.23-28
須恵器	皿 a	R-005	(18.6)	1.8	(14.9)			片	Fig.23-29

S-1e 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏×皿	R-001	−	2.8+ α	−			片	Fig.23-32
須恵器	坏	R-002	−	2.9+ α	−			片	Fig.23-31

S-1e 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	(15.8)	1.85+ α	−	−		1/6	Fig.23-33
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.3+ α	−	−		片	Fig.23-34
須恵器	坏 c	R-003	−	1.4+ α	−	○		片	Fig.23-35
須恵器	坏×皿	R-004	−	2.2+ α	−			片	Fig.23-36
須恵器	坏×皿	R-005	−	3.5+ α	−			片	Fig.23-37
土師器	把手	R-006	−	6.0+ α	−			完形	Fig.23-39
須恵器	坏×皿	R-007	−	1.5+ α	−			片	Fig.23-38
土師器	皿	R-008						片	

S-1f 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.7+ α	−			片	Fig.24-40
須恵器	高坏	R-002	−	1.55+ α	−			片	Fig.24-41
須恵器	甕	R-003	−	2.25+ α	−			片	Fig.24-42
土師器	不明	R-004						片	
金属製品	鉄滓	R-005							

S-1f 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
瓦	平瓦	R-001						1/4	
瓦	平瓦	R-002						1/2	

S-1g 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	壺蓋	R-001	(14.7)	2.15+ α	−	○		1/4	Fig.25-44
土師器	蓋 3×高坏脚	R-002	−	0.9+ α	−			片	Fig.25-46
須恵器	高坏	R-003	(15.6)	1.6+ α	−			1/7	Fig.25-45
須恵器	蓋 3	R-004	−	1.1+ α	−			片	Fig.25-43
瓦	塼	R-005	縦 29.6	横 19.05	厚さ 7.0 ～ 7.6			完形	Fig.25-47

S-1h 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c	R-001	−	2.5+ α	−			片	Fig.61-166
須恵器	坏	R-002	−	5.5+ α	−			片	Fig.61-165

S-1h 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.95+ α	−			片	Fig.61-167
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.35+ α	−			片	Fig.61-168
須恵器	坏	R-003	−	3.0+ α	−			片	Fig.61-170
須恵器	蓋 3	R-004	−	1.6+ α	−			片	Fig.61-169

S-1j 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏×皿	R-001	−	3.2+ α	−			片	Fig.31-66
土師器	不明	R-002						片	

S-1l 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.55+ α	−	−		片	Fig.32-67

S-1l 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	小壺	R-001	(10.7)	3.0	(8.7)	○		1/5	Fig.32-68

S-1m 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.45+ α	−			片	Fig.90-228

S-1n 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c	R-001	−	3.75	−			片	Fig.91-229
土師器	不明	R-002						片	
土師器	不明	R-003						片	

S-1o にぶい褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	高坏×大蓋 3	R-001	(26.2)	1.5+ α	−	○		1/4	Fig.92-236
須恵器	蓋 3	R-002	(16.9)	1.7+ α	−	○		片	Fig.92-230
須恵器	蓋 3	R-003	(14.9)	1.35+ α	−			片	Fig.92-231
須恵器	蓋 3	R-004	−	1.25+ α	−			片	Fig.92-232
須恵器	蓋 3	R-005	−	1.2+ α	−			片	Fig.92-233
須恵器	蓋 3	R-006	−	1.3+ α	−			片	Fig.92-234
須恵器	小蓋 c3	R-007	10.9	1.8	−	○		ほぼ完形	Fig.92-235
土師器	坏 c	R-008	(20.0)	4.6	−	−		1/4	Fig.92-237

S-1p 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	蓋 c	R-001	−	0.95+ α	−			片	Fig.60-164
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.15+ α	−			片	Fig.60-159
須恵器	坏 c	R-003	−	0.95+ α	−	−		片	Fig.60-162
須恵器	坏 c	R-004	−	1.7+ α	−	−		片	Fig.60-163
須恵器	壺蓋	R-005	−	2.7+ α	−			片	Fig.60-161
須恵器	蓋 3	R-006	−	1.0+ α	−			片	Fig.60-160
金属製品	鉄滓	R-007							

S-2 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.6+ α	−			片	Fig.68-193
須恵器	蓋 3	R-002	−	2.7+ α	−	−		片	Fig.68-194
須恵器	坏	R-003	(19.6)	3.8+ α	−			片	Fig.68-195

S-3 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	大皿 c　ヘラ	R-001	(23.0)	4.1	(17.4)	−		1/5	Fig.69-196

S-5a 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏×皿	R-001	−	1.6+ α				片	Fig.33-71
須恵器	坏×皿	R-002	−	1.4+ α	−			片	Fig.33-72
須恵器	蓋 3	R-003	−	1.05+ α	−			片	Fig.33-69
須恵器	蓋 3	R-004	−	1.2+ α	−			片	Fig.33-70
瓦	塼	R-005						片	

S-5b 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.1+ α	−			片	Fig.34-73
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.2+ α	−			片	Fig.34-74
須恵器	蓋 3	R-003	−	1.05+ α	−			片	Fig.34-75
須恵器	皿	R-004	−	2.7+ α	−			片	Fig.34-77
須恵器	蓋 3	R-005	−	1.4+ α	−			片	Fig.34-76
土師器	高坏	R-006	−	1.55+ α	−			片	Fig.34-79
須恵器	皿	R-007	−	1.85+ α	−	○		片	Fig.34-78

S-5d 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	椀	R-001	−	3.7+ α	−			片	Fig.35-81
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.3+ α	−			片	Fig.35-80

S-6 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.7+ α	−			片	Fig.70-198
須恵器	蓋 c	R-002	−	1.7+ α	−	○		1/5	Fig.70-197
須恵器	高坏×蓋 3	R-003	−	1.0+ α	−			片	Fig.70-200
須恵器	壺蓋	R-004	−	2.5+ α	−			片	Fig.70-199

S-8 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.0+ α	−			片	Fig.71-201

S-10c 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.15+ α	−			片	Fig.18-2

S-10d 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c ×皿 c	R-001	−	1.4+ α	−	−		片	Fig.17-1

S-11 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c	R-001	−	2.75+ α	−			片	Fig.72-203
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.1+ α	−	−		片	Fig.72-202

S-12 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	坏 a ×皿 a	R-001	−	1.75+ α	−	−		片	Fig.73-204

S-14 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	(11.9)	1.4+ α		○		1/6	Fig.74-205
石製品	平玉石	R-002	縦 1.1	横 1.0	厚さ 0.55	重さ 1.0g		完形	Fig.74-206

S-18 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	皿	R-001	−	2.05+ α	−			片	Fig.75-207

S-20a 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.8+ α	−	−		片	Fig.30-63
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.7+ α	−	−		片	Fig.30-64
須恵器	蓋 3	R-003	−	1.5+ α	−			片	Fig.30-65

S-20c 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土製品	鞴羽口	R-001	−	5.95+ α	−			片	Fig.26-50
土師器	甕 a	R-002	(15.3)	3.15+ α	−			片	Fig.26-49
須恵器	蓋 3	R-003	−	0.8+ α	−			片	Fig.26-48

S-20d 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	鉢	R-001	−	3.4+ α	−			片	Fig.27-55
須恵器	蓋 3	R-002	(15.1)	1.15+ α	−			片	Fig.27-51
須恵器	坏 c ×皿 c	R-003	−	1.15+ α	−	○		片	Fig.27-53
須恵器	高坏	R-004	−	1.2+ α	−			片	Fig.27-54
須恵器	硯 (R-007 と同一の可能性あり)	R-005	−	3.75+ α	−			片	Fig.27-56
須恵器	蓋 3	R-006	(15.6)	2.1+ α	−	−		1/8	Fig.27-52
須恵器	硯 (R-005 と同一の可能性あり)	R-007	−	4.9+ α	−			片	Fig.27-57
石製品	平玉石	R-008						完形	

Tab.6-1　大宰府条坊跡第 265 次調査　遺物計測表

A: 内底ナデ　B: 板状圧痕　なお計測値の（ ）は復元値

S-20e 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏×皿	R-001	−	2.2+ α	−			片	Fig.28-61
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.1+ α	−			片	Fig.28-58
須恵器	蓋 3	R-003	−	1.3+ α	−			片	Fig.28-59
須恵器	蓋 3	R-004	−	0.9+ α	−			片	Fig.28-60
金属製品	鉄滓	R-005	縦 2.6	横 3.5	厚さ 2.0	重さ 16.2g			

S-20g 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 c3（墨書）	R-001	(15.8)	2.2	−	−		1/4	Fig.29-62

S-21 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	皿	R-001	−	1.0+ α	−			片	Fig.76-208

S-24 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 c	R-001	−	1.2+ α	−	○		片	Fig.77-209
須恵器	蓋 3	R-002	(16.2)	1.45+ α	−	−		1/8	Fig.77-210
須恵器	蓋 3	R-003	(15.0)	0.8+ α	−	○		1/8	Fig.77-211

S-25a 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏	R-001	−	1.85+ α	−			片	Fig.41-109
須恵器	蓋 3	R-002	−	0.95+ α	−			片	Fig.41-108

S-25a 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.95+ α	−			片	Fig.41-110
金属製品	鉄滓	R-002	縦 2.55	横 2.95	厚さ 1.4	重さ 10.2g			

S-25d 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.9+ α	−	−		片	Fig.38-91
須恵器	坏	R-002	−	3.45+ α	−			片	Fig.38-93
土師器	甕	R-003	−	3.25+ α	−			片	Fig.38-94
須恵器	蓋 3	R-004	−	2.55+ α	−	−		片	Fig.38-92
土師器	坏	R-005	−	2.1+ α	−			片	Fig.38-95

S-25e 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏	R-001	−	3.7+ α	−			片	Fig.39-99
須恵器	小蓋 c3	R-002	(13.2)	1.2+ α	−	○		1/4	Fig.39-98
須恵器	蓋 3	R-003	−	0.85+ α	−	○		片	Fig.39-97
須恵器	蓋 c3	R-004	12.7	1.5	−			1/2	Fig.39-96
金属製品	鉄滓	R-005	縦 1.5	横 2.45	厚さ 1.2	重さ 3.7g			

S-25e 掘方にぶい褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	小蓋 3	R-001	(12.4)	1.3+ α	−	○		1/5	Fig.39-101
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.05+ α	−			片	Fig.39-100
須恵器	坏	R-003	−	2.6+ α	−			片	Fig.39-102

S-25f 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	壺蓋	R-001	(14.0)	2.9+ α	−	−		1/7	Fig.40-104
須恵器	皿	R-002	−	2.15+ α	−			片	Fig.40-106
須恵器	坏	R-003	−	2.7+ α	−			片	Fig.40-105
須恵器	蓋 3	R-004	−	1.3+ α	−			片	Fig.40-103
須恵器	小壺	R-005	−	2.85+ α	−			片	Fig.40-107

S-25h 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	蓋 3	R-001	−	1.2+ α	−			片	Fig.36-83
須恵器	坏	R-002	−	2.6+ α	−			片	Fig.36-82

S-25i 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c	R-001	−	1.4+ α	−	○		片	Fig.42-113
須恵器	蓋 c	R-002	−	1.5+ α	−	−		片	Fig.42-111
須恵器	蓋 3	R-003	−	1.1+ α	−			片	Fig.42-112
須恵器	皿	R-004	−	1.4+ α	−			片	Fig.42-114
土師器	坏	R-005	−	2.5+ α	−			片	Fig.42-115
須恵器	不明	R-006						片	

S-25i 掘方褐灰色粘質土上層

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏	R-001	−	2.9+ α	−			片	Fig.42-117
須恵器	蓋 3	R-002	(13.9)	1.8	−	○		片	Fig.42-116
土師器	甕	R-003						片	

S-25i 掘方褐灰色粘質土下層

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	甕	R-001	(13.1)	5.2+ α	−	○		1/4	Fig.42-118

S-25k 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏	R-001	−	4.1+ α	−	−		片	Fig.37-87
須恵器	坏	R-002	−	2.8+ α	−			片	Fig.37-88
須恵器	鉢	R-003	−	2.75+ α	−			片	Fig.37-90
須恵器	蓋 3	R-004	−	1.3+ α	−			片	Fig.37-84
須恵器	高坏	R-005	−	1.6+ α	−			片	Fig.37-89
須恵器	蓋 3	R-006	(15.9)	1.25+ α	−	○		片	Fig.37-86
須恵器	蓋 3	R-007	−	1.2+ α	−			片	Fig.37-85

S-27 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.4+ α	−			片	Fig.78-212

S-28 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	坏 a	R-001	(11.7)	3.6	(8.0)	−		1/4	Fig.79-213

S-30c 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 c3	R-001	(18.2)	2.45	−	○		1/3	Fig.43-119

S-33 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c	R-001	−	2.1+ α	−			片	Fig.80-214

S-34 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	椀 c1	R-001	−	1.4+ α	(8.4)	−		1/5	Fig.66-183
瓦	平瓦	R-002						片	

S-34 明褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.25+ α	−			片	Fig.66-184
土師器	坏 c1	R-002	−	1.3+ α	−	−		片	Fig.66-186
須恵器	坏 c（肥後産）	R-003	−	3.75+ α	(12.05)	○		1/7	Fig.66-185
瓦	瓦玉	R-004						片	Fig.66-187
金属製品	鉄滓	R-005	縦 1.6	横 2.2	厚さ 1.3	重さ 4.6g			

S-34 明褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
ガラス製品	白玉	R-001	長さ 0.65	幅 0.75	厚さ 0.5			完形	Fig.66-188

S-35a 掘方にぶい黄橙色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	蓋 c	R-001	−	1.2+ α	−	−		片	Fig.44-120

S-35b 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
石製品	平玉石	R-001	縦 1.25	横 0.95	厚さ 0.4	重さ 0.8g		完形	Fig.45-121

S-35c 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.5+ α	−			片	Fig.46-122
土師器	皿	R-002	−	2.4+ α	−			片	Fig.46-123
金属製品	鉄滓	R-003	縦 1.65	横 2.6	厚さ 0.85	重さ 4.2g			

S-35e 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	(18.05)	1.28+ α				片	Fig.47-124
土師器	蓋 c	R-002	−	0.7+ α	−			片	Fig.47-125
金属製品	鉄滓	R-003	縦 2.55	横 3.2	厚さ 1.4	重さ 11.6g			

S-35f 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
弥生土器	不明	R-001						片	

S-35g 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.75+ α	−			片	Fig.48-126
土師器	蓋 3	R-002	−	0.95+ α	−			片	Fig.48-129
須恵器	坏	R-003	−	2.9+ α	−			片	Fig.48-127
須恵器	坏 c	R-004	−	1.95+ α	−	○		片	Fig.48-128
土師器	壺 a × c	R-005	−	3.7+ α	−			片	Fig.48-130
金属製品	鉄滓	R-006	縦 5.3	横 6.0	厚さ 2.0 ～ 2.5	重さ 62.8g			
土師器	不明	R-007						片	

S-35h 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	(14.3)	2.0+ α	−	−		1/10	Fig.49-131
黒色土器	不明	R-002						片	

S-40e 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	(15.7)	1.9+ α	−			片	Fig.50-132
土師器	蓋 3	R-002	−	0.95+ α	−			片	Fig.50-133

S-40e 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 c3	R-001	(13.4)	1.65	−			1/8	Fig.50-134

S-43 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	坏	R-001	−	3.3+ α	−			片	Fig.81-216
須恵器	蓋 3	R-002	−	0.85+ α	−			片	Fig.81-215

S-43 にぶい褐色砂質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	坏 a	R-001	−	2.9+ α	(7.8)	○	○	1/2	Fig.81-217
土師器	皿	R-002	−	2.0+ α	−			片	Fig.81-218

S-45c 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.75+ α	−			片	Fig.52-136

S-45e 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	壺	R-001	−	5.1+ α	9.75	○		1/2	Fig.53-137

S-45f 掘方にぶい褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 d	R-001	−	1.35+ α	−	○		片	Fig.51-135

S-51 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
金属製品	鉄滓	R-001	縦 2.2	横 2.0	厚さ 1.3 ～ 1.45	重さ 9.5g			

S-53 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.0+ α	−			片	Fig.59-157
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.05+ α	−			片	Fig.59-158

S-54 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	甕	R-001	−	2.5+ α	−			片	Fig.62-173
須恵器	甕	R-002	−	2.35+ α	−			片	Fig.62-172
須恵器	高坏	R-003	−	1.6+ α	−			片	Fig.62-171

S-54 明褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
石製品	平玉石	R-001	縦 1.45	横 1.0	厚さ 0.3	重さ 0.7g		完形	Fig.62-174
石製品	平玉石	R-002	縦 1.4	横 1.15	厚さ 0.3	重さ 0.7g		完形	Fig.62-175
石製品	平玉石	R-003	縦 1.25	横 1.1	厚さ 0.4	重さ 0.8g		完形	Fig.62-176

S-55c 柱痕灰褐色粘土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏	R-001	−	3.25+ α	−			片	Fig.54-139
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.25+ α	−	−		片	Fig.54-138
須恵器	坏 c	R-003	−	2.05+ α	−	−		片	Fig.54-141
須恵器	坏 a	R-004	(13.2)	3.0	(8.1)	○		片	Fig.54-140

S-57 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏	R-001						片	
土師器	坏 c	R-002						片	
須恵器	壺蓋	R-003						片	
土師器	皿	R-004						片	
土製品	不明	R-005						片	

S-58 柱痕褐灰色粘土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.5+ α	−			片	Fig.64-178

S-60a 柱痕灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 a	R-001	(14.2)	3.1	(10.8)	○		1/6	Fig.55-142

S-60a 掘方にぶい橙色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.9+ α	−			片	Fig.55-143
須恵器	坏	R-002	−	3.5+ α	−			片	Fig.55-144

Tab.6-2　大宰府条坊跡第 265 次調査　遺物計測表

A: 内底ナデ　B: 板状圧痕　なお計測値の（ ）は復元値

S-60b 柱痕褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3　　ヘラ	R-001	−	1.5+ α	−	○		1/6	Fig.57-147
須恵器	坏	R-002	(12.4)	2.9+ α	−			片	Fig.57-148
須恵器	坏×皿	R-003	−	1.4+ α	−			片	Fig.57-149

S-60b 掘方灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c	R-001	−	2.2+ α	−	○		片	Fig.57-152
須恵器	坏	R-002	−	2.7+ α	−			片	Fig.57-150
須恵器	坏	R-003	−	3.0+ α	−			片	Fig.57-151
土師器	坏 c	R-004	−	2.2+ α	(7.8)			片	Fig.57-153
土師器	皿	R-005	−	2.4	−			1/8	Fig.57-154
石製品	平玉石	R-006	縦 1.5	横 1.3	厚さ 0.5	重さ 1.5g		完形	Fig.57-155

S-60d にぶい黄橙色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	0.9+ α	−			片	Fig.56-146
須恵器	蓋 c	R-002	−	1.15+ α	−	−		片	Fig.56-145
瓦	平瓦	R-003						1/4	
瓦	平瓦	R-004						片	
瓦	平瓦	R-005						1/3	
瓦	平瓦	R-006						1/2	
瓦	平瓦	R-007						片	

S-62 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	皿	R-001	−	1.5+ α	−			片	Fig.82-219
白磁	椀 1-1	R-002						片	

S-65a 掘方褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
瓦	平瓦	R-001						片	

S-65b 柱痕灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	椀 c2	R-001	−	2.5+ α	−	○		1/3	Fig.58-156

S-65c 柱痕灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	不明	R-001						片	

S-66 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 a3	R-001	(12.7)	1.7	−	○		1/4	Fig.67-190
須恵器	蓋	R-002	−	1.35+ α	−	○		1/6	Fig.67-189
土師器	坏 c	R-003	−	1.7+ α	−	−		片	Fig.67-192
須恵器	蓋 3	R-004	−	1.4+ α	−			片	Fig.67-191
金属製品	鉄滓	R-005	縦 2.15	横 2.8	厚さ 0.85	重さ 6.8g			

S-69 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.4+ α	−			片	Fig.65-179
須恵器	蓋 3	R-002	−	1.2+ α	−			片	Fig.65-180
須恵器	皿×坏	R-003	−	1.3+ α	−			片	Fig.65-181
土師器	椀 c2	R-004	−	2.2+ α	−	−		片	Fig.65-182
金属製品	鉄滓	R-005	縦 2.1	横 2.55	厚さ 1.4 ～ 1.5	重さ 5.8g			

S-71 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏	R-001	−	2.2+ α	−			片	Fig.83-220

S-72 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.4+ α	−	○		片	Fig.63-177

S-83 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
土師器	坏 d	R-001	−	2.7+ α	−	−		片	Fig.84-221

S-91 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.3+ α	−			片	Fig.85-222

S-96 褐灰色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	坏 c	R-001	(14.8)	4.0	(9.6)	○		片	Fig.86-223

S-98 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.2+ α	−			片	Fig.87-224
須恵器	小坏 c	R-002	−	1.2+ α	−	−		片	Fig.87-225

S-99 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	蓋 3	R-001	−	1.2+ α	−	○		片	Fig.88-226

S-102 灰褐色粘質土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
須恵器	皿×坏	R-001	−	2.8+ α	−			片	Fig.89-227

表土

器別	器 種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	Fig 番号
緑釉陶器	皿（東海系）	R-001	−	1.4+ α	(8.2)			1/8	Fig.93-239
須恵器	壺	R-002	−	6.5+ α	−			片	Fig.93-238
鉄製品	釘	R-003	長さ 3.75+ α	幅 1.7	厚さ 1.1	重さ 3.6g			Fig.93-240
石製品	平玉石	R-004	縦 1.25	横 1.05	厚さ 0.45	重さ 0.9g		完形	Fig.93-241
金属製品	鉄滓	R-005	縦 2.1	横 3.5	厚さ 1.65	重さ 19.1g			
金属製品	鉄滓	R-006	縦 2.5	横 2.2+ α	厚さ 1.65	重さ 8.2g			
長沙	壺	R-007						片	
龍泉窯	皿 1-1	R-008						片	

Tab.6-3　大宰府条坊跡第 265 次調査　遺物計測表

写 真 図 版

※掲載写真ならびに CD-ROM 搭載写真

■本書に掲載している写真

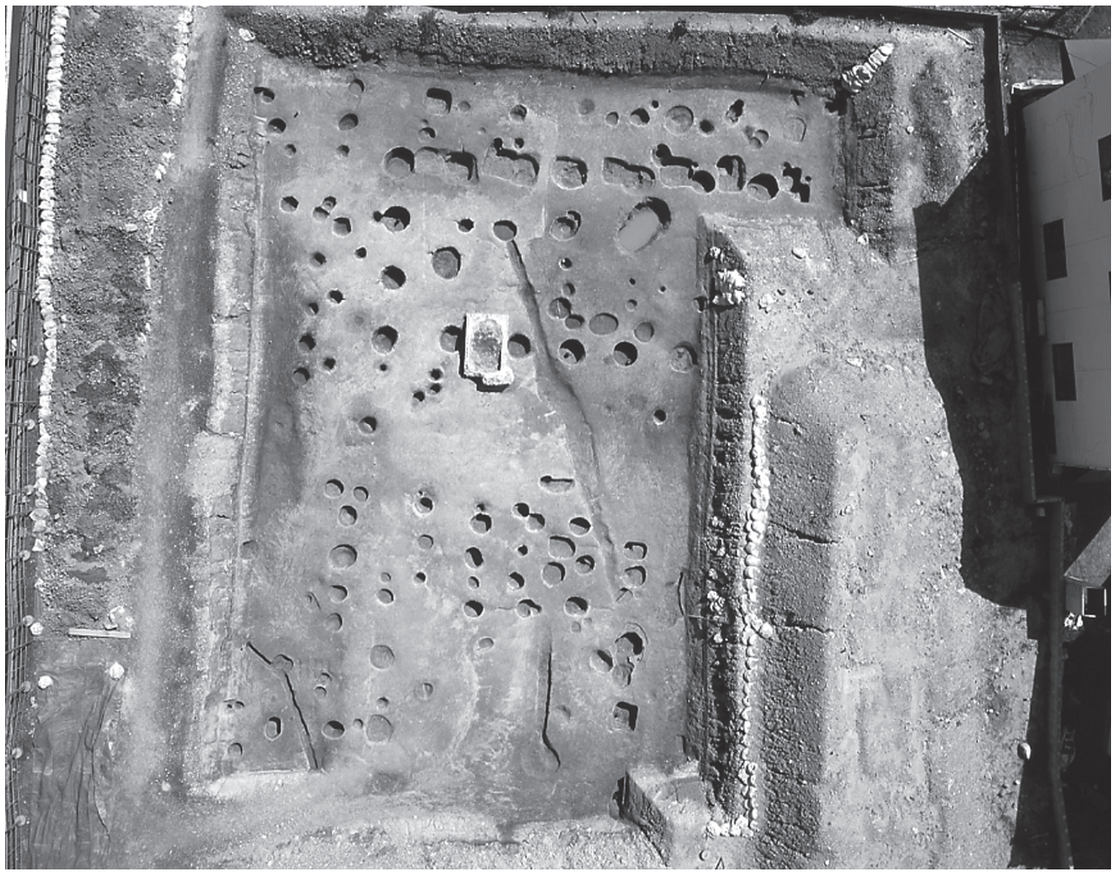
モノクロ情報では、伝達できる情報量に限りがあるため、カラー情報として CD-ROM へカラー写真を搭載している。

■ CD 搭載写真

遺構・遺物に関するカラー写真を CD-ROM へ搭載している。参照していただくためには、CD-ROM 搭載の『はじめにお読みください。』をお読みいただき、写真参照を行っていただきたい。

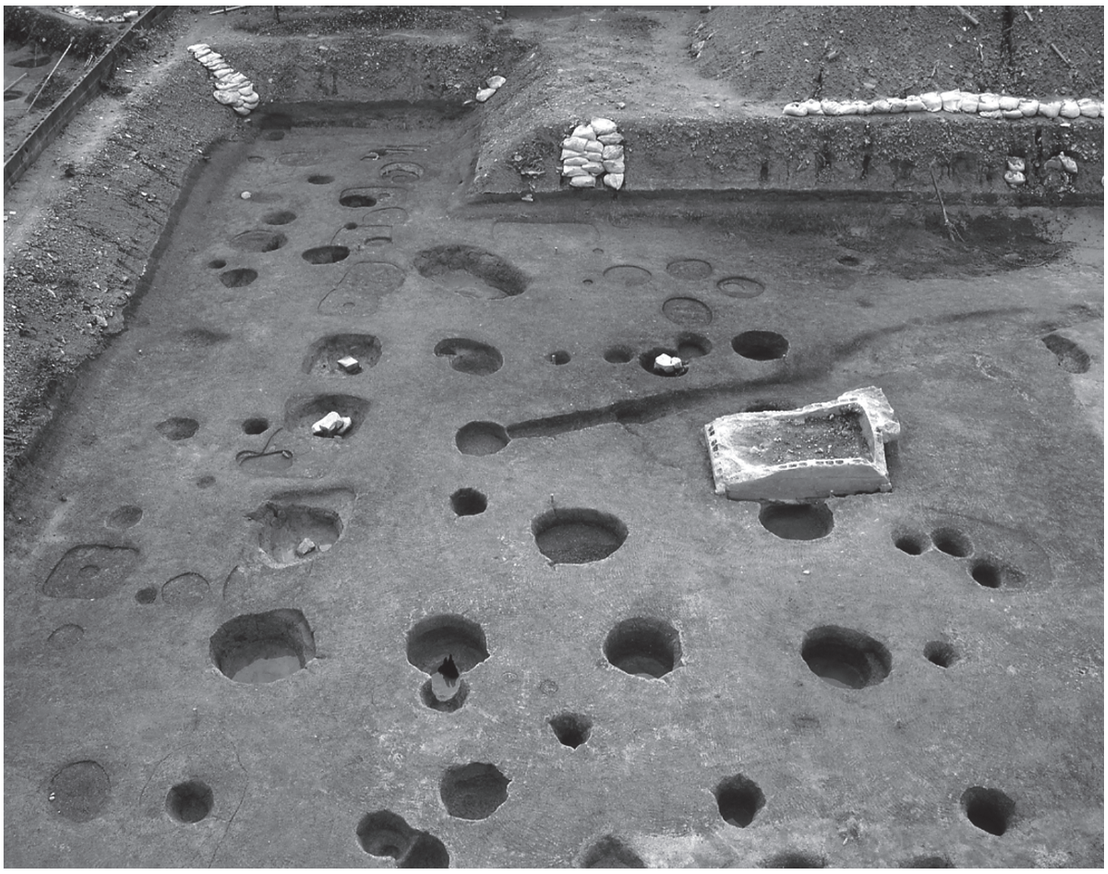
※遺物写真中の番号は、図版番号を示す。

5 大宰府条坊跡第265次本文　63-82(まとめ・表・写真).indd　76　2008/11/04　17:23:56



調査区全景（真上上空）

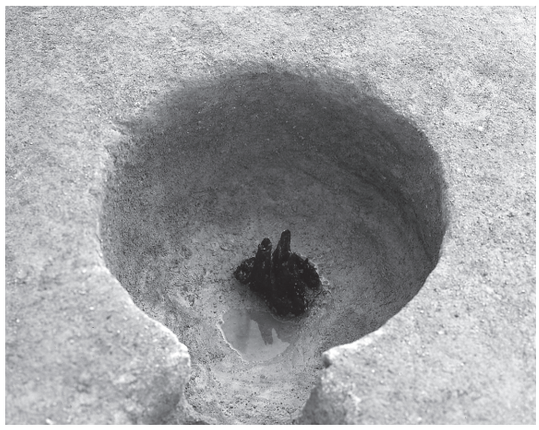
SB001 遺構検出状況（東より）



SB001 完掘全景（東より）

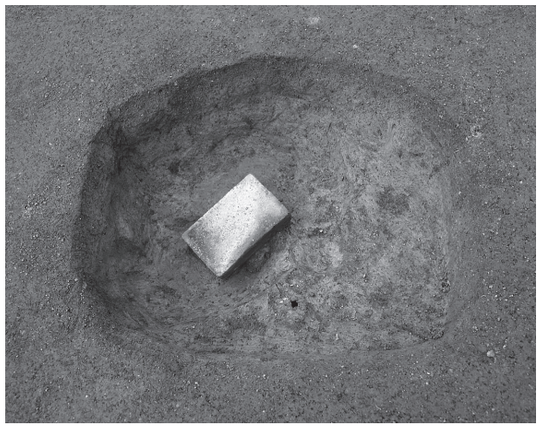
調査区北側完掘全景（北より）

SB001a 根石検出状況（東より）



SB001c 柱材検出状況（東より）

SB001f 根石検出状況（南より）



SB001g 根石検出状況（南より）

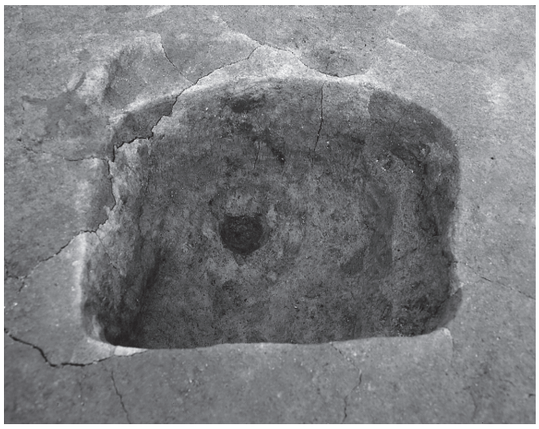
SB001m 完掘（西より）

SB001i 断面（南より）

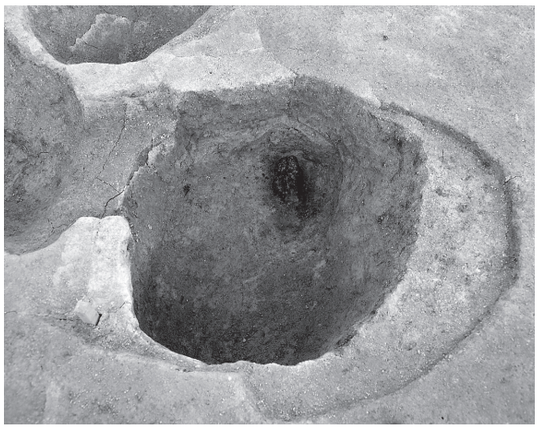
SB001i 根石検出状況（南より）

SB001k 根石検出状況（東より）

SB050a・SB055a 断面（東より）



SB055b 完掘（西より）



SB055c 柱材検出状況（西より）

SB070c 根石検出状況（西より）

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと
書名	大宰府条坊跡　39
副書名	第 265 次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	104 集
編著者	中島恒次郎　堀苑孝志　村上孝司　パリノ・サーヴェイ㈱
編集機関	太宰府市教育委員会　岡三リビック株式会社
所在地	〒 818 － 0198　福岡県太宰府市観世音寺 1 － 1 － 1　　TEL　092-921-2121
	〒 108 － 0023　東京都港区芝浦 4 － 16 － 23　AQUACITY 芝浦　　TEL　03-5442-1980
発行年月日	2008 年　9 月　10 日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	所在地	コード 市町村	 遺跡番号	座標（国土座標第Ⅱ系） X	 Y	調査期間 開始	 終了	調査面積 ㎡	調査原因
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡 第 265 次	右郭三条七坊	太宰府市 坂本 2 丁目	402214	210044-265	56795.00	-45570.00	20060719	20061005	401.61	共同住宅建設

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
大宰府条坊跡 第 265 次	大宰府条坊	奈良時代 平安時代	柵列 2 掘立柱建物跡 13 土坑 2 溝 1	須恵器　土師器 国内外の陶磁器	

太宰府市の文化財第 104 集

大宰府条坊跡 39

第 265 次調査

2008. 9. 10

発　行　太宰府市教育委員会
太宰府市観世音寺 1 丁目 1 番 1 号

編　集　岡三リビック㈱ 埋蔵文化財調査室
東京都港区芝浦四丁目 16 番 23 号

印　刷　株式会社　三光
福岡市博多区山王一丁目 14 － 4

5 大宰府条坊跡第265次本文　63-82(まとめ・表・写真).indd　82　2008/11/04　17:24:04